
C i t y F a n g

葉月佳音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

C i t y F a n g

【Nコード】

N 9 6 0 5 L

【作者名】

葉月佳音

【あらすじ】

20XX年、カルト教団《青銀天聖教団》によって引き起こされた連続児童誘拐事件。

その被害者の一人であり、教団の信者である少年に救われた過去を持つ少女・星海那々は、五年の時を経て、彼の面影を持つ銃工の青年・天瀬斎に出会う……。

銃規制が緩和された仮想東京で繰り広げられる、ダークサイド・ガンアクション。

Prologue (前書き)

この作品には流血・暴力表現及びアンダーグラウンドな表現が点在します。

苦手な方はお読みにならないことをお勧めします。

また、銃器や犯罪を推奨するものでもありません。あしからずご了承ください。

Prologue

ここに来てから、どれだけの間が経ったのだろうか。

膝に顔を埋めて、ため息をついた。拘束はされていないが、逃げ出せる状態でもない。

カーテンが閉まった窓が一つだけの、殺風景なプレハブの部屋。そこに、自分を含めて四人の子供がいた。そして、見張りのようにドアの傍に椅子を置いて座っている、面をつけた人間が一人。足を組み、黒い金属の塊　オートマチックの拳銃を、手持ち無沙汰に弄んでいる。オペラ座の怪人みたいなのっぺりした面をいつもつけていて、素顔を見たことはないが、今まで自分たちに危害を加える様子はなかった。

下校途中にいきなり三人の男に誘拐され、ここに連れて来られた。それからずっと、ここに閉じ込められている。ドアに鍵がかかっているわけでも、窓に鉄格子がはまっているわけでもないが、銃を持った見張りの存在は簡単にその代わりを務めていた。逃げられない。唯一チャンスに思えるトイレに立つ時は、別の人間が一人呼ばれ、目隠しをされて連れて行かれた。

自分がここに来た時は、他に五人の子供がいた。三人が出て行き、一人が新しく入って来て、現在は四人。見たところ自分が一番年上で、他は大体小学校低学年くらい。一人、小学校にも上がっていないさそうな男の子がいた。

「交替するぞ」

ドアが開いて、やはり面をつけた、大柄な男（だろう、声からして）が入って来た。一番小さな男の子が、泣き出しそうな顔になってしがみついてくる。最初に怒鳴りつけられて以来、子供たちはこの男を怖がっていた。言動も粗暴な感じの男なのだ。

男は虫の居所が悪いらしく、前任者が立った後の椅子にどかりと腰かけた。

「おい、そのガキ。こっちへ来い」

指差されて、最年少の五歳くらいの子がびくりとする。ためらうと、間髪入れず怒声が飛んできた。

「来いっつつてんだろぅが！」

「やめてよ！ 怖がつてるじゃない！」

思わず、声が出ていた。はっとした時には、男がこちらを向いていた。

「……刃向かうガキには、お仕置きだなあ」

ねっとりした声で、男は言った。立ち上がり、こちらが逃げる間もなく、頬を張られた。

「自分の立場が分かってねえようだな。刃向かうようなら、多少痛めつけてもいいって言われてんだ」

倒れ込んだところで腹を蹴られた。痛みにも、思わず身体を丸めて目を閉じる。子供たちが泣き出すのがかすかに聞こえた。

ガウン。

轟音に、室内の音が消えた。恐る恐る目を開けると、大柄な男が右足を押さえ、うずくまって獣のように呻き声をあげている。それを見下ろすのは、今まで見張りをしていた人物だった。その手には、薄く硝煙を上げる銃が握られていた。

「……ペインレス・ドッグ……てめえ……！」

半身を起こした男に向け、仮面の人物はためらいなく引鉄を引いた。左肩を挟まれ、わめきながら男は転げ回る。その鳩尾を蹴って黙らせると、仮面の人物は手を差し伸べてきた。

「立てる？」

思っていたより若そうな声だった。自分より、少し年上くらい。大人の男の人、といった感じではなかった。手を借りて立ち上がると、彼が服の埃を払ってくれた。

「ついて来て。ここから出るんだ」

彼の言葉に、一瞬啞然とした。出る？　ここから？

だが彼は、さっさと行動を起こしていた。ドアを開け、周囲を見回して子供たちを手招いた。

「おいで。今なら人がいない」

半信半疑ながら、従った。何となく、彼が本気で自分たちを助けるようとしているのが分かった。他の子供たちも、それが分かるのだろう、怖がるでもなくついて来る。さっき、暴行してきた男を倒したのも効いているのだろう。

プレハブが建つのは、どこか大きな施設の外れのようなだった。少し離れたところに大きな建物があったのは、窓から外を覗いて分かっている。そういえば、この人には何をしても怒られた記憶がないと、ぼんやりと思い当たった。大柄な男の方は、自分たちが窓に近付くだけで怒ったのだが。

彼に連れられて、建物の方に近付いていく。彼の目当ては、建物の裏口に停まっている車だった。生活物資を運んで来たのか、バンの車体には社名らしき文字が書いてある。

彼は近付いて行き、運転席に誰もいないのを確かめて、自ら運転席に座った。運転手はすぐ戻るつもりなのだろう、キーがつけっ放しになっている。彼らにとっては好都合だった。

「さ、乗るんだ」

助手席のロックを解除してもらい、車に乗り込んだ。小さい子供たちは、後部座席へ。最後に助手席へ落ち着いたこちらへ、彼は顔を向けた。といっても、仮面のままなので少々不気味だ。

「ああ、もうこれはいいや」

気づいたらしく、彼は仮面を外した。
驚いた。

テレビのアイドルタレント顔負けの、整った顔立ちだった。どう見ても、高校生くらいの少年。少し細められた目が優しくそうだ。間違っても銃をぶっ放し、車を強奪するような人間には見えない。

「ベルトして。気づかれる前に入る」

振り向くと、裏口から運転手らしき中年男が出て来るところだった。イグニッションキーを回して、エンジンがかかると、その音にようやく気づいたのか、中年男が慌てて駆け寄って来る。

だが、遅い。

サイドブレーキを解除、ギアはドライブ。少年がアクセルを思い切り踏み抜いた。バンはもの凄い勢いで飛び出し、建物の間を縫うように走って行く。少年はちらりとミラーを見やり、ドアポケットに突っ込んでいた拳銃を取り出した。

「みんな、頭抱えて伏せて。気づかれた」

その瞬間、銃声と共に左のサイドミラーが吹っ飛んだ。舌打ちした少年が、左腕だけで大きくハンドルを切る。前方に、大きな門が見えてきた。

「あ、あれ……！」

その門には、見覚えがあった。以前、何かのテレビ番組で見た覚えがある。振り返ると、目に飛び込んできた大きな建物も記憶にある。

「青銀天聖教団……？」

ここ数年で急速に規模を拡大させた、新興宗教法人。名前だけは知っているが、関わりなどまったくない。信じられない思いで呟くと、少年はあっさり肯定した。

「そう。みんなは、家族にテロを手伝わせるための人質として誘拐されたんだ」

片棒担いで言う台詞じゃないけど、と苦笑し、少年はウィンドウを下ろす。銃を握った右腕を一杯に伸ばした。トリガーを引き絞り、同時にクラクションを盛大に鳴らす。

出入りの確認をしようとした係員が、足下への着弾に泡を食って飛びのいた。その鼻先を、暴走車は駆け抜けていく。

教団施設を出ると、登山道のような人気のない道が伸びている。バンが疾走するそのすぐ右後方に、黒のカルディナが喰らいついてきた。

カルディナの窓から、銃口が火を噴いた。

ボディに着弾し、がんと音をたてる。フロントガラスの右端に、蜘蛛の巣のようなヒビがさっと走った。少年が銃のグリップで視界を妨げるフロントを叩き壊す。その拍子に、少年の右腕が血に染まっているのを見てしまった。

「怪我、」

「うん、ドジ踏んじやった。そこそこ深いね」

とんでもないことをあつさりと言う彼に、痛がる様子はない。

「……痛く、ないの？」

「うん、昔からね、ちよつと痛覚神経おかしいらしくて。君こ

そ、怖くない？」

「なにが？」

「色々。誘拐されたり、銃で撃たれたり」

「だって 助けてくれるんでしょ？ あなたが」

そう言つと、少年は面食らつたような顔でこちらを見た。ややあつて、破顔する。

「初めて言われた。そんなこと」

緩い下り坂、直線。少年は、銃から空になったマガジンを抜き、ズボンに挟んだ新しいマガジンを取り出して入れ替え、スライドを引いた。数秒の早業。そして血塗れの右腕を窓の外に伸ばす。銃を持つたまま。

「じゃあ、期待に應えなきゃね。しつかり掴まつて」

大きなカーブ。ハンドルを右に切りながら窓から身を乗り出し、曲がりきるまでの数秒ほどで全弾を撃ち込んだ。吐き出された残弾すべてが、カルディナのフロントやボンネットを襲う。

カルディナがコントロールを失い、道路脇のガードレールに突っ込んで行つた。

「……終わったよ」

そう言われて、やっと頭を上げた。少年はのろのろと、銃をドアポケットに落とし込む。

そつと少年を見上げると、彼の顔色は蒼白になり、脂汗が浮かんでいた。右腕からの出血は止まっていなかった。それどころか、よく見ると右の胸の辺りにも、血が広がっていた。身を乗り出した時に撃たれたのだろう。こんな状態で、しかも運転しながらの射撃で追手を仕留めたのだ。

「大丈夫？ 顔色、真っ青だよ？」

「そう？ でも、もうちょっとだから」

何が？ そう訊こうとして、巡らせた視線の先に答えを見つけた。
警察署。

「……心配しないで。みんなは、ちゃんと家に帰すから」

警察署前のロータリーに、ぼろぼろになったバンが滑り込んだ。ブレーキを踏み、少年は気が抜けたようにハンドルに突っ伏す。クラクションが派手に鳴り響き、玄関に立っていた警官が駆けて来るのが見えた。

「しっかりして！ ねえ、大丈夫？」

どうしていいか分からなくて、とりあえず少年の背中をさする。見当違いとは思っても、そうせずにはいられなかった。

「……大丈夫、痛くないから」

「そうじゃなくて！」

「どうしたんだ、大丈夫か？ 何があつた？」

事故車のような有様に、警官が驚いて矢継ぎ早に尋ねてくる。少年は顔を上げると、わずかに笑みを浮かべた。

「……すいません、この子たちを保護してもらえますか？ 誘拐されて……逃げて、来たんです。僕は 青銀天聖教団 の者です」

「逃げて来た？ とにかく、君たちは降りなさい。彼も、病院へ」

「うん」

助手席から降りて、後部座席の子供たちを下ろすのを手伝う。そして、運転席のドアに手をかけた。ようやく上体を起こした少年と目が合った。目を細めて、彼は言った。

「……さよなら、だよ」

エンジンは、かかったままだった。後部座席のドアを開け放したまま、バンは飛び出した。あつという間にロータリーを出て、見えなくなってしまう。呆然とそれを見送っていた警官と子供たちの中で、自分一人だけが、弾かれたように駆け出していた。道路に出た時にはもう、バンの姿はどこにもなかった。

さよなら。もう会えない。

膝の力が抜けて、そこに座り込んだ。

いつの間にか泣いていることも、気づかなかった。

信号無視とスピード違反の連続で、どれだけ走っただろうか。

いつしか辿り着いていた人気のない山道で、少年はバンを乗り捨てた。エンジンを切ると、とたんに襲ってくるのは静寂。遠くからかすかに潮騒の音が聞こえるのは、海が近いからだろう。

バンを降りると、ふとドアポケットの銃のことを思い出した。そしてついでに、全弾を使い切ったことも思い出す。

「……一発くらい、残しときゃよかった」

苦笑して、ふらりとその場を離れた。頭がくらくらする。血を流しすぎたらしい。

ついに目が回って、倒れ込んだ。何とか仰向けになると、空を見上げる。

静かだ。

痛みはない。物心ついた時から、この身体に痛覚はなかった。いっつからか ベインレス・ドッグ 痛がらない犬 と呼ばれ、銃弾が飛び交う世界に身を晒してきた。

だがそれも、もう終わる。

ふと、さっきの少女のことを思い出した。痛みなど感じない自分

の背中をさすってくれた、あたたかい手。昔、同じことをしてくれた人がいた。

(……もうすぐ、いくよ)

頭が重い。急激に視野が狭くなった。このまま引き込まれてしまおう。

そつと目を閉じた。

遠くからかすかに、エンジンの音が聞こえた気がしたが、すぐにどうでもよくなった。

二〇XX年、七月。神奈川と山梨の県境に近い山中に本部を置く青銀天聖教団 に、強制捜査のメスが入った。

きっかけは、相次いだ子供たちの誘拐事件だった。中央官庁や金融機関、空港、JR中央司令室などに勤める職員の子供を誘拐し、その命と引き換えに職場に爆弾を仕掛けるよう要求したのだ。警察に通報すれば子供の命はないと脅されたものの、要求に従えばテロの片棒を担ぎ、最悪多くの死者を出すことになる。刻々と迫るタイムリミットに、被害者たちは苦渋の選択を強いられていた。

しかしその状況を、一つの事件が打破した。教団の裏側に属する少年が、子供たちを連れて警察署に出頭してきたのだ。彼は誘拐の事実を告げ、教団の関与を仄めかした。子供を取り戻した家族も口を開き始め、異例ともいえる早期の強制捜査へと繋がった。

逮捕者三十六人に上ったこの事件で、青銀天聖教団 は事実上崩壊した。教祖以下幹部は軒並み逮捕され、追い討ちをかけるように、違法薬物の密造や銃の密輸なども明るみに出たことで、教団の裏の顔を知らなかった一般信者も雪崩を打つように退団した。

強制捜査の足掛かりを作った少年については、子供たちを警察署に送り届けたその足で姿を消し、すぐに敷かれた検問も彼を捉える

ことはできなかった。その後、目撃情報を総合して辿り着いた人通りの少ない海岸の崖下で、逃走に使われたと思しきバンを発見。バンはフロントの半分が損傷、海底に突っ込んだような状態で発見され、車内に運転手の姿はなかった。しかしシートには多量の血痕が見つかり、保護された子供たちの証言や現場の状況から、捜査本部は少年が運転を誤って転落、もしくは自殺し、遺体は海に流されたものとの見解に達した。

少年には戸籍がなく、ただ ペインレス・ドッグ という通称だけが、警察内部の資料に残った。

以後、彼の情報は公表されていない。

レイアウト設定の勝手が分からずちょっと時間が開いてしまいました……。

彼は、目を細めて微笑^{わら}っていた。

『……さよなら、だよ』

待って！ 置いてかないで！

息が切れるほど走っても、追いつけない。バンはどんどん遠ざかって、そして。

「

！」
ほしみ
なな

星海^{ほしみ}那^{なな}々は、弾かれたように飛び起きた。息が上がっているのは、夢のせいだとすぐに理解する。

夢、だ。

彼はもう、夢の中にしか現れない。

那々は目を覆って深く息をつくとき、気分を切り替えるように頭を振った。ショートボブの髪がばらばらと揺れる。

ベッドを抜け出してリビングに行くと、母の由^{ゆり}里が朝食を用意しているところだった。

「あら、今日は早いじゃない」

「まあ、たまにはね」

そう答えた時、テレビのアナウンサーが新しいニュースを読み上げた。

『今日で二〇XX年の 青銀天聖教団 事件から、丸五年を迎えます。この事件は、子供たちの誘拐事件に端を発し……』

思わずテレビを見つめた那々に、母がちらりと気遣うように視線を向けた。

「……もう、五年も経ったのねえ」

「うん……」

那々は窓際に立って、外に向かって手を合わせた。

ありがとう。あなたのおかげで、無事に高校生になりました。ここ五年の恒例行事。七月十一日、毎年この日の朝は、この窓越しに手を合わせる。

彼女は五年前、誘拐された子供の一人だった。母が成田空港で職員として働いていたため狙われたのだ。小学校六年の夏休み直前、下校途中に三人組の男に取り囲まれ、薬のようなものを嗅がされて気を失った。気がついた時にはもう、教団施設内に囚われていたのだ。

あの時のことは、忘れようにも忘れられない。殺風景なプレハブ、仮面をつけて銃を持った見張り役。毎日増えたり減ったりする、自分と同じ立場の子供たち。家族をテロに利用するための誘拐だというのは、後から知った。顔を見なくなった子供は、親が退職しようとしたため見せしめにドラッグを打たれ、隔離されていたのだということも。

だが、彼女の記憶に最も鮮やかに残っていたのは、一人の少年だった。

ペインレス・ドッグ と呼ばれていた彼は、元は見張り役の人だった。しかし、もう一人の見張り役が那々に暴行を働いた時、それを撃ち倒して子供たちを逃がしたのだ。折良く雑貨の搬入に来ていた業者の車を奪い、銃撃戦で怪我を負いながらも、那々たちを麓の警察署まで連れて行ってくれた。

なぜ彼がそこまでしてくれたのか、那々は未だに知らない。あの後彼は姿を消してしまい、連絡を受けて駆けつけて来た母の腕の中で、那々は泣きじゃくった。

しばらくして彼の捜索が打ち切られたというニュースが流れた時も、大泣きに泣いた。礼の一言も言えなかったことが、心残りではなかった。

那々は未だに、はつきりと覚えている。あの少年の優しい端整な顔立ちも、少し甘さの残る声も。彼が流した血の鮮やかさ、最後に見た微笑みさえも。

それは、恋だったのかもしれない。

たった数日で永遠に叶わなくなっただけで、確かに彼女は、彼を想っていたのだ。

だから、那々の中にはもう恐怖はない。

彼女があ的事件を思い出す時はいつも、監禁され手を上げられた負の記憶ではなく、あの少年と一緒に逃げた時の不思議な安心感が浮かんでくる。

あの少年は五年経っても、那々をあ的事件から守ってくれるのだ。そして、那々は毎年、この窓から彼が亡くなったという場所の方向に向かって、手を合わせる。あの時言えなかった、礼の言葉と共に。

気づくと、ニュースはとうに別の話題に変わっていた。

「ほら、さつさと食べちゃいなさい」

「はい」

テーブルに着こうとして、那々はテーブルに置かれた一通の封筒に気づいた。宛名として那々の名前だけが書かれた、真っ白な封筒。「お母さん、これ」

「ああ、新聞取りに行ったら郵便受けに入ってたのよ。あんた宛になってるから」

「いいわよ、どうせストーカーからだもん。捨てちゃって」

「ストーカー？」

由里が目丸くした。

「あんた、ストーカーされてるの？」

「大したことないよ。手紙でつらつらふざけたこと書いてくるだけだもん。好きですとか愛してますとか……あゝ寒っ」

びりびりと豪快に封筒を破って中身を読み、すぐに放り出す。

「今まで五、六回来だけど、特に実力行使してくるわけでもなし、放つときやその内諦めるでしょ。それに、あたしの理想はもっと高いの！」

「はいはい。腕っ節が強くてハンサムで、優しい人でしょ。そんな

人がそうそういるもんですか」

「どっかにいるもん」

ストーカーからの手紙を握り潰してゴミ箱に放り込んだ。人のことを調べ尽くして手紙にまで書いてくるくせに、自分は顔も出さないような相手に用はない。

それに 那々はまだ、彼を忘れられない。忘れてしまうには、彼の記憶は鮮やかすぎた。

「でも那々、それ切手がないってことは、直接届けられたってことでしょ？ 気持ち悪いじゃない、住所知られてるなんて。警察に言えば？」

「これくらいで捜査なんてしてもらえないよ。それに、何かしてきたら、殴り倒してやる」

「あんたねえ、女の子がそんなこと言うもんじゃないわよ」

眉をひそめる母親を尻目に、那々はテーブルに着いて朝食に手をつけ始めた。

朝食と身支度を終えると、インターホンが鳴った。七階上に住む、同じクラスの友人の沖田直美だ。おきた なおみ大体同じ時間に家を出るので、いつもエレベーターが一階のエントランスで合流するのだが、今日はこちらが少し遅くなってしまったので、迎えに来たらしい。

はいはい、と聞こえるわけでもないが返事をして、那々は玄関のドアを開けた。

直美は親が会社社長で、年季の入ったお嬢様だ。高校進学を機に一人暮らしをしたいという希望に、親がポンとこのマンションを寄越したというから恐ろしい。活発でどちらかといえば“可愛い”タイプの那々とはまた違い、パツと目につく華やかな印象。彼女は、那々が五年前に事件に巻き込まれたことも知っていた。

「そういえばさ、こないだいい店見つけたんだあ」

「いい店って、この前みたいにライブハウスとかじゃないよね」

あの時は引つ張られて行って、帰り道に危うく補導されかけた。白い目を向ける那々に、直美が力説する。

「ちつがあう、喫茶店！ コーヒー専門みたいなんだけどさあ、そのウェ이터のお兄さんがすごい美形なんだよねえ」

直美がずい、と那々に詰め寄る。

「あたしが狙おうかとも思ったんだけど、まあここは一つ、親友に新しい恋を提供するべきかと」

「新しい恋って」

「助けてくれたお兄さんに片思いってのも、それはそれでいじらしいけどさ。いつまでも後ろ向いてばっかじゃ春は来ないわよ」

「いいもん」

つん、とそつぽを向いて歩き出す。

それでも結局は、直美に引っ張られてその店を訪れることになりそうだと思いながら。

新宿の一画、雑居ビルに挟まれた小さなビルの二階に、喫茶店

ペニーハウス はあった。十八世紀イングランドのコーヒーハウス

通称 ペニー・カレッジ をコンセプトにしたこの店は、シツクな内装と絶品のコーヒーで、近隣はもとより少し離れたオフィス街からも、足を伸ばしてくる常連が多い。だが店自体はさほど大きくなく、従業員もオーナー兼マスターの他には、ウェ이터が一人だけという慎ましさだった。

その唯一のウェ이터である天瀬斎は、あまがせ いつきテーブルを拭き終えてメニューなどを整頓すると、カウンターの内側に戻ってタオルを洗いかかった。全体的に痩躯だが、捲り上げたシャツの袖から覗く腕は貧弱ではない。引き締まった、均整の取れた体躯をしていると、容易に想像がつく。

端正な顔立ちを、今時珍しいくらいの漆黒の髪が縁取っている。好青年という言葉がこれほど似合う人物もいるまいと思える、穏やかな雰囲気漂わせた青年だった。

斎はタオルをラックにかけ、手を洗って各テーブルのシュガーポットや紙ナプキンの補充を始める。そうしていると、休憩に行っていたマスターの立河敏也たてかわとしやが戻って来た。

「戻ったぞ。次、行つてきな」

「ありがと」

手早く補充を終え、斎はカウンターの脇を通つて、奥に続くドアを潜る。細く短い通路から入れる八畳ほどの部屋は、現在は倉庫になつていて備品や豆のストックを保存する冷蔵庫、ユニフォームの替えを入れたロッカーなどが置かれている。そこには入らず通路の突き当たりのドアを開け、建物の裏手の階段を上がると、三階は住まいになつていた。間取りとしては2LDK。どちらかといえば殺風景な部屋だ。白いシャツと黒のスラックス、黒いエプロンのクラシカルなユニフォームから、エプロンだけを外してダイニングの椅子にかける。テーブルの上に作り置きされているチャーハンが、今日の昼食だ。

ペニーハウスは、斎と叔父に当たる立河の二人で切り盛りされていた。ここに住んでいるのも彼ら二人だけ。立河は四十三年独身を通してゐるし、斎はまだ二十二歳だ。結婚どころか、恋人もない。

チャーハンを頬張つた斎の耳に、電話のコールが聞こえた。この電話は複数回線引いてあり、番号ごとにコール音が違う。この音は、自宅用ではない。

「……はい、ペニーハウスです」

『ああ、俺。こないだトリガーの調整頼んでたけど、できてるか？』

「はい、できてます。いつでも結構ですよ」

『じゃあこれから取りに行く。十五分くらいで着くと思うから、用意して』

「分かりました」

電話を切ると、斎は内線で下の店にかけた。

「さつき、お客さんから電話があつて。十五分くらいで着くつて。」

しばらくそっち行けないけど、大丈夫？」

『ああ、こっちは心配いらない』

「じゃあ、そっち頼むね。僕は下にいるから」

短い休憩を終え、斎はエプロンを掴んで階段を下りていった。倉庫のロッカーにエプロンを放り込み、白のシャツを脱いでハンガーにかける。そして隣にかけてあった薄いグレーのシャツに着替えると、ロッカーを閉めて再び階段に向かった。今度は上がるのではなく、下りていく。一番下まで下りきって、建物の脇を回ると、普段は閉めている一階の入口の鍵を開けた。室内の照明のスイッチを入れると、壁一面の棚とカウンター、その脇にもう一つのドアが浮かび上がった。

斎はバインダーを片手に棚をざっと見て、目的の番号の入った扉を小さな鍵を使って開け、中のものに手を伸ばす。

シグザウエルSSG3000。競技用ライフルの流れを汲む、ボルトアクション式のスナイパーライフルだ。

ライフルケースに収められたそれをさっとチェックして、大丈夫という風に肯くと、カウンターの下の引き出しから弾薬を取り出した。

そうこうしていると、出入口が開いた。二十代半ばの男が、親しげに手を上げる。斎も笑みを返した。

「いらっしやいませ」

「よう、おひさ。相変わらずマスターのコーヒーは絶品だな」

「どうも。これ、お預かりしてたシグです」

SSG3000を受け取り、男はカウンターの脇のドアを指した。

「レンジ借りるぜ」

「どうぞ。シューティンググラスは？」

「必要ない」

実弾と、ドライファイア用のダミーカートリッジを差し出し、斎はドアの鍵を開けた。開かれたドアの向こうにはまたしても階段。下りるとそこには、二十メートルのシューティングレンジが五レ

ン並んでいた。ターゲットの位置を必要に応じて変えられるようになってるが、現在はすべて二十メートルの位置にセットされている。

男はSSG3000を構え、まずダミーカートリッジを込めて引鉄を引いた。カチン、と切れのいい音がする。

肯いて、今度は実弾を込めると、スコープを覗いて倍率を調整。引鉄を引いた。

ターゲットの真ん中が、綺麗に撃ち抜かれた。三回ほどそれを繰り返して、短く口笛を吹いた。

「いいな。トリガー・プルが軽くなっだし、よく切れてる。これぞ理想って感じだな」

「どうも。じゃあ、受け取りのサインお願いします」
「了解」

男はSSG3000をしまつて一階に戻り、カウンターで差し出された用紙にペンを走らせた。

いちえん ちあき
一圓千秋。彼とは二年前に ペニーハウス が開店して以来の付き合いだ。彫りの深い顔立ちをしていて、色を抜いた明るい髪色がよく似合っている。無造作に伸ばし、やはり無造作に括っただけの髪型だが、百八十を超える身長・整ったマスクとあいまってまるでモデルのようだ。

千秋はペンを置くと、代金の封筒をカウンターに置く。試射後のクリーンアップを済ませて、斎は中を改め、それを手提げ金庫にしまつと、サインの入った用紙をファイルに綴じて領収兼明細書に手早く金額を書き込んだ。

「これ、領収と明細書です」

「サンキュ。これがないと経費で落ちねえからな」

領収書を受け取り、千秋はしげしげと斎を見やる。

「いっつも思っただけどさ、上でウェイターしてる時とこととで、どうして服が違っただ？ そのまま来りゃあ、面倒ないだろ？」

「こっち用の仕事着です。喫茶店のユニフォームに火薬とガンオイ

ルの臭いなんてつけるわけにいきませんから。コーヒーの香りにそんなもの混ぜたら、叔父に殴られます」

「はあ、なるほどねえ」

気の抜けた返事をして、彼はライフルケースを抱えた。

「ありがとうございます」

挨拶にひらひらと手を振って、千秋はドアの向こうに姿を消した。

アメリカを筆頭とする銃器生産国の圧力に押される形で、七年ほど前に法改正があり、日本でも銃の規制が緩和された。これまで公然と銃を所持できる職業は（建前上）警察官と自衛隊くらいだったが、規制緩和によりその幅が広がったのだ。代表的なところで警備会社。中でも現金輸送に携わる会社は、強盗の脅威に対抗するため率先して銃を導入した。

もつとも、そのためのハードルは高い。法改正以前から所持が認められていた猟銃などと同様、国家公安委員会の定める講習・試験（実技含む）を受け、各都道府県警に銃所持の申請をし、精神異常・重大疾患なしという医師の診断書を提出しなければならないのはもちろんだが、その上さらに倫理講習、危険物取扱講習、応急処置講習、誓約書の提出が待っている。そして職務上銃が必要だと認定されてようやく、帯銃許可証が発行される。申請をしてから許可証が発行されるまで約九ヶ月という、気の長い話だ。そして実際に銃を所持すれば、その銃についての届出をしてナンバーをもらわなければならない。有効期限はいずれも一年。そのたびに更新する。

そして、それらの銃の整備・修理においての事故を防ぐため、専門の技術を持つ職人も必要になった。いわゆる銃工だ。銃工は、^{ガンスミス}国家公安委員会と都道府県警察の両方に承認される必要があり、営業するためにはその承認と帯銃許可証が必須となる上、二年に一回審査を受ける。この審査をパスしないと、営業ができない。

ペニーハウスは、コーヒー専門喫茶店という顔の他に、銃工という別の顔を持っている。店舗のオーナーは立河だが、銃工の資格を持っているのは斎だけなので、銃工の仕事の管理責任者は斎だ。

管理責任者が別なら、別業種を並行営業しようと何の問題もない。

ペニーハウス は東京でもまだ数少ない公認銃工店であり、斎は業界ではそこそ有名な腕利きの若手銃工だった。

シューティングレンジルームの鍵をかけると、今日引き渡し予定の品が他にないのを確かめ、入口の鍵をかけた。銃工の ペニーハウス は原則予約制だ。もっとも、飛び込みもないわけではないが、そうひっきりなしに客が来るわけでもない店で一日中過ごすのは非効率以外の何物でもないの、普段は上の喫茶店を手伝っている。

客の方も大体分かっている、まず喫茶店の方でそれとなく用件を仄めかし、ついでにコーヒーを楽しんでから下に来る、というのが定番だった。

シューティングレンジが地下にあるのは、防音のためだ。試射の音が高らかに響くようでは少々具合が悪い。その点ここはおあつらえ向きに、ライブハウスだった地下一階が転用できた。防音の設備がしっかりしているのありがたい。もともとは個人営業の楽器店が入っていたビルだったが、立地が良いとはいえないため、価格もそこそこだった。立地の悪さは腕の良さで補えばいいと斎たちは考え、そしてそれは確実に実践されている。

斎は倉庫兼用ロッカールームでシャツを着替え、エプロンを着けると喫茶店の方に戻った。三組ほど客が入っている。若い女性客がちらちら視線を送ってくるのをかわしつつ、カウンター内のシンクで手を洗うと、早速トレイを渡された。

「三番のお客様だ」

「分かった」

三番テーブルは女性三人組だった。見たところ女子大生。お待たせいたしました、と営業スマイルつきで会釈すると、はにかむように笑顔を返された。こうして口コミで“美形の店員がいる”という評判が広まっていることを、斎は知らない。

二十分ほどすると、客も引き始めた。

「落ち着いたね」

「ああ。おまえ、ほとんど休憩になってないだろ。一杯飲むか？」

「うん、カプチーノがいいな」

冷房の効いた店内にいと冷える。熱いカプチーノを啜っていると、テレビが十分枠のニュースを流し始めた。

『 今日、七月十一日で、 青銀天聖教団 事件から丸五年を迎えました。この事件は……』

カタン、とカップがカウンターに置かれる。斎の顔がわずかに歪んでいた。

「……そっか。今日だっけ」

「斎」

「うん、大丈夫。これ、洗っとくね」

三分の一ほど残ったカップを取り上げ、カウンターの中に入る。とたんに、店のドアが開いてカップルらしい客が入って来た。

「いらっしやいませ」

にこやかに会釈する斎の表情に、先程の翳りはもうなかった。

午後四時を過ぎると、この界限にも学生の姿が目立ち始める。それでもコーヒー専門という敷居の高さか、店内の客の平均年齢は高めだ。主は、帰社前の息抜きを楽しむ営業社員風のサラリーマン。「お待たせいたしました」

疲れた表情のサラリーマンらしい客のテーブルにカップを置いた時、ドアが開いて一人の男が入って来る。スーツ姿だが、明らかに普通の会社員ではないと分かる、四十代後半ほどの体格のいい男。この店の常連だった。

「いらっしやいませ」

「よお、いつもの頼む」

「はい」

カウンターに一直線、メニューも見ない。頼むものはいつも決ま

っているので、立河は彼が店に入って来た瞬間から、ブレンドの用意を始めていた。モカブレンドが、彼の定番メニューだ。

「諸角さん、今日はどちらにもろすみご用で？」

尋ねられて、諸角久尚ひさなおは苦笑した。

「鋭いな。今日は甥っ子の方にも世話になりに来た」

「じゃあ下、鍵開けてきます。こっち、大丈夫だよな？」

「ああ、多分な」

斎がエプロンを外しながら奥へと引込む。ウェイターと銃工の兼業は、なかなか慌ただし。

「忙しいかい、マスター？」

立河は肩をすくめて微笑する。

「コーヒ一本に絞っちゃうと、なかなかね。斎がいるから、あいつ目当てのお嬢さん方がちょいちょい来るが。本人は気づいちゃいないがね」

「マスターの若い頃も、あんなじゃなかったのか？」

「あいつの方が人当たりがいいな。若い頃の俺は、とことん一匹狼でね」

そう言う立河も、四十三歳という年齢より少し上には見られるものの、なかなか渋いナイスミドルだ。

「モカ、どうぞ」

出されたコーヒを一口。広がる味わいに諸角は微笑する。

「このコーヒ飲んじまうと、自販機のはもう飲めないな」
「嬉しいね」

ゆっくりとコーヒを飲み干すと、諸角は椅子を下りた。

「美味かったよ。ごちそうさん」

代金を払って店を出る時、女子高生らしい二人連れとすれ違った。この店に若い女性が来る場合、目的は大体決まっている。だが今日はかりは、そのお目当ては不在である。

（悪いなあ、嬢ちゃんたち）

その原因であるところの諸角は胸中で詫びつつ、一階への階段を

下りて行つた。

斎はすでに、仕事着に着替えて待っていた。

「悪いな、待たせたか」

「いえ。ところで、今日は修理ですか？」

「ああ、こいつを頼む」

諸角は上着の下のシヨルダーホルスターからリボルバーの拳銃を取り出し、カウンターに置いた。

「薬物中毒^{ジャンキー}のガキと撃ち合いになつてな。何とか取り押さえたはいが、こいつがマトモに弾喰らつちまつた。まあ、一歩間違えば俺の指か頭が吹っ飛んでたがな」

黒光りするS & W M 29を取り上げて、斎はしげしげと見つめる。かなりの大口径弾がシリンダーに当たつたらしく、端が抉れていた。傷の縁も変形してささくれ立っている。確かに、これを引き続き使おうとは思わない。

「あちやあ……シリンダー交換ですね。他も傷んだりしてないか見たいし、少し預からせてもらうことになりますけど……」

「ああ、頼む。きつちり直してくれよ、俺の命の恩銃^{おんじん}だ。ところで、代わりはあるか？」

「629でよければ、すぐ出せます」

「それでいい、貸してくれ」

「分かりました」

斎は後ろの棚から、同型のリボルバーを取り出した。S & W M 29は、M 29のシルバーモデルだ。個人的に、こういった大口径のモデルを斎は好んでいた。

「レンジ開けます。少し慣らしてください」

「ああ、借りるぞ」

シューティングレンジルームを開け、諸角が階下を下りていくと、斎は厚みのあるバインダーを取り出し、シートに記入を始めた。彼が“カルテ”と呼ぶこのシートには、顧客ごとの銃のデータや修理・整備の状況などが書き記してある。後で時間ができた時に、自宅ス

ペースに置いてあるパソコンでデータベース化するようにしていた。
（S&WM29、シリンダー破損、要交換、つと。分解して中のパーツも掃除した方がいいかな。諸角さんって仕事が仕事だから、そんな時間ないだろうし）

そんなことを考えながらカルテを埋める。備考欄に 貸出有 の文字と銃のナンバーを記入してペンを置いた時、試射を終えた諸角が階段を上がってきた。

「使いやすいな。俺のより引鉄のキレがいい。さすがにきちんと手入れしてるな」

「何ならメンテもしますよ、サービスで」

「ありがたい。暇がないんだ」

「でしょうね」

バインダーをぱたんと閉じて、預かったM29を奥の工房の棚に置いた。

「時間かかりそうか？」

「できるだけ早く上げますよ。諸角さんはお得意様だし」
その瞬間だった。

壁の向こうから聞こえた音に、彼らは揃って顔を跳ね上げた。銃を扱う者なら聞き間違うはずのない 銃声！

「諸角さん！」

斎が叫ぶより早く、諸角はドアを蹴破らんばかりの勢いで駆け出していく。斎も続こうとしたが、ふと思いついたようにカウンターを引き出しのベレッタを弾ごと引っ掴むと、諸角に続いて駆け出した。

店内には、マスター一人しかいなかった。

「ねえ……確かに渋いオジサマだけどさあ、直美が言ってたのってあのんじゃないんでしょ？」

「当たり前よっ！ あゝもう、ついてないなあ。ちょうど用事で抜

けてるなんてさあ」

ため息をつく直美を、那々は白い目で見やる。しきりに悔しがる彼女は放っておいて、カフェオレに専念することにした。ウェイターのお兄さんとはもなく、このカフェオレは確かに収穫だ。

落ち着いた店内には、自分たちの倍くらいは年上のサラリーマンたちが目立った。この味で値段も手頃と来れば、仕事の息抜きに寄るにはもってこいだらう。

冷たいカフェオレをちびちびと飲みながら、ちょっとした人間観察をしていた那々は、ふと窓の外に目をやった。周囲に雑居ビルが多いせいか、店の前を行き交う人はバラエティ豊かだ。中には、一瞬ぎよつとするような奇天烈な服装をしている女性もいる。

自棄のようにシロップとコーヒーフレッシュをぶち込んだアイスコーヒーを飲み干し、直美は息をついた。

「お兄さんいないし、もう帰ろっか」

「ま、今日は巡り合わせが悪かったってことよ」

カフェオレを片付けて、那々は立ち上がった。マスターに申し訳なさそうに微笑されると、自分たちの目的がバレたようでちよつといたたまれない。

店を出ると、とたんに初夏の熱気が押し寄せてきた。夕方だというのに、まったく涼しくない。

「あつっい」

直美が辟易したように声をあげた時、向かって右手の方から悲鳴があがった。何事かと目をやると、ヒールが十センチ近くありそうなミュールを履いた女性が、帽子を被った派手なＴシャツの少年に突き飛ばされて転んだところだった。

「突っ立ってんじゃねえよっ、クソアマっ！」

「何あれ、ガラ悪」

眉をひそめた那々は、だがすぐに目を見張った。少年がズボンのベルトに挟んでいるのは、どう見ても。

「おい、待てよ！ てめえ人の連れ突き飛ばしといて、詫びもなし

かよ!？」

女性の連れらしい二十歳くらいの男が、少年の腕を掴んだ。

「はなせよ!」

「ンだと」

もみ合いになり、少年の手がベルトに伸びた。

ガウン!

銃声が耳を打つ。脇腹を押さえて男がうずくまるように倒れ、呻き声をあげた。女が叫びながら後ずさる。

「馬鹿にすんじゃねえぞ! お、俺はさっき、そのコンビニやってきたんだからな! 一人撃ってやったぜ!」

銃を振り回しながら、少年が叫ぶ。周囲は一瞬にしてパニックに陥った。悲鳴と共に、通行人は我先に逃げ出していく。

動き出したのは、那々の方が早かった。直美の手を掴んで、踵を返す。

「え、那々!？」

「店に戻るの、早く!」

屋内に逃げ込めば、わざわざ追っては来ないだろう。トチ狂って発砲されても、建物の中にいれば怪我をする可能性は低い。遮蔽物が山ほどある。五年前の経験から、那々はごく自然にそう思っていた。

だが、直美が足をもつれさせて転んだ。

「直美!」

那々が振り返ると、

「銃を捨てろ! 警察だ!」

ペニーハウスの入ったビルから、銃を持った男が飛び出してきたのはほぼ同時だった。

シルバーの大型リボルバーを構え、彼は撃たれて逃げ遅れた男を庇うように動く。ちらりと振り返って、彼が重傷ではなさそうなのを見て取ると、胸ポケットから身分証を取り出した。

「警視庁捜査一課の諸角だ。銃を置いて、両手を……」

「うるせえ！」

少年は銃を振りかざすと、那々の手を借りて立ち上がりかけていた直美に銃口を向けた。

「よせ！」

「動くな！ この女撃つぞ！」

直美の顔から血の気が引き、那々は凍りついたように立ち尽くす。もう少しだったのに！

その時 諸角が開けっ放しにしていたドアが静かに動いた。バン！

いきなり大きく開け放たれたドアに、少年がぎよっとして肩越しに振り向く。瞬間、銃声。銃を持った少年の右手に、弾丸が叩き込まれた。着弾の衝撃で、銃口が直美からそれる。

ドアから飛び出してきた青年が、斜め前方の地面に向かって飛び込みざまに撃つたのだ。立ち尽くす那々を傷つけず、万一外しても通行人に当たらない射線を確保するには、少年の斜め後ろ、地面すれすれから上方に向けて撃つしかない。青年はほんの刹那の間にその射線を見出し、少年の右手を撃ち抜いたのだ。恐ろしい腕前だった。

そして、左手を支えに地面に触れるが早いか、身体を捻って転がりながら着地。その勢いで右足を振り抜き、少年の膝裏を打った。

少年が体勢を崩した時には、諸角がすでに動いている。銃を左手に持ち替え、渾身の右ストレート！

少年は、足下の青年の身体を飛び越えて吹っ飛んだ。

時間にしてほんの数秒。那々が呆然と見つめる間に、すべては終わっていた。

「……まったく、無茶苦茶しやがる」

撃たれた男に応急処置を施した後、救急車待ちの間に少年を引きずり立たせて拘束しながら、諸角は苦笑した。起き上がって服を払った斎が、涼しい顔で肩をすくめる。

「諸角さんの位置から44マグナムなんて撃ち込まれたら、周りが

「タダじゃ済みません」

確かに、下手をすれば跳弾して周囲の通行人に当たったかもしれない。諸角はため息をつき、言及をやめた。その代わり、斎の右手に目をやる。

「それにしても、また可愛らしいのを持って来たな」

「大口径はまずいでしょ。どうせ近距離になるだろうし、下手に大怪我させないように弱装弾のやつの方がいいかと思って」

「ベレッタM950“ジェットファイア”。手の中に収まってしまいうサイズの、二十五口径オートマチックだ。とっさのことだったので三発しか弾を持ち出せなかったが、二発は使わずに済んだ。」

少年の銃を諸角が没収し、ためつすがめつ観察する。

「銃にナンバーは……ないか。違法だな。強盗・傷害に銃器不法所持もプラスだ」

「……そういえば、僕が撃っちゃったのはOKなんですか？」

「おまえはライセンス帯銃許可証持つてるし、その銃も申請済みだろ。状況が状況だから、正当防衛が通るだろうし……」

そこで言葉を切って、諸角が渋い顔になる。

「……それにおまえ、あの公安の“姫”のお気に入りだろうが。そんな奴をしょつ引く度胸のある奴が、本庁にいると思うか？」

「はは……」

斎も、乾いた笑いを浮かべた。

「しかし、こいつも運がなかったな。よりもよって、実技試験でオール満点叩き出した化物が相手とは」

「勝手に人を人外扱いしないでくださいよ……」

「実際に人間離れしてるんだからしょうがないだろ。拳銃からライフルまで、全部ターゲットのど真ん中にぶち込みやがって。どんな訓練してたんだ」

「まぐれですって」

「おまえ、あれ未だに銃器管理課で語り草になってるぞ。知ってるか？」

掛け合い漫才のような会話を遮るように、救急車とパトカーのサイレンが響き始めた。ばらばらとパトカーを降りて敬礼する警官たちに少年と銃を引き渡すと、運悪く巻き込まれてしまった少女たちに目を向けた。

「ほれ、あのお嬢ちゃんたちを介抱してやれよ。気の毒に、怖い目に遭っちまったしな」

「余計に怖がられますよ。目の前で銃撃つたのに」

「まあ、そうかもしれないが……そもそもあのお嬢ちゃんたち、おまえ目当てでここに来たんだろうしな」

「……僕目当て？」

「本当に気づいてないのな、おまえ……」

呆れたように嘆息する諸角に首をかしげつつ、斎は少女たちの方へ歩いて行つた。

「大丈夫？」

声をかけられ、那々がびくりと肩を跳ねさせる。直美に駆け寄つてからずっと、青年の方を食い入るように見つめていたが、彼が近づいてくるととたんに顔を伏せた。

「やっぱり、怖がられちゃったか」

それを彼は自分に対する恐怖と受け取ったらしく、諦めたような口調でばやく。那々はゆるゆると首を振った。

「……ちが、そうじゃ、なくて……」

上手く言えない。だが、彼に対して恐怖などは感じなかった。

ただ、信じられなかっただけだ。

彼は、五年前に死んだはずのあの少年に、よく似た顔立ちをしていた。

白昼堂々の強盗事件に巻き込まれた那々たちは、直美の傷（転んだ時に擦り剥いていた）の手当の後、事情聴取のため警視庁に連れて来られた。現行犯逮捕したのが本庁の警部である諸角本人だったこともあるが、強盗傷害及び銃器不法所持という重大事件だったことや、許可証持ちとはいえ一応民間人である斎が発砲した件で少々ややこしい事態になってしまい、早々に本庁の捜査一課に処理が回されたのだ。

当然のごとく引つ張られてきた斎が解放されたのは、午後七時を過ぎた頃だった。型通りの聴取は受けたが、諸角の口添えもあつてどうにか無罪放免で済みそうだ。

もう ペニーハウス の営業時間は終わっている。結局店を放り出してきてしまった形になるが、不可抗力だから仕方がない。斎はとりあえず、壁に背を預けてぼんやりと廊下を眺める。あまりうるうるするなと諸角に釘を刺されたのだ。

警視庁に来るのは、別に初めてではない。帯銃許可証を申請する時、実技試験を受けに来たのはここだったし、何度か銃の修理や整備の仕事を受けて、品を届けに来たこともある。事情聴取をされたのは今回が初めてだが。

「……あの……」

ほそい声に、ふと我に返った。そこに立っている少女の姿を見つけて、安心させるように微笑む。

「大丈夫？ もうすぐ帰れると思うよ。 って、僕もこんなの初めてだから、詳しいわけじゃないんだけど」

少女は答えずに、顔を伏せる。ずっとこの調子だった。

星海那々。運悪く事件に巻き込まれてしまった少女。

「友達は？」

「まだちょっとパニック入ってるらしくて、婦警さんに面倒見てもらってます。あたしは、気分転換してきたらいいって言われて」
「うん、その方がいいと思うよ」

彼女の表情は緩まない。斎は視線をさまよわせる。

「……平気で銃を撃つ人間は、やっぱり怖い？」

尋ねると、ふるふるとかぶりを振る。

「……怖くは、ないけど。でも……」

似てるから。

呟いて、彼女は黙り込んでしまった。

「……そう」

斎はまた、廊下の壁に視線を戻した。誰に似ているのかは、訊かない。

しばらく、沈黙。

「あの、天瀬さんは」

「え？」

再び彼女を見ると、見上げてくる視線にぶつかった。初めて、真正面から彼女に見つめられている。

「どうして、あんなに銃の扱いが上手いんですか？」

「あ……」

痛いところを突いてくる。斎はため息をついた。

「……銃工^{ガンスミス}って、知ってる？」

「銃工？」

「銃を整備したり修理したり、改造したりする職人のこと。僕、一応営業許可受けてる公認銃工だから。銃って、整備しつ放し、改造しつ放しつてわけにはいかないでしょ？ ちゃんと試し撃ちして、問題なく撃てるのを確認しなきゃいけないし、資格試験の時には射撃指導なんかもするから、銃を撃つ機会は下手したら現役自衛官より多いんだ。扱い慣れてて当然なんだよ」

事実である。帯銃許可証の申請のためには試験をパスする必要がある、そのためには射撃の訓練を受けなければならない。とはいえ、

指導までできる人材となると、数は限られてくる。まさか現職警官や自衛官が出張って行くわけにもいかず、そうになると民間人でありながら、ある意味銃のスペシャリストでもある銃工などはおあつらえ向きの存在なのだ。自動車教習所の教官のようなものである。

説明に納得したのか、那々は口をつぐんだ。そういえば、と齋はふと思い出す。提出してあるベレッタを、諸角から受け取る話になっていたのだが、まだだろうか。

ベレッタに意識を飛ばしてしまった齋を、那々はそっと盗み見た。彼と、重なる。

一瞬でわずかな射線を捉え、銃を持った相手を制圧した技量が、車を運転しながら追手を仕留めたあの少年にオーバーラップするのだ。その顔立ちや、穏やかな物腰、何もかもが彼を思い出させてやまない。

もう、彼はいないのに。

この世に、いるはずのない人なのに。

「っ……」

泣きそうになるのを、懸命にこらえた。

よりにもよって、今日。こんなに、彼に似た人に逢ってしまうなんて。

彼が生きていれば、まさに目の前のこの青年のようになるのだろうと、ぼんやりと思う。やさしい、穏やかな雰囲気たたえた人。それでいて、いざとなれば野生の獣のように、牙を剥くこともできる青年。

そういえば、年齢的にもぴったりかもしれない。

そこまで考えて、那々は齋から目をそらした。考えれば考えるだけ、空しくなってくる。

過ぎた過去は、どれだけ望もうと変わらないのだ。

互いを見ないまま、齋と那々はしばらくそこに立ち尽くす。

「星海、那々さん？」

女性の声に、那々ははっと顔を上げた。

「あ、はい」

「お母さんが迎えにみえたわよ。お友達も」

「はい！」

ほっとして、那々は部屋に戻ろうとした。ふと齋を見ると、彼は
どう解釈したのか苦笑する。

「いくら何でも、僕は迎えに来てもらうような年じゃないよ。ベレ
ッタ待ち」

「ええと、そういうつもりじゃなかったんですけど……」

「あ」

勘違いに気づいて、齋がぽかんとした顔になった。那々が笑いを
こらえる。

「おい、待たせたな」

ちようどやって来た諸角が、あろうことかベレッタを齋目がけて
投げて寄越した。

「うわあっ！」

絶叫しながら、齋が飛びつくように受け止める。しっかりと両手
で抱え込んで、きつとばかりに目を向けた。

「何てことしてんですかつ！」

「おい、いくら何でも弾入った銃を投げるほど非常識じゃないぞ俺
も。ほれ、弾はこっちだ」

「心臓に悪い冗談はやめてください。かつちり二秒は止まりました
よ」

ぶつくさ言いながら、齋はベレッタをポケットに突っ込んだ。弾
は、マガジンに詰めて銃にはセットせず、ハンカチに包んでシャツ
の胸ポケットに。転ばなければ大丈夫だろう。

事情聴取を受けた部屋に足を向けると、椅子に座っていた女性が
立ち上がった。

「那々！ あんた大丈夫なの！？ もう、電話もらった時は倒れる
かと思っただわよ」

「うん、大丈夫。怪我もないもん」

女性は娘の無事を確かめて安堵の息をつく。そして諸角に気づいて目を見張った。

「まあ、もしかして刑事さん？ あの時の」

「はあ。五年ぶりですか。すっかり大きくなつてて、最初は分かりませんでしたよ。名前を聞いて気がつきましたが」

「……知り合いなの？」

首をかしげた那々に、母が顔をしかめた。

「あんた、覚えてないの？ あの事件の時に、お世話になった刑事さんよ。ほら、帰って来てから少しして、挨拶にいらしたでしょ。その時に、会つてるはずだけど」

「え……？」

思わず見上げると、諸角は笑って手を振った。

「いや、五年も経ちや顔も忘れるさ。あんな事件の後だったし、むしろ思い出したくないだろう」

「……じゃあ、あの教団の事件の時の……？」

「正直、あの時は、警察はほとんど何もできなかったからなあ……あの ペインレス・ドッグ が子供を連れ出してくれてなかったら、捜査令状も下りたかどうか……」

思いがけない再会に、那々も諸角も驚きが先に立って、一瞬時を忘れた。

だから、気づかなかった。

少し離れて立つ斎の表情が、凍りついたことに。

「畜生！」

がん、と部屋の壁に拳を打ちつけ、西脇哲治は吐き捨てた。鞆を放り出して、燃えるような眼で何もない壁を睨みつける。

（俺だって！ 俺だって、あれくらい……！）

彼女を守るのは、自分のはずだった。先にあいつが飛び出して来

なければ……！

哲治が彼女に出会ったのは、高校に入学してすぐだった。廊下ですれ違っただけの、ありきたりといえはありきたりな出会い。

星海那々。一年後輩の、哲治にとっては誰よりも愛しい少女。

普段の明るい勝気な表情も、時折見せる遠くを見るような表情も、すべてが哲治の目には好ましく映る。他の少女たちのように、どれだけ自分を飾り立てるかなどという、つまらないことに固執していないのもいい。

彼女のことを知りたいがため、何度か後をつけたこともあった。家も知り、よく立ち寄る店も見つけた。何度か手紙も書いたが、特に反応はないように見える。だが、いつかは返事をくれるはずだ。根拠のない思い込みでしかないが、哲治にとっては確信だった。

今日は、彼女が友人に連れられて新しく見つけた店に行くというので、こっそりと後をつけた。顔のいい店員がいるからと彼女を引っ張って行く友人が鬱陶しい。だが彼女自身は乗り気ではないらしく、哲治をほっとさせた。

そう、大して気にはしていなかったのだ。

あの事件が起こるまでは。

彼女に銃が向けられた時、哲治の身体は硬直して動かなかった。周囲の通行人に紛れたまま、彼女を救うために割って入ることもできなかった。

那々を救ったのは哲治ではなく、ビルから飛び出してきた青年だった。

彼が銃を鮮やかに操り、刑事と協力して強盗を取り押さえたのを、哲治は目の前で見せられたのだ。ことが終わった後に、那々があの青年を食い入るように見つめていたことが、身震いするような屈辱感と呼び起こした。

（俺だって、あれさえあれば……！）

動けなかった後ろめたさと嫉妬を、彼への対抗心にすり替えて、哲治は歯噛みした。

苛々と頭を掻きむしり、机の引き出しを開ける。きちんと並べたノートや筆記具をかき回すようにどけると、その下に隠してあったピルケースを掴み出した。中から小さな袋を取り出して、中の錠剤を見つめた。

そうだ。今日調子が悪かったのは、これを忘れていたからだ。痛恨のミスだった。

初めてこれを飲んだ瞬間、哲治の世界は変わった。痩せぎすで上目遣いばかりだった自分の顔が、精悍で自信に満ちた表情に変わっていったあの時の快感を、哲治は生涯忘れない。

これさえ飲めば、自分は変わる。あいつなんかよりずっと強くなって、彼女を守るんだ。

哲治は錠剤をピルケースごと制服のポケットに突っ込むと、リビングに向かった。哲治名義の通帳とカードが、サイドボードに保管されている。カードだけをそつと抜き出して、ポケットにしまい込んだ。

もう薬が残り少なくなっている。補充しなければならぬ。薬は高価で、哲治の貯金は尽きかけていたが、そんなことは言っていられなかった。薬がなくなれば、もう自分を保てなくなりそうなるまで、彼は薬に頼りきっていた。

玄関の方で音がして、哲治は慌てて引き出しを閉めた。

「哲治？ 帰ってるの？」

「うん、うん」

母の声から逃れるように、哲治は自分の部屋へと駆け戻った。

ドアの開く音に、カップを片付けていた立河は顔を上げた。斎の姿を見つけて、ほっと頬を緩める。

「どうだった」

「うん、何とか無罪放免。諸角さんが口添えしてくれて。ここまで

送ってもらったし」

「そうか、そりゃ良かった」

そう言って、斎の浮かない表情に気づいた。

「……どうした？」

「うん……ちよつとね」

斎は息をついて、椅子に腰かけた。カウンター越しに、立河を見上げて苦笑する。

「世の中って狭いよね。まさか、また会うなんて思わなかった」

「会う？」

「五年前の、女の子」

立河が息を呑んだ。

「……確か、なのか」

「五年前の事件のとき、最初誘拐事件ってことで、本庁の捜査一課が担当したでしょ。諸角さんが、覚えてたんだ。その子のお母さんも、諸角さんと顔見知りで。間違いないと思うよ」

「そうか……」

かぶりを振って、立河はカウンターを出た。斎の隣に腰かけ、肩に手を置く。

「だけど、もうおまえは ペインレス・ドッグ じゃない。天瀬

斎。俺の甥だ」

「……うん」

斎は肯いて、立河と入れ替わりにカウンターに入る。

「僕が淹れるよ。何がいい？」

「ブルマンだ」

「……何かさ、お茶汲み特権でこっそりいいお茶飲んでるのしみたんだよ」

「頼む客が少ないんだ。豆を消費しないと、新しいのが使えんだろ」

「はいはい」

口の応酬と並行して、斎の手は慣れた様子で豆を挽き、サイフォンのフラスコで湯を熱しながら片手間にカップも温めておく。サイ

フォンから香ばしい香りが立ちのぼるようになるまで、そう時間はかからなかった。カップに注いだブルーマウンテンブレンドを、立河の前に置く。

「どう？」

「まあまあだな。俺には遠いが」

「年季が違うよ。でもまあ、進歩か」

もう一杯分を余熱なしのカップにそのまま注ぎ入れ、自分の口に運んだ。

……やはり、カップは温めるべきだったかもしれない。少しぬるくなった。

「斎」

「ん、何？」

コーヒを啜っていた斎は、視線だけを立河に向ける。立河は、半分ほどでやめて斎を見据えていた。

「……おまえ、銃工を辞めるつもりはないか」

斎が視線を落とした。ポケットには、突っ込んだままのベレッタ。俺が銃を扱えなくなってから、おまえが継いでくれたのはまあ、ありがたかった。一度銃を持つちまった以上、俺も所詮、銃から離れられない人間だ。おまえが傍にいるおかげで、安心して喫茶店のマスターなんぞやっていられる。だが、おまえはそれでいいのか？ 離れられなくなっちまうぞ」

「……今更だよ、叔父さん」

カップを置いて、斎は立河の隣に座る。ポケットのベレッタを右手に握り込んだ。

「僕の方が、よっぽど染まってるんだ。銃が身体の一部になってる。切り離せない。ずっと、そうやって生きてきたんだ」

「もう、終わったことだ。ペインレス・ドッグ はもう死んだ」

「そうかもしれない。でも僕は多分一生、火薬とガンオイルの匂いを落とせない。銃の撃ち方、ナイフで人を殺す方法を、箸の持ち方と同じくらいはつきり身体が覚えてる。そういう風に、育てられた

から」

「斎、それは」

「叔父さんは、ぼろぼろだった僕に 天瀬斎 っていう人生をくれた。だから僕は、叔父さんの銃になる。そう決めた。それでいいでしょ？」

「……馬鹿か。わざわざ苦勞を背負い込みに行きやがって」

「うん」

笑って、斎はベレッタをカウンターに置いた。弾もその隣に。

「……こういう話って、お酒でも飲みながらなら、まだ格好つくんだろっね」

「原因の大部分はおまえだぞ。成人したら親父と息子みたいに一杯酌み交わしてやろうと思ってたのに、まさかおまえが下戸だとは思わなかった」

「う、それは僕の責任じゃない。DNAの掛け合わせの問題だよ」

「訓練しろ。どんな下戸でも回数重なりや、それなりに飲めるようになるもんだ」

「嫌だ。ビールは苦い。チューハイは炭酸がきつくて飲みにくい。」

「やっぱりコーヒーでいいや」

「どんな味覚だ、おまえは」

呆れたように、立河が笑う。

自分を“家族”として受け入れてくれる人がいる。それが嬉しくてならない。

考えてみれば、妙なものだ。斎を家族として愛してくれた人は、皆斎とは血の繋がりのない人だった。

守りたい。だから、銃は捨てない。

斎はそっと、ベレッタに指を滑らせた。金属の冷たさを心地よく感じる自分も、やはり銃から離れられないのだとひとりごちた。

翌日、那々は一人で登校した。直美はまだ昨日のショックから立ち直れず、今日は欠席すると連絡があったのだ。

無理もない、と思う。銃を向けられるなんて、普通は経験しない。直美のようなお嬢様育ちなら、なおさらだ。そこへ行くと、自分は少々規格外なのかもしれないと、那々は諦め半分に思った。小学生にしてすでに誘拐・監禁経験があるのだ。

幸い昨日の事件は、学校では教師にしか連絡が行っていない。そう騒がれることもないだろうと、普通に登校した。

昇降口で上履きに履き替えようとした時、一通の封筒が乗せられているのに気づき、眉をひそめる。嫌な予感がした。

封筒の表には、ぼつんと那々の名前が書かれている。

（げっ……ストーカー！？）

見慣れすぎた字体に、那々は反射的に手紙を握り潰しかけた。今まで家にしか来なかった手紙が、学校の下駄箱に。導き出される答えは一つ。

（ストーカーは、この学校に通ってるってことね）

全校生徒七百人超、その内半数は女子だから除外……したいところだ。いくら女友達が多いからとはいえ、ストーカーまで行ってしまうことはない。

そもそも、名前も分からないのだ。反応の返しようがない。好きだの何だのと書き連ねてくるくらいなら、まず名前くらい書いて寄越せと那々は言いたい。

封筒を開けると、今回の手紙は際立って短かった。

【昨日は大変だったね。でも今度は、僕が守ってあげるよ】

そのまま握り潰して、ゴミ箱に叩き込んだ。

寒い。寒すぎる。

コイツに守られるくらいなら自分の身は自分で守った方がマシだ。本気で護身術でも習い始めた方がいいかもしれない。無論、このストーカーも撃退の対象である。

教室へ向かう那々から少し距離を置いて、一人の男子生徒が同じ

方向へ歩き始める。西脇哲治は通りざまにちらりとゴミ箱を覗き込み、少し顔を曇らせた。彼女にはまだ、自分の想いは通じないようだ。

幸運なことに、彼女のクラスと哲治のクラスは、同じ階にある。後について行っても怪しまれない。

那々が自分の教室に入るのを見届け、哲治は心持ちゆつくりと、その前を通り過ぎた。トイレに入ると、個室の中でポケットを探り、ピルケースを取り出す。残り少ない薬を、一錠だけ飲み下した。

この薬を飲むと、頭の働きもクリアになるのだ。今日は数学の小テストがある。評価を下げないためにも、落としたくはなかった。

だが、これで残りはあと四錠。今日中にもう一錠は飲むだろうか、残りは三錠になる。早く補充しなければ。ルートはあるのだが、今は手持ちがない。帰りにでも、どこかの銀行のＡＴＭで現金を下ろしに行くことにする。

トイレを出ると、人のいない空き教室を探して飛び込み、携帯のメモリを呼び出した。

「もしもし？」

『おお？ 誰かと思ったら西脇じゃん？ 何、またクスリ？』

「うん、もうあんまりないんだ。またもらえるかな。前と同じ量で、構わないから」

『金は？』

「放課後下ろして持つてく。できるだけ、人のいないところがいい」
『じゃあやっぱ屋上だろ。鍵くすねて開けとくから、テキトーに上がって来い』

「分かった、じゃあ放課後に」

話を終えるとほっとした表情になって、哲治は携帯をポケットにしまい込む。そのまま彼が足早に出て行った後、教卓の中から一人の少女が顔を出した。彼女はスカートのポケットからメンソールの煙草を取り出し、火を点けてくわえると、ほとんど金に近づくまで脱色した髪をかき上げた。

「……何か、マズイもん聞いちゃったかなあ」

桜庭まひるは、左手に持ちっ放しだったライターのような携帯灰皿に、灰を落とし込んで煙を吸い込む。朝の一番は、彼女の日課だった。学校で吸うのが、またスリルがあつていい。しかし今日ばかりは、そのせいで妙な話を聞き込むことになってしまった。

「……ま、いつか」

黙っていれば自分に害が及ぶことはない話だ。そう片付けて、まひるは切れ長の眼を細め、メンソールの煙を味わうことにした。

グリップを外し、サイドプレートを外すと、細心の注意を払ってメインフレームからパーツを取り外していく。破損したシリンダーは脇へ置いておいて、パーツの清掃を優先することにした。シリンダーの方は、メーカーの代理店から仕入れておいたものがある。バレルカバーも外してバレルを露出させ、トリガー部分も徹底的にばらしてみる。やはり全体的に汚れていた。バレルはもちろん、ハンマーからトリガー、ネジ一本に至るまで、汚れ具合を見て丁寧に磨き上げていく。

それらの作業が一段落ついたところで、斎は身体を起こして大きく伸びをする。壁の時計の指す時刻は午前十時二十分。今日は喫茶店の方は定休日だった。とはいえ、完全な休日になどならないところが自営業の辛さだ。立河も普段はできない倉庫の整理をやっているし、斎は銃工の方の仕事がある。こちらの方には定休日などないのだ。

幸い、このところはそう立て込んでいないので、すぐに諸角のM29の修理にかかることができた。このモデルは好きなので、パーツを取り寄せておいたのも役に立っている。刑事などという職業では銃に命を預けるようなことも多いから、できるだけ早く届けておきたい。

磨いたパーツを組み立てると、新しいシリンダー（磨き済み）を取り付け、軽く回して調子を見る。良さそうだ。

ダミーカートリッジをセットし、引鉄の落ち具合を確認。カートリッジを抜いて44マグナム弾を三発持つと、階下のシューティングレンジに向かう。

シューティンググラスをかけると、右端のレーンに立った。距離は十五メートル。弾をシリンダーに装填し、構えた。射撃姿勢はスタンディング、両手でホールドする。ハンマーをコック、サイトをターゲットに合わせる。

撃った。

ガウン、と銃声が耳を打ち、反動が両手を伝わる。ターゲットの真ん中を綺麗に貫通した。続いてもう一発。右に一ミリほどずれて開いた穴の縁が削られる。

次いで、右手に持ち替えた。コック、発射。上方に二ミリ。穴は増えない。

（こんなもんかな）

シリンダーをスイングアウトさせて、空薬莖を排出した。エジェクト

店に戻り、M29をもう一度さつとクリーンアップしてから保管棚に置くと、斎は三階、つまり自宅スペースに戻った。工房にしばらく籠った上に、試射で硝煙の臭いもついている。ガンオイルと硝煙の臭いをさせてコーヒーなど飲みに行ったら、それこそ叔父に殴られかねない。

適当に着替えを掴んで、バスルームに直行した。

服を洗濯機に放り込み、軽くシャワーを浴びて汗を流す。着痩せする性質なのか、服の上からでは細身に見えるが、実際は意外やしつかりした筋肉がついて、まるでアスリートのようだ。

硝煙の臭いを落とすように肌を滑っていた手が、右の鎖骨の辺りでぴたりと止まった。かすかな傷痕を指でなぞる。自嘲のような笑みが漏れた。

十分ほどでざっとシャワーを浴びると、バスルームを出て着替え

た。タンクトップとブラックジーンズ。タオルを首にかけたまま、喫茶店の方に顔を出した。

先に倉庫を覗いたが立河の姿はなかったのだ。極めつけに、店の方からコーヒーの芳香が漂ってきているとなれば、

「叔父さん、倉庫の整理は？」

「もう終わった。おまえも飲め」

「コーヒーブレイク決定である。」

今日はキリマンジャロだ。ゆっくりと味わっていると、立河が二杯目を注ぎ足しながら言った。

「下で何やらガンガンいつてたみたいだが、もう修理は済んだのか？」

「うん、シリンダーと、後はメンテだけだったし。これから諸角さんに連絡しようと思って」

「そうだな、早い方がいい」

いくら防音設備ができていても、わずかながらには響くのである。いつもは店内にBGMがかかっているのに、客で気づく人間はいないだろうが。

店の電話で諸角に連絡し、銃が仕上がったのを伝えたと、すぐに行くと返事が返ってきた。やはり自分の銃が一番なのだろう。彼を待つ間、コーヒーを楽しむことにする。

「モカ、淹れところか」

気を利かせて、立河はモカブレンドの準備を始めた。

諸角は、驚くほど早くやって来た。斎が迎えに出ると、開口一番言い放った。

「ずいぶん早かったな。しばらくなんて言うから、三、四日くらいは覚悟してたぞ」

「29系は僕も好きなモデルなんで、パーツを取り寄せといたんですよ。それに、ここんとこそそんなに立て込んでなかったんで。一応、徹底的にばらしてメンテしました」

「悪いな。大分汚れてただろう」

そこで、タイミングよく出されたモカブレンドを、礼を言って受け取る。ガブリと一口飲みながら、疲れたように嘆息した。

「まったく、近頃のガキはどいつもこいつも、安易に薬なんぞに手を出しやがって」

「……昨日の事件、ですか？」

「ああ。きつちりキメてやがった。俺のM29を傷モノにしてくれた奴もな。最近の少年事件の半分近くが薬絡みだ。まったく、頭が痛いよ」

「薬も銃も、今は結構簡単に手に入るようになってますしね」

銃規制緩和の影響で、正規の銃器輸入の裏に隠れて、密輸も増えた。さらに、その正規の輸入銃をコピーした銃も出回っている。ドラッグの蔓延とあいまって、銃器関連の少年犯罪が確実に増加していた。とはいえ、今更また規制を強化したところで、減るのは合法の銃だけだ。非合法の銃は減らない。

ちなみに警官の銃は基本的に貸与品だが、規制緩和を受けて自前の銃を持つ警官も増えた。諸角もその一人だ。もちろん警官の銃はきちんとナンバーが振られて管理されるが、銃工に持ち込んで修理するなどの場合は、今回のように代替品を借りることが認められる。無論、持ち込み先は公認を受けている銃工に限られるが。

「そういうことだ。おまえのところにも、来てないか。カスタムの依頼とか」

「ウチは非合法の銃は受けませんよ。合法銃でも、話聞いて、犯罪に使われそうな場合は断ってます」

「公認銃工の鑑だな」

「せっかくの営業許可、取り消されたくないですから」
肩をすくめて、斎はぬるくなったコーヒーを飲み干した。

「下、鍵開けてきます」

「ああ、俺もそろそろ行こう」

諸角も席を立つ。連れ立って一階に下り、斎が鍵を開けた。諸角はショルダーホルスターからM629を抜いて返し、自分のM29

を受け取って、嬉しげに眺めた。

「やっぱり黒い方が落ち着くなあ」

「諸角さん、レンジ使います？」

「おまえの調整なら間違いないだろうが、まあ慣らしとか」

下のレンジに移動し、ターゲットを見て、諸角が感心したような声をあげた。

「あれ、何発撃った？」

「三発です。両手と片手で」

「相変わらず凄え腕してやがる。俺なんか十五メートルじゃ、十センチ内に集めるだけで精一杯だったのに」

まじまじとターゲットを見つめ、諸角は銃に弾を装填して構えた。両手のホールドで、引鉄を引く。

真ん中の穴から一センチほどずれて、ターゲットに穴が増えた。

「くそ、やっぱりオール満点にや敵わんか」

もう一発撃つと、今度は二センチほど左上。それでも中心近くに集めている。

「ハンマーが引きやすいな。やっぱりメンテはしとくべきか」

「ホントなら、使った後はマメにメンテするのが一番なんですけどね」

「そんな暇があると思うか？」

「ですよ」

店に戻り、M629を片付けて、修理代金を受け取る。もちろん、領収書はきっちり発行した。会計に回せば、経費で落ちるのだそうだ。

帰りざま、諸角は振り返った。

「……おまえは、薬なんかに関わるんじゃないぞ」

「分かってますよ。そんなものに手を出したら、終わりですから」

「そうだな。おまえは分かっているとと思うんだが、どうも心配になってな。若い奴中心に、広まってるらしいんだ」

「こんな商売ですから、銃や薬の怖さは知ってますよ」

「ああ、そうだったな」

ひらひらと手を振って、諸角は店を出て行った。

「……心配、か」

斎は少し笑った。何となく、面映い気分になる。

ペニーハウス の常連の中でも、諸角は特に斎に肩入れしてくれている。息子に重なるのだと、前に聞いたことがあった。小学校の時に、交通事故で亡くなったらしい。生きていれば、斎と同年代になっていたはずだそうだ。

『 そりゃあ心配さ。おまえはもう、私の息子なんだから』

ふと、思い出した。過去に、斎を“家族”として、愛してくれた人。

大丈夫。僕にもまた、“家族”ができたから。

僕はまだ、生きていられる。

軽く息をついて、斎は店を閉め、階段を上っていく。コーヒীর匂いが漂ってきた。吸い寄せられるように向かう足に、苦笑した。（薬物中毒にはならなくても、カフェイン中毒はもう手遅れかな）

校舎の屋上は、原則立入禁止だ。だが、哲治は人の目のないことを確かめつつ、屋上への階段を上っていた。バリケードのように置かれた机や椅子は、人一人分ほど間が空けられている。相手はもう来ているようだ。

いつもは鍵がかかっているはずの重いスチールのドアは、軋みながら開いた。

「よう、西脇」

コンクリートに胡座をかいて、車座になっていた四人の少年が、こちらを振り返る。一人が手招きした。

「金は？」

「下ろしてきた」

財布から取り出した十枚近い一万円札に、一人がひゅう、と口笛を鳴らす。

「さあすが、お坊ちゃんはお前がいいよなあ」

「そんなことより、薬は？ あるんだろ？」

「ああ、ほらよ」

袋に入れられた錠剤を受け取って、哲治はほっとした笑みを浮かべる。

「イイだろ？ ヴァンパイア・キス はさ」

「最高だよ。これ飲み出してから、成績上がったんだ」

「だろ？ アタマは冴えるし、腕っ節も強くなんだぜ？ 最ッ高のドラッグだよな」

「けどさ、他のも試してみたくねえ？」

一人が、ポケットから紙袋を引っ張り出した。病院で処方される薬のように、小分けにされたビニールに薄いピンクの粉末が入っている。

「これ、ヤル時に使ったら凄えイイんだぜ。一度使ったらもうこれナシじゃできねえくらい。おまえだっていんだろ、ヤッてみた女の人くらいさ」

那々の顔が、頭に浮かんだ。頬が熱くなってくる。

少年が、にんまりと笑みを浮かべた。

「だろ？ 使ってみるよ、意識飛ぶくらいイケるぜ」

「け、けど彼女は、こっちのことなんて知らない……」

「そんなもん、ヤッちゃったもん勝ちじゃん？」

「そーそー、向こうだって騒ぎ立てやしねえって。心配なら、相手にも ヴァンパイア・キス 使わせりゃいいんだよ。したら、薬欲しさに何でも言いなりだぜ？」

その言葉は、哲治の頭に響き渡った。

彼女を、自分の好きにできる？

「……それ、いくら？」

気がつく、口が勝手に声を出していた。

「そう来ねえと。グラム一万。高純度品だつてよ」

「一万か……」

ぎりぎりしか下ろしてこなかったもので、手持ちがない。だが、さっきの言葉が頭について離れなかった。

哲治の逡巡を見通したように、一人が唇を歪めた。

「……けどさ、おまえもそろそろ金きついだろ？　ヴァンパイア・

キス も結構するからさ。こっちの条件呑むなら、俺たちの仲間ってことで、卸値で回してやってもいいぜ？」

「ほ、ホントに？」

「ああ」

「それで、その条件って？」

勢い込んで尋ねる哲治に、少年は悪魔の囁きを吹き込む。

「仲間を増やすんだ」

「仲間？」

「ヴァンパイア・キス を他の誰かに飲ませて、薬なしじゃいられないように仕向けるんだよ。そしたら、俺たちの仲間だって認めてやるよ」

「飲ませるって……どうやって」

「それは、自分で考えろよ。そういう頭のある奴じゃねえと、仲間とは認められねえな」

「それとよ、獲物はなるだけ、金持ちの坊ちゃん嬢ちゃんにしろよ。おまえなら、そういう知り合いいんじゃないかねえの？」

ひとしきりはやし立て、少年たちは屋上から引き上げていった。

哲治は一人取り残されて、ぼんやりと考える。

誰かを犠牲にする。そうすれば、彼女が手に入るのだ。

その時、閃いた名前があった。

（そうだ……あいつにすればいい）

そして、ヴァンパイア・キス でハイになった脳細胞が、近付くための作戦を組み立てていく。

（……それでいい。そうすれば、彼女は俺のものになる！）

自分で考えついた作戦に満足し、哲治はうつそりと笑った。

警察組織の描写はまったくのフィクションです……。

藤城グループ^{ふじしろ}。

日本で最初に銃の輸入・特許使用許可を取ったの銃製造を始め、一気に日本有数の規模となった企業体である。もともと重工業からIT産業にまで手を出し、幅広く活動していたが、銃の規制が緩和されるや、いち早く銃器分野に乗り出したことで知られていた。機を見るに敏というか、銃規制緩和の動きを早くから掴んでおり、水面下で海外メーカーとの商談を進めていた結果、銃器の分野では圧倒的なスタートダッシュで差をつけ、一躍経済界のトップクラスに躍り出たのだ。

その藤城グループの中枢ともいべき存在、会長の藤城隆造^{つゆみ}が脳溢血で他界したのは一年半ほど前のことだった。藤城グループの全権は、長男であり十年來の補佐役でもあった藤城雅孝^{まさたか}に受け継がれ、彼は父に劣ることなくその任を全うしていた。

だがそれは同時に、多数の敵を作ることの意味する。会長である彼の周囲には常に護衛チームが付き従い、大臣並みの警備体制が敷かれていた。

一圓千秋は、その護衛チームの一員として、現在ホテルの屋上にいた。

調整から戻ったばかりのシグザウエルSSG3000を抱え、ビル前のロータリーを見下ろしていた。グループ系列のホテルのオーブニングセレモニー。本来なら会長自ら出張するような仕事ではないのだが、ここの支配人になる人物は血縁に当たるといふ。そこそこできる男ではあるのだが、やはり箔をつけるために直々の出席を、と頼み込まれたのだそう。同族会社はこういうところが不便である。

屋外で貴賓席など、狙ってくれと言っているようなのだが、それで本当に襲撃されるようでは護衛チームの立場がない。ちゃんと仕事はしている。会場にはそれとなくチームの人間が紛れ込み、周辺にも数十人体制の警備網が敷かれていた。そして、最も怖い狙撃に対しては、考え得るポイントに人員を配置、狙撃自体を阻止すべく布陣している。しかしそれでも突破され、襲撃された場合、そこで、千秋のような狙撃手の出番となるのだ。このホテルは近隣の建物の中で一番高い。言い換えれば、周囲を見やすく周囲からは見られにくい。陣取るには絶好。

数十メートルの下方から、来賓の長広舌が切れ切れに聞こえるのを聞き流しながら、千秋はふと目をすがめた。

右斜め向かい、距離約六百メートル。このホテルよりも若干低いビルの屋上で、黒い影が動いた。千秋はインカムで、そのポイントの警備に当たっていたはずの同僚を呼び出す。

「おい、ポイント18！ 屋上に人上がってんぞ！ 警備はどうした！？」

応答はなかった。

舌打ちして、千秋は素早く伏射姿勢^{ブローン}を取り、SSG3000を構える。銃口にはすでに、サイレンサーを取り付けてあった。そのま^{チャンバー}まコッキング、薬室に弾を込める。スコープの倍率調整。スコープ越しに、向かいのビルの人影も伏射姿勢でライフルを構えているのが見えた。

「ちいッ　！」

風は微風。ほとんど勘で照準を合わせ、引鉄を引く！

バスン、とくぐもった銃声と共に、硝煙が広がった。強烈な反動で肩が鎖骨を持っていかれるが、もちろん千秋がそんな羽目に陥るはずもない。すぐにコッキング、スコープで相手の状態を確認した。わずかに風を読み違えたか、それとも焦りが出たせいか、銃を狙ったはずが肩を射貫いていた。防弾ベストを着ていても、ライフル

弾ならあっさり貫通する。引鉄を引くのは千秋の方が早かったようだ。向こうに硝煙らしきものは見えない。サイレンサーをかませたところで、硝煙を消すことはできないのだ。

競り勝ったことに息をついて、千秋は今度は誤差を考慮し、落ちて着いて狙った。さっきの一発で、相手はこちらの存在に気づいた。失敗を悟り、ライフルを置いたまま逃げようとする。

（逃がさねえよ）

一発目で風の流れは大体読めた。照準合わせ、発射。向こうの屋上のドアノブを吹っ飛ばした。コッキングして第三射。足が止まった相手の、左足を掠める。まともに当てたら出血多量で死なせる可能性がある。そこまでやると過剰防衛に問われかねない。

必要以上の怪我を負わせず、動きは止めるという離れ業を成功させて、千秋はインカムで近くのポイントに連絡する。

「ポイント18の屋上で、狙撃手を一人撃った。肩と足に一発ずつぶち込んだから動けないはずだ。押さえてくれ」

『了解した』

短い返答から数分と経たずに、向こうの屋上のドアが蹴破られた。同僚たちに狙撃手が取り押さえられるのを確認して、千秋はようやくスコープから目を離し、身を起こした。

カウンスナイピング。それが千秋の役目だった。遠距離からの狙撃が怖ければ、逆にその狙撃手を狙撃し返してやればいい。その発想のもとに、護衛チームには複数の狙撃手が所属している。千秋はその中でもトップクラスの腕前の持ち主だった。

下のロータリーでは、セレモニーが終わろうとしていた。頭上で狙撃戦が行われたことを、ほとんどの客は気づいていないようだ。

藤城の周囲を護衛チームが固め、特別仕様の車に乗り込むのを確認して、千秋はSSG3000をライフルケースにしまった。薬莢も拾い上げてポケットに突っ込むと、ホテルの屋上を後にした。

エレベーターで地下駐車場まで下りると、チームの同僚が待っていた。

「会長は？」

「現在移動中だ。狙撃手を押さえたそうだな。よくやった」
リーダーの大杉のおおすぎねぎらいに、気になったことを尋ねる。

「そついや、あそこの警備してた連中は？」

「襲われたそうだ。二人、重体で病院に担ぎ込まれた」

「そつか……」

覚悟の上の職場とはいえ、いい気分ではない。

「今度はどこかな」

「狙撃手の他に数人、押さえてある。吐かせるさ」

大杉が言つと凄みがある。身長百九十に届こうという長身とそれに見合つた逞しい体格。初めて会う人間はほとんど、威圧されてしまつて目を合わせられないという。性格は至つて物静かなのだが、仕事となれば相手に容赦などしないだろう。

相手の狙撃手たちに少々同情しながら、千秋は同僚たちと共に黒のヴォクシーに乗り込んだ。何台かに分乗した護衛チームが、次々に駐車場を出て行つた。

「今日はもう、外出はないだろう？」

「ああ、あのまま自宅に戻られるそうだ」

「やれやれ、じゃあ俺らの今日の仕事はこれで終わりってことか」
戻つたら、SSG3000を念入りにメンテナンスしなければならまい。今日の殊勲者だ。

千秋は車窓から見える景色にぼんやりと見入る。

ふと、ペニーハウスのコーヒーが飲みたくなつた。ついでにメンテナンヌも齋に頼んで……と考えたところで、舌打ちする。

今日は定休日だった。

帰宅後、那々はマンションの十四階にある直美の部屋を訪れていた。チャイムを押すと、直美ではなく家政婦の女性がドアを開けて

くれた。直美の親が、娘のために通いの家政婦を雇っているらしい。部屋に上げてもらうと、直美はリビングでDVDを観ていた。

「何だ、元気そうじゃん。休むっていうから、寝込んでると思ってた」

「朝の内はホントに起きられなかったんだもん……」

直美はDVDを止め、口を尖らせる。

「……学校、何か言ってた？」

「そんなには。事件のこと、先生しか知らないし。特に何か言われたり、つてのはなかったよ。あ」

思い出して、那々は顔をしかめた。

「そういや、ストーリーカーからまた手紙来た……」

「えーっ、ホントお？ 今日もまた、おんなじような内容で？」

「それが違うの。何かさ、昨日のこと知ってたんだよね。『昨日は大変だったね』って」

「え、じゃあ昨日、ストーリーカーがあたしたち見張ってたワケ？ 気持ち悪ーっ！」

「しかも、手紙があったのって家のポストじゃなくて学校の下駄箱だよ。ストーリーカーは十中八九、ウチの生徒とみた」

「うっそ」

直美が目丸くした。

「じゃああれよ、隣のクラスの佐野！ なあんかさ、怪しくない？ 暗そうだもん」

「暗いからってストーリーカーじゃ、今頃世の中ストーリーカーだらけだつて。それに、話したこともないよ？」

「一方的に好きになってつきまとうのが、ストーリーカーなんじゃない」

「……そりゃそうだけど」

妙に納得。

「ていうか直美、いきなり元気になったね」

「そりゃあ、ストーリーカーの正体に迫ろうってところだもん。許すまじ、よ」

「その意見には賛成。襲ってきたら殴り飛ばしてやる」

「ばしん、と拳を掌に打ち付ける。今どきの女子高生、ナメたら痛い目に遭うことを覚えてもらおう。」

「けどさあ」

ふと、直美が目を輝かせた。

「あのウェイターのお兄さん、天瀬さん、だっけ？ 無茶苦茶かつこ良かったよね」

「……あの状況で何言ってるの」

「だって、見たでしょ、あれ？ アクションスターみたいじゃない。あたし、やつぱ狙っちゃおっかな」

「あ、あんた彼氏いるじゃない！」

「そんなの気にしない、気にしない。 って言いたいところだけど」

にやり、としか形容できない笑みを、直美は浮かべる。

「那々、気になるでしょ」

「っ、あたしは別に」

「那々の好みのストライクゾーンだもんね、腕っ節強くて優しいハンサムなお兄さん」

「そうだけど、っていうか！」

那々は目を伏せた。

「似てる、んだよね。あの人に、すっごく似てる。生きてたらこんな風になってただろうなって、思うくらい」

「……那々」

「年もさ、生きてたらちようどあれくらいで。でもさ、だから分かんなくなりそうなんだ。もし好きになっても、どっちを好きなのかって。本人を好きなのか、それとも似てるから好きなのか、分かんなくなりそうで、それがやだ」

“彼”の顔が、頭に浮かんだ。面影があの子の青年に重なる。

「似すぎてて……はまりすぎてて、何か、さ」

ため息をついた那々に、直美があっさりと言った。

「いいじゃん、別に」

「何が」

「最初は“似てるから好き”かもしれないけどさ、その内“本人が好き”になるんじゃない？ そんなもん、一日二日じゃ分かんないよ」

「そうかもしれないけどさ」

「だからさ、とりあえず告っちゃえ」

「何でそうなるの！？」

「だって、那々が好きかもっていう相手、好きになるわけにいかないじゃない。大丈夫、那々が振られたら、改めてあたしが告るから」

「あのねー！！」

ちよつと感謝しかけたのに、キレイさっぱり吹っ飛んだ。

相談相手間違ったかも……。

直美がすっかり元気になったのは喜ばしいものの、那々はこっそりため息をついた。

午後五時。斎はなぜか、警視庁にいた。

昼過ぎにいきなりかかってきた電話で、本庁まで呼びつけられたのだ。昨日の事件で、犯人逮捕に貢献したということで感謝状を渡すとかという話だった。辞退しようかとも思っただが、

『公安の“姫”がわめいてるぞ。こつちが忙しくておまえの顔見られないのに、俺だけ会うのは抜け駆けだってな。このままじゃ本庁が崩壊する。東京の治安のためにも、感謝状は受け取りに来てくれ。金一封もつくぞ』

諸角の口説き落としに負けた。金一封はともかく（あつて困るものでもないが）、公安のあの“お姉様”を放っておくのが怖い。

捜査一課の部屋は、相変わらずがらんとしていた。これだけ広い部屋に、余すところなくデスクが並んでいるというのに、人の姿が

見事にない。さすがに警視庁、捜査員も多いが抱えた事件はそれに倍して多い。

齋を見つけた諸角は、上機嫌で近寄ってきた。

「早かったな」

「叔父さんに送ってもらいました」

齋は車やバイクを持っていない。本来ならあった方がいいのだろうが、あまり運転はしたくないのだ。身分証明に便利なので免許だけは取ったが、まったくのペーパードライバーである。だからこういう時は、叔父に送ってもらうか公共交通機関を使うかだ。交通網の発達した大都市はありがたい。

「でも、昨日の今日で感謝状って、異様に早くないですか？」

「“姫”がごねた。昨日も同じ本庁内にいたのに、ニアミスで会えなかったのが相当悔しかったらしいな」

「……警視庁がそんなんで動かされちゃっていいんですか」

「諦める。あの“姫”の言うことだぞ」

確かに、諦めるしかなさそうだ。齋はため息をついた。

その時、捜査一課の入口から黄色い声があがった。

「齋くん！ 久しぶりねえ！」

振り向くが早いか、すぐ眼前に瞬間移動のごときスピードで移動していた相手に、心持ちのけぞる。下手をすれば抱きつかれかねない勢いだ。

明るい栗色の髪をアップにまとめて、ベージュのパンツスーツに身を包んだ美女。年は三十前というのが二年前からの自己申告だ。そう高いヒールを履いているわけでもないのに、齋と同じくらいの身長があった。ちなみに齋は一七五センチ。

「お久しぶりです、氷峰^{ひみね}さん」

「齋くんが来るっていうから、一番のお気に入り着て来たわよオ。

似合ってる？」

「似合ってますよ。知的美人って感じですよ」

「やった、嬉しいこと言ってくれるじゃない。あなたも相変わらず

いい男ね。彼女はできた？」

「まだですよ」

「あらら、そういう方面は奥手ねえ。いつそわたしが、見繕ってあげましようか？」

「遠慮します！」

見かねた諸角が、助け舟を出した。

「そろそろこっちの用事を済ませてもいいか？ 感謝状の授与があるんだが」

「あら、そんなの後でもどうとでもなりますでしょ？」

助け舟、あつさり撃沈。

「新聞社の方にも、写真の撮影は断つてあるから大丈夫よ。こーんな美形なのに写真が嫌いなんて、もったいないわねえ」

「嫌いつていうか、苦手なんです。身内の記念写真程度ならともかく、大人数に見られる写真つてというのが、ちよつと……」

「あーんもう、人見知りがまた可愛いのよね」

二十二の男が可愛いなんて言われても嬉しくないです。ついでに人見知りつてわけじゃないんですが。

無論面と向かってなど言えやしないので、あやふやな笑みを浮かべてお茶を濁す。

まだまだ話し足りなさそうな彼女のポケットで、その時携帯の着信が鳴り響いた。

「はい、氷峰。 出勤オ？ 集会い？ こっちは今貴重なランデブーの時間を……あーっもう、分かったわよ、行きやあいいんですよ！ ったく、あんの薄らハゲ、後でじっくり締め上げてやる！」

鼻息も荒く電話を切った彼女は、これ以上ないような悔しそうな表情でヒールを踏み鳴らした。

「ああ、ったく！ せつかくの潤いの時間だったのにイ！」

「大変ですね」

「ものすつごく悔しいけど、一応仕事はしなきゃね。じゃね、斎くん。また来てね」

「はあ……できれば事件以外で来たいんですけどね」

「待ってるわ」

軽く投げキスを残して、彼女はヒールの音も高らかに捜査一課を後にした。

……嵐が去った……。

見送った斎と諸角は、揃って息をついた。

「今日はいっぴくなくハイでしたね、氷峰さん……」

「ストレス溜まってたんだろうな。やれやれ、今日公安の世話になる奴は悲惨だぞ」

諸角の慨嘆に、斎は乾いた笑いを浮かべた。

氷峰凜子^{りんこ}。警視庁公安部に所属する彼女は、本庁では密かに“姫”と呼ばれ知られていた。彼女の父親は国家公安委員長。警察庁の大ボスである。だからといって彼女が親の七光りで警視庁に所属しているかといえば大間違いで、彼女は東大法学部主席卒業、国家？種ストリート合格という恐ろしい経歴の持ち主だ。泣く子も黙るキャリア組。

そんな彼女の目下のお気に入り、斎だった。どうも彼女は年下好みらしい。銃の修理でペニーハウスを訪れた時に一目で気に入られ、以来何かにつけて構い倒されている。

「さて、と。時間取らせて悪かったな。こっからが本題だ」

「……忘れてました」

実際、感謝状のことなど頭から飛んでいた。まあもう少し付き合え、と肩を叩かれて、ため息をつきながら従う。

本来の用件だったはずの感謝状授与の方がよっぽどあっさり終わって、それでも斎が解放されたのは、警視庁に来てから一時間近く経ってからのことだった。近くで時間を潰している立河に連絡してから、正面玄関から出ようとして、エントランスの張り紙に目が留まる。

【この顔にピンと来たら110番】というお馴染みのフレーズの下に、ずらりと写真やモニタージユが並んでいた。その中に一際スベ

―スを割いて、数人の男女の顔が配置されている。

【青銀天聖教団 幹部たち】。

斎の表情がわずかにこわばる。目をそらして、エントランスを出た。

しばらく待っていると、立河のフィットが見えた。駆け寄って乗り込むと、深々と息をつく。

「どうした、えらく疲れて」

「氷峰さんの勢いに負けたの」

「彼女はおまえを気に入ってるからなあ」

笑いながら、立河はフィットを車の流れに滑り込ませる。遠ざかる警視庁を見ながら、斎はぼつりと呟いた。

「……教団の残りのメンバー、まだ捕まってるみたいだね。張り紙があつた」

「おまえにはもう、関係ないことだ」

「うん、でも……もし。万一、僕のことがばれたら」

「その時は、俺も一蓮托生だな。諸共に刑務所か」

「違うよ。警察にじゃなくて。教団の残党は、僕のこと恨んでるよ。教団の崩壊のきっかけになったのは僕だから。報復くらい、してきかねない。時々、怖くなるんだ。もし今、教団が襲ってきたらどうしようかって」

「斎、」

「僕だけならまだ構わない。けど、叔父さんや周りの人が巻き込まれたらって思うと……いつそ、僕だけ消えちゃった方がいいんじゃないかって、何度も考えて」

「ペインレス・ドッグ はもういない。海の藻屑になって消えた。それが事実なんだ。そうだろう？」

「でも僕は、顔を変えてない」

ガラスに映り込む自分の顔を、斎は見据えた。

「教団の人間が見れば、すぐ分かるよ。あの子にだって、顔を見せてる。あの子、覚えてるみたいだった」

「五年経っててか？」

「……似てるって、言われた」

「知ってるか？ 世の中には三人、似た顔の人間がいるんだとよ」

「それで、言い逃れるの？」

くすくす笑ってそう言えば、大真面目に肯かれた。

「ペインレス・ドッグ は天涯孤独だったんだろ？ おまえには俺っていう、立派な保護者がいるじゃないか」

「……僕一応成人してるんだけど」

「親にとつちや、子供はいくつになっても子供なんだよ。もつとも、叔父と甥だから“子供みたいなもの”か」

ああ、このひとも。

同じことを、言う。

自分の“親”だったがために、死んでしまったあの人と。

気がつくと、ガラスの中の自分が泣いていた。

「おい、斎……？」

気遣わしげな立河に、ふるふると首を振る。

「ちが……あのさ」

これは、五年前の自分の涙だ。とまらない。

「……僕が、守るからね。誰かが僕らを狙ってきたら、戦ってでもその人を、撃つことになっても。叔父さんたちを、守るから」

そのために斎は、銃を持ち続けている。

戦うための爪と牙を、捨てずにいるのだから。

例え、誰かを傷つけ その命を奪うことになったとしても、大切な人を守るためならば、何も感じずにいられる気がした。

あの頃と同じように。

（……やっぱり僕は、ペインレス・ドッグ のままか）

身体も心も痛みを感じない、ただ戦うだけの犬。

ガラスの中の自分を嘲笑うように唇を歪めて、斎は少し乱暴に両

眼を拭った。

今日もまた、下駄箱の中に手紙がある。那々はうんざりした気分
で、それをゴミ箱に叩き込んだ。朝っぱらから、いきなり気分をブ
ルーにしてくれる。

「何かもう、ここまで来ると根性じゃない？ ホントに読まれてる
って思ってたのかな」

「知らない。っていうかもうゴミ箱に放り込むのすら面倒になっ
てきたんだけど」

「いつそポストでもつけてあげれば？」

「それこそ逆効果だって。調子に乗られたらどうすんの」

ため息をついて、那々は上履きに履き替え、教室へ向かう。する
と、追いついてきた直美が腕を引っ張ってきた。

「ねえねえ、今日、あのお店行かない？ ペニーハウス」

「え？ あそこに？」

「そ。だってまだ、お礼言っていないじゃない？ 警察に呼ばれた時
は、それどころじゃなかったしさ」

「……って言いつつ、実はもっかい天瀬さんに会いたいでしょ」

「あら、那々だって嫌なわけじゃないでしょ？ それに、これって
チャンスよ？」

「チャンス？」

「彼と接近するチャンスってことよ。ああもう、あたしって友達思
いよね」

「あのねえ！」

「で？ どうする？」

「……………行く」

そう、助けられた礼を言いに行くくらいは、当たり前のことだ。
直美の思惑に乗るのはともかく、那々は肯いた。

「そー来なくちゃ！　じゃあ放課後　」

「直美！」

那々が声をかけたが、遅かった。話し込んでいて前を見ていなかった直美が、階段の降り口からひよいと出て来た女子生徒にまともにぶつかったのだ。

「ごつめーん……」

ぶつかった相手を見て、直美は絶句した。

長く垂らしたストレートの髪は、ほとんど金に近いほど徹底的に脱色されている。切れ長の目がきつい印象を与えるが、クールな雰囲気美人だった。どちらかといえばいいところの子女が多いこの学校では、あまりいないタイプだ。

彼女は落としたバッグを拾い上げ、さっさと廊下を歩いて行った。ぽかんとそれを見送り、二人は何となく顔を見合わせた。

「……あんな子、いたっけ？　今まで見たことないけど……」

「学年違うんじゃない？」

「でも、上履きの色おんなじだったよ。ウチって上履きの色で学年分かるじゃん」

「けど、何かきつそうな子よね」

直美が眉を寄せる。彼女とは、あまり合わないタイプに見えた。教室に入ろうとした時、那々は一人の男子生徒に呼び止められた。上履きの色は二年生の青。

「ねえ、君、今朝手紙捨ててたよね？」

「……そうですけど？」

別に他人にどうこう言われる筋合いはない、と言おうとすると、彼は意外なことを口にした。

「あのさ、俺、その手紙入れてたっぽい奴、見たんだ」

「ええ！？」

那々と直美は、思わず揃って声をあげた。

「それって、どんな奴でした？　実はこの子、ストーカーされてて　」

「ちよつと、直美！」

いきなり核心の話をしようとする直美を、慌てて止める。あまり吹聴したい話ではない。しかし、彼はあまり動じた様子もなかった。「そうなんだ。だったらやっぱり、声かけてよかったよ。そいつ、君らと同じ学年みたいだったな。上履きの色が同じだったんだ」

「名前とか、分かります？」

「さあ……そこまでは。学年違っちゃうと、もう誰が誰だか分からないし。けど、何か下駄箱でがさがやってて、変な奴だと思ったからさ」

「そうなんですか……どうも、ありがとうございました。学年も何も分かんなくて、気持ち悪いと思ってたんです」

「いや、役に立ってよかったよ。じゃあ、俺はそろそろ教室戻るから」

男子生徒が行ってしまうと、那々は直美と顔を見合わせた。直美が勢い込む。

「やっぱさあ、隣のクラスのあいっじゃないの？」

「まだ分かんないよ。けど、おんなじ学年ならまだ気が楽だよ。二、三年とかだったら、断るにしても何か気まずいじゃん」

「えーでもさ、同学年は三年間一緒なんだよ？ そっちの方が嫌じゃない？」

「う、それはそうかも」

一長一短。那々は複雑な気分でこめかみを押さえる。

「とにかく、一歩前進かあ。よかったじゃん。解決の日は近いかもよ」

「だいいけど」

あまり期待せずにぼやいて、那々は自分の席に腰を下ろした。

哲治は、弾むような足どりで教室に向かっていた。

彼女と話せた！

今まで遠目にしか見たことのなかった星海那々と、間近で話したのだ。響きのいい、柔らかい声。はきはきした物言いが心地よかった。緩みそうになった頬を押さえるので必死だった。

我ながら、いい手だと思う。協力者を装えば、絶対に疑われることはない。現に彼女だって、感謝してくれた。

そうだ。俺はいつだって、彼女の味方だ。

やはり ヴァンパイア・キス は手放せない。これがあれば、何でもできそうな気がする。

哲治はそつと、ポケットに手をやった。そこには、小さな袋に詰めた粉末状の ヴァンパイア・キス が入っている。

昨日、一錠分を潰しておいた。気づかれないよう他人に飲ませるには、錠剤では都合が悪い。粉状にしたものを何かに溶かして、飲ませるつもりだった。この一錠はもちろん、自分の取り分から出したものだ。痛い、仕方がない。成功すれば、 ヴァンパイア・キス も、そして那々も手に入るのだから。

飲ませる相手は、決まっていた。

沖田直美。

沖田商事の社長の娘で、那々の親友。生贄としては、これ以上ない存在だ。彼女を引き込めば、“彼ら”も哲治を認めるだろう。

不思議と、那々自身に ヴァンパイア・キス を飲ませようとは思わなかった。昨日は、彼女を思いのままにできるという一言に強く惹かれたが、時間が経つにつれて考えが変わってきたのだ。

薬で振り向かせても意味がない。自分自身を、那々に認めてもらうのだ。そして互いに想い合うようになってから、 ヴァンパイア・キス を使っても遅くはない。

それに、哲治が直美に ヴァンパイア・キス を飲ませようと決めたのは、他にも理由がある。

一昨日の事件。

直美があのお店に引つ張って行かなければ、那々があんな危険な目

に遭うことはなかったのだ。そして、彼女を救いに飛び出せなかった哲治が、身を焼かれるような嫉妬と屈辱を感じることも。

すべての原因は、あの女だ。

だから、めちやくちゃにしてやる。

あの女を薬漬けにして“彼ら”にくれてやる。“彼ら”は喜ぶだろう。何せ、高嶺の花のお嬢様だ。豊富なドラッグで、身も心も犯し尽くしていくのは目に見えていた。

当然の報いだ。那々を危険に晒したことへの。

そのためにも、彼女たちに近づく必要があった。

最初の一手は、思った以上にうまく行った。彼女たちはまったく、哲治を疑っていない。後は、彼女たちに協力するふりをしながら、機会を見計らって直美に　ヴァンパイア・キス　を飲ませればいい。一度飲ませれば、後は坂を転がり落ちるようにのめり込む。哲治自身、そうだったように。

（明日辺り、また同じ奴見かけたって言ってやるのか。それから、誰か適当な奴をストーカーに仕立て上げて……）

ヴァンパイア・キス　を摂取した頭は、目まぐるしく回転し、作戦を練り上げていく。その感覚が心地よく、哲治はくつくつと喉を鳴らした。

予鈴のチャイムが、校舎内に響き渡った。

「いらつしやいませ」

店のドアが開く音に振り返った斎は、少し目を見張った。

「あれ？」

「あの……こんにちは」

おずおずと店に入って来たのは、二人の女子高生だった。星海那々と、友人の沖田直美。

「あの、一昨日はどうもありがとうございます。あの後バタバタしてて、言い忘れてたから……」

「あたしも、あの後ちよつと寝込んで。ホントは、昨日来なきゃいけないかったですよね」

気後れしたような彼女たちに、斎はかぶりを振った。

「そんなことないよ。実は昨日、ウチも定休日だったから。来てくれて、いなかったかも。夕方なんか出かけてたし」

「そうなんですか？」

「うん、だから気にしないで。っていうか、わざわざありがとうございます」
にこりと微笑まれて、少女二人はほっとしたように顔を見合わせた。

「でも、凄いですよね。普通あんな状態で、犯人取り押さえになんて行けないですよ」

「まあ……あれが初めてってわけじゃないし」

「え！？」

「前なんか、いきなり店に押し込まれて、大変だったなあ。店の中のもの壊したら、叔父さんに殴られかねないし……」

「こら、聞こえてるぞ、斎」

「あ」

カウンターから飛んできた声に、斎はしまったと振り返る。立河は苦笑しながら、グラスを二つ取り出して、コーヒーを淹れているところだった。

「大体、その犯人を椅子でのしちまったのはおまえだろう」

「あゝうん、それはそうなんだけど」

「……椅子……？」

「うん、相手銃持ってたし、手近に他に適当なものもなかったから店壊されない内に、椅子できっちりとドメ刺させていただきました」
意外にバイオレンスな一面に、那々も直美も一瞬呆気に取られた。だがこれぐらいでないと、銃を持った強盗を取り押さえになど行けないのかもしれない。

「お嬢さん方、そいつはこう見えて結構修羅場潜ってるよ」

立河が笑いながら、斎を手招きする。

「ほら斎、お客さんを席に案内しろ。それと、これ」

トレイに載せたグラスを、斎によこした。

「サービスだ」

「分かった」

斎は少女たちをテーブルに案内し、グラスを置いた。一昨日彼女たちが注文したのと同じメニュー。

「マスターから。サービスだって」

「え、でも……」

「いいの、若い女の子には親切なんだから。ありがたくいただいきなよ」

どうせ他にお客さんいないし、と身も蓋もないことを言う。確かに、ぼつかりと空白になったように、店内に客の姿はなかった。

「それじゃ……いただきます」

那々はカフェオレを一口含んだ。相変わらず絶品だ。

カフェオレは冷たいのに、ほんわりと温かいものが広がる。カフェオレの温度ではなく、記憶の底の方から。

今度は、ちゃんとお礼言えた。

五年前は、言いたくても言えなかった。言う前に、“彼”は永遠に手の届かないところに行ってしまったから。

ちらりと斎を見やると、彼は他のテーブルを拭いていた。手慣れた、無駄のない動き。あの手で、一昨日はためらいもなく、銃を撃った。

どっちが、本当の彼なんだろう。

ウェイターの彼と、銃工の彼。

そして重なる、“彼”の面影。

ぼんやり見つめる那々の視線に気づいたのか、斎がふと振り返った。

「何か？」

「あ、いえ、別に……」

「那々の好みのタイプに、天瀬さんがぴったりなんです」

「直美いいっ！」

よりもよって本人の目の前で言うか、それを！

耳まで真っ赤になった那々を、直美がにやにやしながら見やる。

「だあってその通りじゃん。腕っ節強くて優しいハンサムなお兄さん」

「それなら直美だって、狙おうかなあなんて言ってたでしょ！」

「ええと……それはとっても光栄んだけど」

遠慮がちな斎の声に、二人ははたと言い合いをやめた。照れ臭そうに、斎がカウンターを指差す。

「できれば、もう少しトーン抑えてほしかったなあ、と……」

カウンターの途中で肩を震わせている立河に、那々と直美は揃って頬を赤らめた。

「……ごめんなさい」

「いや、そいつはそういう方面には小学生並みに奥手だからな。未だにフリーなんだ。せいぜいからかってやってくれ」

「叔父さん！」

慌てる斎に、今度は那々たちが笑い出す。

「でもフリーなら大チャンスじゃん。那々、立候補しちゃうば？」
直美がけしかけるが、那々はふつと顔を翳らせた。

「あたしは……まだ、そういうのは」

「そうだよ。別に急ぐもんじゃないし、そういうのは」

「おまえは少しは急げ。五年前から彼女の一人もいないじゃないか」
フオーした斎に立河の絶妙な突っ込みが入って、少女たちがまた沸いた。だが那々は、奇妙な一致が気になる。

（五年前？）

もちろん、ただの偶然なのだろうが。

那々は再び、斎を見つめた。

また、“彼”が重なった気がした。

礼を言いに行ったつもりが結局コーヒーを一杯ずつご馳走になり、那々たちがペニーハウスを出たのは五時半を回っていた。斎とはもちろん、マスターの立河とも予想以上に話が弾んでこの時刻だ。

立河と斎は叔父と甥ということだったが、むしろ親子のように見えた。しかし那々がそう言つと、二人とも意味深な目配せを交わして苦笑してみせたものだ。何か事情がありそうな感じではあったが、馴染みでもない自分がどうこう言う筋でもないと思っただけで、見ないふりをした。

マンションへの道を辿っていると、直美のポケットから携帯の着信が聞こえた。

「誰？」

「んふふ、マ・サ・ヤ」

「ああ、彼氏ね」

名前など知らなかったが、この浮かれようからして間違いない。直美が上機嫌で電話しているのを那々は聞くと、もなしに聞いていたが、通話を終えた直美がいきなり拝み倒すように頼み込んできた辺

りから、他人事ではなくなってきた。

「あのさ、那々。今日、マサヤのバイト先が定期清掃の日で、早く帰れるっていうから、これからデートの約束しちゃった。悪いんだけど、中村さんなかむらにうまいこと言っでごまかしといってくれない？ 二、三時間くらいで帰るからさあ」

「そんなにどうやってごまかすのよ？」

「うーん……じゃあ、本屋に寄って、そこで中学ん時の友達に会って話してたことにするから、口裏合わせてよ。ね？」

「ん、まあ、それくらいなら……」

「さーんきゅっ！ じゃああたし、待ち合わせあるから！」

さっさと行ってしまった直美を見送り、那々はため息をついた。

やっぱり、彼氏作った方がいいんだろうか……。

“彼”に重なる彼を思い出し、慌ててそれを打ち消した。

（いくら何でも……昨日の今日で）

ぶんぶんとかぶりを振って、足を早める。実は少々心細かった。ストーリーカーが一昨日の事件を知っていたということは、後をつけられていたということだ。もしかして今も、などと考えると、つい足どりが早くなる。

マンションの入口が見えた時は、ほっとして急いで駆け込んだ。エントランスの郵便受けに何も無いの確認し、家に戻るより先に七階上の直美の部屋へと向かった。

チャイムを押すと、家政婦の女性が顔を出す。中村という名前なのは、今日初めて知った。

「あら、お嬢様のお友達の……」

「あの、直美……さん、ちょっと本屋に寄るから遅くなるって言っていました。中村さんに伝えてほしいって頼まれたんで、お邪魔したんですけど」

「あらまあ、わざわざどうも。お宅から電話でも結構でしたのに」

「いえ、どうせ近くだし、エレベーターで上がって来るだけなんで

……」

もごもごと喋って、早々に辞去した。何となく後ろめたい。

家に帰ると、母はまだ帰っていなかった。五年前の事件の後、母は空港職員を辞め、現在は保険の外交員の仕事に就いている。定時に帰れても、バスの時間がかみ合わないこともあるし、買い物をするに三十分くらい余計にかかるのはしよっちゅうだ。きつと今頃は帰りのバスの中か、デパート辺りで買い物の中だろう。

リビングでテレビを見ようとして、ふと窓が目に入った。毎年七月十一日、“彼”が亡くなった場所に向かって、那々が手を合わせる窓だ。

あたしは、どうしたいんだろう。

那々はぼんやりとソファに座って、窓を見つめた。“彼”を想っているはずなのに、彼 天瀬斎のことが気になって仕方ない。

いつの間にか、直美のデートのことも忘れていた。

運が向いてきたのかもしれない。

そんなことを考えながら、哲治は直美の後をつけていた。

ヴァンパイア・キスの効用か、直美に薬を飲ませる方法は何通りか考えついた。帰り道、那々について行きたいのを我慢して、必要になりそうな道具を手に入れるために走りもした。直美の方がペニーハウス に行くとか騒いでいたので、彼女たちの行方を掴むのは簡単だった。

そして今、直美は那々と別れ、一人で繁華街の方へ向かっている。

哲治の計画の一番のネックが、偶然に解決された。

彼が一番悩んだのが、どうやって二人を引き離すかだった。哲治は二人ともに顔を知られている。直美に薬を飲ませることが成功しても、那々に怪しまれては元も子もない。二人を引き離した上で、直美に ヴァンパイア・キスを飲ませるケースが理想的だった。そのチャンスが、棚ボタのように転がり込んできたのだ。

直美は携帯で時間を確認すると、一軒の喫茶店に入った。ここで待ち合わせか、時間を潰すのか。

どちらにしても、チャンスだ！

哲治は顔を伏せ、彼女から少し間を置いて店に入った。ざっと見渡し、直美が窓際のテーブル席にいるのを確認する。カウンターはいくらかも空いているのだから、ここで待ち合わせなのかもしれない。直美は入って来た哲治に気がつかず、携帯のメールに夢中になっている。

奥まったテーブルを確保すると、まずアイスコーヒーを注文する。そして哲治はデイパックを置き、必要なものをポケットに突っ込んでトイレに向かった。途中でシロップや氷を置いているカウンターに立ち寄り、コーヒー用のガムシロップを一つ、手の中に隠し持った。

トイレは男女兼用で、水道もすべて備え付けになっている。鍵をしっかりとかけると、ポケットの中を探って、ヴァンパイア・キスの袋と小さな注射器を取り出した。近くのデパートを探して、見つけてきたものだ。夏休みが近くなって、昆虫採集のキットが売り出されているので、割と簡単に手に入った。

注射器からピストンを外し、ヴァンパイア・キスをこぼさないように慎重に注射器の中に流し込む。そして、針から噴き出してしまわないよう、ゆっくりとピストンを押し込んだ。ある程度まで押し込むと、水道の水を掌に溜め、注射器の中に吸い上げる。針にキャップをして軽く振ると、粉状の薬はあつという間に溶けていった。

持って来たガムシロップの容器の、蓋の少し下に針を押し込み、ピストンを押し込んだ。少し振って混ぜてしまうと、注入した液体はガムシロップに違和感なく溶け込んだ。針の穴も、蓋の張り出しのすぐ下で目立たない。

哲治は注射器や袋をトイレに流すと、ガムシロップを持ってトイレを出た。

直美のテーブルを見ると、やっとメールを終えたのか、メニューを見ている。決めたらしく、ウェイトレスを呼んだ。

「アイスコーヒー、一つ」

哲治はカウンターに向かった。直美も席を立ってカウンターに行こうとしている。わずかに、哲治の方が早くカウンターに辿り着いた。

「あれ？」

あたかも今気づいたように、目を見張ってみせた。

「君、確か……」

「ああ、昨日の」

「今日は、友達と一緒にじゃないんだ？」

「やだ、いくら何でもいつも一緒なわけじゃないですよ」

「それもそうだね。あ、ガムシロップ？ フレッシュもかな」

哲治は備え付けの籠からガムシロップを取るふりをして、隠し持っていたシロップをコーヒーフレッシュと一緒に直美に渡した。

「あ、どうも。じゃ、あたし待ち合わせしてるんで」

「ああ、引き止めて悪かったね」

哲治は席に戻ると、興奮を押し隠して直美のテーブルを見やった。彼女は程なく来たアイスコーヒーに、シロップとコーヒーフレッシュをためらうことなく注ぎ入れて、一気に半分ほど飲んでしまった。

やった！

直美から目を離し、哲治もアイスコーヒーに口をつけたが、味などほとんど気にならなかった。急に喉の渇きが襲ってきて、三分の二ほどを一気に飲み干す。

ドアが開いて、若い男が入って来た。直美が手を振ったところを見ると、彼が待ち合わせの相手らしい。

今の内に、せいぜい楽しめばいいさ。どうせすぐに、それどころじゃなくなるんだから。

哲治は席を立ち、支払いを済ませて店を出た。直美の笑い声が追いかけてきたが、ドアを閉めるとすぐに聞こえなくなってしまった。

これは夢だ。

立ち尽くし、目の前の光景を見つめる。手にした銃が滑り落ち、ごとりと重い音をたてた。

白い布に覆われたそれが、誰より大切な人なのだと、聞かされてはいても頭が受け付けなかった。ふらりと足が動いて、それが横たわるベッドに近づく。

そうだ。あの人が、こんな簡単に死ぬはずがない。

自分を落ち着かせて、そっと布をめくった。

見知った 自分の一番大切な人が、そこで静かに目を閉じていた。

「ッ！」

膝の力が抜けて、その場にへたり込んだ。

「あ……ああ……っ」

シーツを固く掴んで、縋るように見上げる。横たわる彼は、もちろん目を開きはしなかった。触れた手の冷たさに、やっと頭が動き出した。ただ眠っているだけなのだと、現実を拒否するには、少年自身同じような光景を見すぎていた。

死。

その一文字に、打ちのめされた。

喉から漏れる声が、まるで獣のようだ。人ですらない、ただの生物としての慟哭。

それでも、涙は出なかった。

どれくらい、そうしていただろうか。

掠れた声をあげ続ける彼の肩に、手が置かれた。有無を言わず、引き離される。

「……気は済んだか」

ぼんやりと、声の主を見上げる。細面の、神経質そうな男の顔。

彼はベッドの方を一瞥し、少年を引きずるように立たせた。

「おまえも、任務を終えたばかりだろう。明日も早い。身体を休めなさい」

言葉の羅列が、頭を通り過ぎていく。

任務？ 休む？

彼が死んだのに？

「……い、やだ……」

幼い子供がそうするように、ゆるゆるとかぶりを振った。

「ここにいる。　　ここで、一緒にいる！」

「いい加減にしろ、　ペインレス・ドッグ　！」

「嫌だ！」

腕を振り解こうとすると、頬を張られた。痛みは感じないが、衝撃は感じた。すうつと、頭に上った血が引いていく。

おとなしくなったこちらに安心したのか、男は腕の力を緩めた。

「サイレント・ファンク　静かなる牙　は死んだ。もうおまえと共にいることはかなわな

い。現実だ。　おまえだって、仲間が死ぬのは初めてじゃないだろう」

そうだ。彼は死んだ。自分は生きている。だから、一緒にはいられない。

なら　死んだら？

ふと、視線が動いた。床に転がる一丁の銃。あれで頭を撃ち抜けば、きつと追いつける。

彼のところへ。

そう思った瞬間、男の腕を振り解いて飛びすさった。すくうように銃を拾い上げ、セーフティを解除、スライドを引いた。

「何を　！」

「なら、僕も死ぬ。父さんと一緒に死ぬ！」

銃口を頭に押し当て、引鉄を引き絞ろうと　。

した瞬間、背後から凄まじい力で手首を掴まれ、腕を捻り上げられた。取り落とした銃を、広い掌が受け止め、耳元で怒鳴り声が炸

裂する。

「てめえ！ 何してやがる！」

「放せ！ 僕は　　！」

身体が動かない。暴れようとすると、急に突き放された。虚を突かれてよろけた彼の首筋に、手刀が打ち込まれた。

そして、意識が闇に落ちる。

ガタン、と音がして、立河は目を開いた。反射的に時刻を確認する。午前一時。

嫌な予感がする。

ベッドから抜け出すと、隣の斎の部屋のドアを叩いた。

「斎？ 入るぞ」

部屋に足を踏み入れ、立河は嫌な予感的中したことを知った。必要最小限のものしかない部屋の中、斎は手足を投げ出すようにしてベッドに横たわっている。目を見開き、荒い息を繰り返していた。しかし、目を開いてはいるものの、立河の姿を捉えてはいない。「斎！」

声をかけても無駄だと悟って、立河はやや乱暴に、斎の肩を掴んで揺さぶる。初夏にあるまじき体温の低さに、ぞっとした。

「あ……」

呻くような声を漏らして、斎が身じろぎした。見開いたままの瞳が、次第に焦点を結び始めて、立河を認めた。とたんに、飛び起きる。

「はあ……ッ、は……」

必死で息をつく肩を抱き込むようにして、落ち着かせた。

「……落ち着いたか」

「ごめ……今、何時……？」

「一時だ」

「昼の……じゃないよね。ごめん、起こした」

「気にするな。寝られそうか？」

「……ん、しばらく無理。喉渴いた。水飲んでくる」

ふらりと立ち上がり、斎は台所へと消える。立河は後を追おうとして、床に落ちた時計を蹴飛ばした。音の正体はこれだったらしい。台所で、斎は冷蔵庫から取り出したミネラルウォーターを、貪るように飲み干しているところだった。ボトルの三分の一ほどを一気に飲んでしまうと、息についてキャップを締める。

「……参ったなあ。最近、大丈夫だと思ってたんだけど……」

まだ少し掠れた声で、斎は苦笑混じりにぼやいた。

だが、無理もないと立河は思う。この数日、斎にとって過去を思い出させるに十分な出来事が続いた。特に、五年前に救った少女との再会は、予想などしていなかっただけに強烈だろう。

彼女の存在が悪いとは言わない。だが、それに関連してくる記憶が悪すぎた。

五年前、彼らが叔父と甥になった当初、斎の状態はひどいものだった。そこから、ゆっくりと時間をかけ、回復してきたのだ。しかし、もう大丈夫かと思えば、思い出したように脆い部分が顔を覗かせる。この五年間、斎がこういう状態になった回数は両手の指ではきかなかった。

自分も、そして斎も。それぞれ、過去を背負っている。

血塗られた過去を。

「叔父さん、もう寝ててよ。僕もうちょっと起きてるから。大丈夫、明日に響くような夜更かしなんてしないからさ」

「寝られるのか？ 俺もさすがに昔みたいに、寝付くまで面倒は見きれんぞ」

「もう子供じゃないよ」

「子供みたいなもんだ、いつまで経っても」

そう言っただけで、斎はきょとんと目を見張り、ふっと微笑した。そうだね。そうかもしれない」

呟いて、ミネラルウォーターのボトルを揺らした。

「……昔、おんなじこと言われたよ。叔父さんみたいに、僕のことを子供みたいだって、言った人がいたんだ」

「そうか」

「うん」

斎はボトルを冷蔵庫に戻すと、先ほどよりもしつかりした足どりで歩き始めた。

「寝られそうか？」

「うん、大分落ち着いたから。しばらく横になってれば、寝られると思う。起こしちゃってごめん」

「いいから、早く寝ろ」

ぽんと肩を叩くと、大分体温が戻っていて、ほっと息をついた。

「ん、おやすみ」

斎が部屋に戻って行くと、立河は複雑な気分で台所を後にする。自分より前に、斎が親のように慕っていた人物がいることは知っている。だがその人物のことについて、斎はこれまで、ほとんど口を開かなかった。

ずいぶん、依存していたのだと思う。今でも夢に見るくらいには。

もうそろそろ、解放されてもいいんじゃないか。

あの様子を見ると、囚われている、とさえ思えてしまう。

（……やれやれ。ずいぶん肩入れしちまったな）

かぶりを振って、立河はベッドに潜り込んだ。叔父というより、もろに父親の気分だ。

布団をかぶって、強引に目を閉じる。

翌朝、寝過ごさないことを祈って。

「……美。直美？」

那々の声に、直美ははっと我に返った。

「あ、何？」

「どうかしたの、何かすつごいばーつとしてるよ。具合でも悪い？」
「うん……何か、頭重いつていうか……微妙に、すつきりしないんだよね」

「保健室行ってきた方がいいんじゃない？」

「……そうだね。ちよつとサボるか。那々あ、ノート頼んでいい？」
「いいから、早く行つてきな。ついてこうか？」

「大丈夫。そこまでひどかない」

次の三時限目は、直美が苦手な英語だった。堂々とさぼれるのなら、体調不良もありがたいというべきか。

保健室には、誰もいなかった。養護教諭は席を外しているらしい。ベッドに寝転がった直美は、一向におさまらない頭の重さに内心首をかしげた。

昨日はあんなに調子がよかったのに。特に、マサヤとデートしている時は。

やばいなあ。風邪でもひいたのかな。

そう思いながらごろごろしていた直美は、ドアの開く音に頭を起こした。もう授業は始まっているから、きつと養護教諭だろう。

「先生、気分悪いんでちよつと休ませてくださーい」

てつきり養護教諭だと思っていた直美が声を投げると、仕切りの陰から顔を出したのは男子生徒だった。

「あれ？ また会ったね」

昨日喫茶店でも会った、二年の男子生徒だ。

「偶然ですね、ええと……」

「ああ、二年の西脇。　　そういえば、先生いないのかな」

「あたしも、いないんで勝手に寝ちゃってるんですけど……」

「参ったな、カッターで指切っちゃったから、絆創膏もらおうと思つただけど……　　そういえば、その棚に風邪薬あったと思うよ。飲んでおいたら？」

「棚、ですか……？」

「ああ、俺が取るよ」

西脇はそう言って、仕切りの向こうに消えた。棚を開けてごそごそやっているようだったが、ほどなくティッシュに包んだ小さな錠剤を三錠と、コップに水を入れて持って来てくれた。

「一回一錠って書いてあったけど、一錠だけじゃまた具合悪くなつた時困るだろ」

「ありがとうございます……」

早速一錠口に入れて飲み下すと、直美は残りの二錠をポケットに入れ、ベッドに横になった。西脇は絆創膏を探しているのか、またあちこち棚を覗いているようだったが、やがて保健室を出て行ったらしい。足音が遠ざかっていった。

いつしか直美は、うつらうつらとまどろみ始めていた。

保健室を出た哲治は、階段を上りながら唇を歪めた。

これで四錠。全部飲んでしまえば、もう薬を絶つことは不可能だろう。後は、直美が薬を求めて縋りついてくるのを待つのみだ。

その時、背後に足音が近付いてきた。

「ねえ」

振り返ると、ほとんど金髪に近いような髪色をした切れ長の眼の少女が、哲治を見上げていた。

「何だよ」

「あんたさ、こないだ誰かにクスリ頼んでたでしょ、電話で」
哲治は絶句した。誰だ、こいつは？

少女はその様子を見て、確信したらしい。ため息をつく。

「……別に、ばらそうってんじゃないけどさ。一つ、釘刺しと思うって」

「釘？」

「一年三組、星海那々」

紡がれた名前に、今度こそ目を見張った。

「どうして、彼女のことを……！」

「あの子には、借りがあるから。あんたがクスリをやるのが捌

こうが、あたしは別にどうでもいい。けど、星海那々とその周囲には、絶対にクスリを流すな。それがあたしの要件よ」

「……借り……？」

「そう。じゃ、確かに伝えたからね。あの子たちに手を出そうとしたら、あたしがあんたを潰すから」

「潰す、だって……？　できるもんなら」

哲治の嘲りを遮るように、彼女は一步一步、哲治に近付いてくる。階段の途中で動けずにいる哲治に、嘲り半分の笑みをひらめかせると、右手をひよいと哲治の眼前に突き出した。

哲治は目を見張った。後ずさるうとして段につまずき、尻餅をつく。彼女の右手には、いつの間にかバタフライナイフが握られている。いつ取り出したのかすら、哲治には分からない。手品のような鮮やかさだった。

「踏んだ場数が違うよ。喧嘩なんかからつきしのお坊っちゃん？」

彼女は笑いながら、バタフライナイフをポケットに収める。

「あの子たちに手を出したら、こんなもんじゃ済まさない。分かった？」

「わ、分かった……もともと、彼女に手を出すつもりなんかないんだ！　お、俺だって彼女のことか……！」

哲治は慌てて口をつぐんだ。少女は呆れたように彼を見て、肩をすくめる。

「ま、いいけど。その言葉、憶えてもらうからね」

そう言つと、彼女は哲治を追い越して階段を上がっていった。ぽかんと見送っていた哲治は、慌てて後を追いかける。

だが、彼女の姿はとうに消えていた。

学校帰り、ペニーハウスが見える辺りで立ち止まり、那々は前に行く直美の腕を引いた。

「ねえ……本気で行くの？」

「当ったり前じゃん！　那々だって気になるんでしょ、天瀬さんのこと」

「そりゃまあ……じゃなくて！」

「ああいうタイプは、意外と押しに弱いだよ。まずは告って、押しまくるべし、よ！」

何だか異様にテンションが高い。少々違和感を覚えながらも、逆らうと後が怖そうなので、那々は口をつぐむことにした。

ドアを開けると、マスターの立河が会釈した。

「いらつしやい」

「どうも……あの、天瀬さん、は……？」

「あいつなら、“本業”の方に行ってるよ。しばらくすれば、戻ってくるけど」

「本業？」

直美が首をかしげる。そういえば、彼女は齋が銃工だということを知らないのだ。事情聴取の時にもちよつとしたパニック状態で、他人の話など聞くどころではなかったから。

「じゃあ、待ってますね」

直美がさつさとテーブルに向かう。那々も気後れしながら、それを追いかけた。

「ちよつと、これって何か図々しくない？」

「何で？　何か頼めばいいじゃない。それに那々は、早いトコ誰かとくつついちゃった方がいいって」

「だから何で！」

「ストーカー対策」

脈絡のない話の飛び方に、那々は目をぱちくりさせた。

「ストーカー？」

「だからさ、那々が誰かとくつつけば、ストーカーだって諦めるんじゃないか、ってことよ。そこ行くと、天瀬さんなんか最高じゃない。あの相手じゃ、大抵の奴は霞むわよ。タメ張ろうっていうん

なら、よつぱどの自信家じゃないと」

「確かに、そうかもしれないけど……って、直美あんたまさか、天瀬さんにそれ頼もうつていうんじゃない？」

「ふんふん、那々もようやくその気になったか」

「あのねえ！　いくら何でもそれって強引すぎ」

思わず声を高めかけた那々は、はたと周囲に気づいて声を落とした。

「……大体、そんなこと頼んだりしたら、迷惑じゃん、天瀬さんにも」

「だからあ、そっから急接近しちゃえばいいんだって。ふりから、ホントに付き合っちゃえば」

「……頭痛くなってきた」

本当に頭痛がしたような気がして、那々はこめかみを押さえる。後押しにしても、限度というものがあるだろう。

「直美あんた、何かおかしくない？　最近、ちよつと強引すぎるよ」
こと斎との件に関しては、もう無理やりにもくつつけてやろうとしているようにさえ思える。那々の方は、まだ“彼”への気持ちすら整理できていないというのに。

すると、直美が那々を見つめた。

「だってそうでもないよ、あんたいつまで経っても、誰とも付き合えないよ？」

……息が、詰まった。

「五年前のお兄さんをいくら好きでも、その人はもういないんだよ？　あんただけ、取り残されちゃうんだよ。もう、いいじゃん。

他の人、見たってさ」

「そ、んなの……！」

言葉がうまく出てこない。何をどう言えば、この気持ちを説明できる？

那々にとって、あの少年の記憶が支えだった。彼の面影を抱えていたから、事件の後もそれほどショックを引きずることなく、比較

的樂に日常に戻れた。あの事件のことで心を痛めることがあるとすれば、それは彼に一言の礼も言えなかったのを思い出させる、あの夢を見ることくらい。

これからどんな人と出会おうと、変わらず心の中に在り続ける人それが、“彼”。

なのに 斎に出会ってから、それが揺らぎ始めた。

面影が、重なる。似すぎているがゆえに、斎と“彼”の面影が混同し始めていた。どちらを思い出しているのか、分からなくなる。

怖い。“彼”の記憶が薄れるのが。

そうなれば、“彼”が完全に、この世から消えてなくなるような気がした。

言葉を探していた那々に、その時落ち着いた声がかけられた。

「いらっしやい」

「あ……」

見上げると、いつもの通りウェイターのユニフォームを着込んだ斎が、トレイを片手に立っている。

「何を淹れればいいかな？ また、こないだと同じの？」

「え……と、あの」

「同じので、お願いします。いいよね、那々？」

「……うん」

こくりと肯くと、斎はにこりと微笑んだ。

「カフェオレもいいけど、冬場はカプチーノがお勧めだよ。僕も好きなんだ。美味しいよね……」って、これじゃ手前味噌か」

苦笑して、オーダーを伝えにカウンターに取って返す。その後ろ姿を見ながら、那々は奇妙に気分が落ち着くのを感じた。昂ぶった神経が、宥められた気がする。

息をついて、“彼”の顔を思い浮かべた。斎によく似た、だが幾分幼さを残した少年の顔が、脳裏に浮かぶ。ほっとして、薄く笑みを浮かべた。

大丈夫。あたしはまだ、あの人のこと忘れてない。

……しかしそのため、斎がグラスを二つ、自分たちのテーブルに持って来たのに気づくのが遅れた。そして、直美が「あの」などと声をかけながら、彼を引き止めたことにも。

気づいた時には、手遅れだった。

直美ははつきりと、言っていたのだ。

「那々のことで、ちょっとお願いがあるんですけど、いいですか？」

「もーっ！ 信じらんない！」

道端で絶叫した那々を、直美がまあまあと宥める。

「那々、あんたものすごい目立ってるよ」

「あのねえ、原因はあんたでしょうが！ よりにもよって、マジであんなこと頼まなくても……！」

「えゝ、いい手だと思っただけだなあ」

しれっとのたまう直美を、那々はぎつと睨む。

そう、直美は冗談抜きの本気で、那々とくつつくこと ぶり、でも可 齋に頼んだのだ。それだけでもとんでもないことなのに、

「それに、OKもらっただからいいじゃん」

そう、肝心要の齋も、実にあっさり承諾したのである。頼む直美も直美だが、さらりとOKを出してしまう齋も相当の変わり者だ。「だからって、いきなり『この子と付き合ってやってください』はないでしょ！」

唐突にそんなことを切り出されて、さすがの齋も目を丸くして那々たちを凝視していた。その後で事情を説明して納得してもらったからいいものの、思い出すだけで顔から火が出そうだ。

その上直美はてきぱきと、齋の携帯の番号を聞き出して那々と番号交換させた上、那々の携帯でツーショットの写真まで撮らせてしまったのだから恐れ入る。

「でもさ、あたし今すごい冴えてる気分なのよねゝ。やっぱり昨日、マサヤとデートしたからかなあ」

「はいはい、のろけはいいから……っていつか、朝から具合悪そうだったのはどこ行ったのよ」

「ああ、あれ？ 風邪薬飲んだら治っちゃったから、風邪気味だったのかもね。でもあの薬、よく効くよね。どこのメーカーなのか聞いたけばよかった」

「……そんな即効性の風邪薬なんか、あるの？」

「あるっていうか、学校の保健室に置いてあるわよ。今度先生にどこか聞いとこ」

保健室に置いてあるのなら間違いないだろうが、どうしても釈然としないものを感じて那々は首をかしげる。しかし次の瞬間、そんなことは頭から吹っ飛んだ。

「さーて、じゃあ後は明日から、那々が天瀬さんとかっついたって広めるだけね！」

「ちよつと！ あんた何とんでもないこと言ってるのよ！」

「だって、そうしないと意味ないじゃない。ストーカーに諦めさせるために、天瀬さんにまで協力してもらうんだから。内輪でカップルのふりしてたってしょうがないでしょ」

「けどさあ……そんな噂広まったら、天瀬さんにも迷惑だよ」

「うーん……じゃあしょうがない、那々に年上の彼氏ができた、ってことだけで妥協しとくか」

「……どっちにしても広めんのね」

「ストーカー対策よ、恨むならストーカーを恨むのね」

涼しい顔で言ってるける親友 悪友かもしれない を、那々は恨みがましく見やった。こうなったら、ストーカーを突き止めた暁には顔面に右ストレートでも叩き込んでやろうと心に決める。それくらいしか鬱憤の晴らしようがない。

しかしそれに追い討ちをかけるように、直美が含み笑いをしながら言ってきた。

「それにさ、これを機会に本気でモーションかけちゃうって手も……」

「あんたねえ！」

「いいじゃない、五年前のお兄さんは心の恋人、天瀬さんは現実の

恋人。贅沢よね。」

「贅沢って……大体、天瀬さんならすぐ、本命の彼女できるよ。もつと大人の、綺麗な人とかさ。あたしとじゃ、年七つも違うんだよ？」

「あら、いいんじゃない？　そもそも五年前のお兄さんだって、十六、七くらいだったんでしょ？　変わりないじゃん」

直美の言葉に、心臓が跳ねた。

そう。あまりにも似ている、二人。

年も、顔立ちも、身にまとう雰囲気も。

だからつい、思ってしまう。

“彼”が生きていれば、きっと　と。

(……忘れちゃいけない。あたしが、忘れちゃいけないのに……)

“彼”の面影、記憶を、斎のそれでかき消してはいけない。

そう。だから那々は、斎を想えない。

ペニーハウス　のある方を振り返り、那々はため息をついて、振り切るように歩き出した。

“彼”に囚われているのではなく、自分が“彼”に囚われていただけなのだと、分かつてはいたけれど。

少し離れたところから見つめる視線に、那々たちは気づかなかつた。

カップを片付けながら、斎はため息をついた。

「いや、ついにおまえにも彼女ができたか。よかったなあ、可愛い子で」

「……だから、ストーカー対策で付き合う“ふり”するだけだって、言ってたでしょ、あの子たちも」

感慨深げな立河のからかいに、いちいち反応するものだから疲れ
てしまう。かといって、黙殺すればそのまま既成事実になりかねな
い。

「まあそれにしても、奇妙な縁だな、おまえとあの子は」

からかいの口調をひそめて、声を落とした立河に、斎は苦笑して
みせた。

「うん。まさかここまで関わることになるなんて、思わなかつ
た」

もう二度と、会わないはずの少女だった。大体自分は、あの時に
死んでいるはずだったのだ。

五年前、立河に会わなければ、斎はきっとこの世にはいなかった。
だが現実には、斎は 天瀬斎 として生き延び、そして彼女
星海那々と、再び出会った。そしてなぜか、彼氏のふりをするこ
とになっている。

あの時の少女が、もうそんな年頃になったのだ。

いささか年寄りくさい感慨を抱いて、斎はふと、思い出した。

『しっかりして！ ねえ、大丈夫？』

そう言って心配そうに、自分の背中をさすってくれた彼女。小さ
な、けどあたたかい手。

もう最期だと思っていたあの瞬間に、あたたかい記憶をくれた少
女。

だから、守ってやりたいと思ったのかも知れない。

芯が強い、しっかりした子だけれど、まだ高校生の女の子だ。正
体も分からない人間から狙われて、怖くないといえば嘘だろう。

付き合うふりをするというのは、突拍子もない提案だったけれど、
彼女を守るには確かに悪くない手だと思った。どうせ、誤解されて
困る相手もない。もちろん、七歳も年下の女の子に本気で手を出
す気もないし。

カップを片付け、テーブルを拭いて椅子を整えていた斎だったが、足下にかすかに感触を感じて見下ろした。白い小さな包みが転がっている。拾い上げて開いてみると、小さな錠剤が二つ出てきた。

（薬……？）

首をかしげて、斎はテーブルを見る。ここは那々たちがいたテーブルだ。彼女たちのどちらかが、この薬を落としたのだろうか。

それにしても、ティッシュに包んだだけというのが解せずに、斎はしげしげとそれを見つめた。

「どうした？」

「うん、落とし物……みたいなんだけどさ」

テーブルに薬を置いて、斎は肩をすくめる。

「とりあえず、聞いてみたらどうだ？　せっかく携帯の番号も聞いたことだし」

にやにやしながら言うてくる立河を少し睨んで、斎は奥に引つ込むと、携帯に登録したばかりの那々の番号を呼び出した。

『……はっ、はい！　もしもし？』

慌てて出たらしい那々の様子が微笑ましい。少し和みながら、斎は本題を切り出した。

「いきなり電話してごめんね？　あのさ、さっき二人がいたテーブルの辺りで、落とし物見つけたんだ。薬みたいなんだけど、心当たり、ある？」

『薬、ですか？　あたしは知らないけど……え？』

しばし電話の向こうで話し合っているようだったが、やがて那々の声が聞こえた。

『それ、直美のです。風邪薬、落としちゃったって。念のために二錠持ってたけど、もう大体治ったからいらないです、って』

「そう、じゃあこつちで処分しとくね。帰り、気をつけて。　ホ

ントは送っていくべきかな？」

『いつ、いいですよ、そんなの！　その、おやすみなさい！』

「うん、おやすみなさい」

午後五時台で少々気の早い挨拶だが、他に適当な言葉を思いつかなかった。電話が切れると、携帯をポケットに押し込んで店に戻った。

「どうだった？」

「やっぱりあの子たちの落とし物だった。もういらないって言うだけだ」

「まあ、薬だしな。落ちてたんだし、処分した方がいいだろう」
「そうだね」

薬をゴミ箱に捨てて、斎はその薬のことはすっかり忘れてしまった。

ペニーハウス は夜七時までの営業だ。ドアにかかった営業中の札を準備中に引っくり返し、斎はゴミ箱を抱えて店を出た。ビルの脇に置いてあるゴミバケツに、その日その日のゴミを放り込むのだ。最近は分別がどうこうとうるさいが、ペニーハウス からのゴミは大抵可燃ごみなのでその点は大分楽だ。

ゴミバケツの蓋を開け、ゴミを放り込んでいると、ティッシュの包みが転がり落ちた。

「あ」

あの薬だ。拾い上げようとしたところを、寄ってきた野良猫が、オモチャにして遊び始めた。小さくてころころ転がるそれを、いたくお気に召したらしい。熱心に遊んでいる。

「あーあ」

まあ後は捨てるだけなのだから、オモチャにされようと別に構わない。遊ぶ猫の姿に何となく癒されながら、さっさと片付けようと斎はゴミ捨てを再開した。

すると、猫の爪や牙で弄ばれ続けていたティッシュは、当然ばらばらに散らばり始めた。中から錠剤が転がり出る。猫は今度は錠剤にターゲットを変え、匂いを嗅いだり前足で転がしたりし始めた。
「あ、こらー！」

気づいた斎が声をあげるより早く、猫がぺろりと錠剤を舐める。

空腹なのか、そのまま口の中に入れてしまった。斎が錠剤を取り上げようすると、パツと逃げ出し、その辺りを駆け回り始める。ゴミバケツに飛び上がり、中身を引っかけ回そうとしたから、斎も慌てて猫を捕まえに走った。だが猫は、毛を逆立てて威嚇し、またもの凄い勢いで駆け回り始めた。

妙な胸騒ぎを感じて、斎は猫から視線を外し、地面に落ちたもう一つの錠剤を探した。薄暗かったが何とか見つけて、手の中に握り込む。

駆け回る猫を見ていて、突然脳裏に甦る記憶があった。

かつて一度だけ見た、動物実験。その時の猫も、ちょうどこんな風に凄まじく興奮して、正気を失ったように駆けずり回り、やがて泡を吹いて身体を痙攣させながら死んでいったのだ……。

斎はゴミ箱を引っこ掴み、店内に取って返した。錠剤をティッシュで包み直して、三階に上がり服を着替える。店の片付けを終えて上がってきた立河と鉢合わせするが早いか声を投げた。

「叔父さん、車出して！」

「斎？」

面食らった顔の立河に、斎は階段を下りながら答えた。

「急ぐかもしれないんだ。警視庁へ、早く！」

途中で諸角に連絡を取って事情を話し、斎たちは警視庁に向かった。警視庁で合流した諸角に例の錠剤を託して、分析を頼む。

かなり強引にねじ込んだらしく、ほとんど最優先の速さで結果が出た。

「……ヴァンパイア・キス？」

斎の言葉に、諸角が苦い顔で肯く。

「最近、若い連中の中で広まって、アップ系の薬物だ。成分が酷似してて、十中八九、ヴァンパイア・キスで間違いないらしい」

アップ系というのは、人を興奮させる　いわゆる“ハイにさせる”類の薬物だ。対して、虚脱させ夢想状態に陥らせる薬物はダウン系と呼ばれる。

「ヴァンパイア・キス　ってのは、どっちかってと“初心者向け”だ。注射器を使うようなドラッグと比べると、錠剤だから飲むだけでいいし、従来のドラッグより使いやすい。ぶっちゃけた話、経験のない人間を引きずり込むのにぴったりの薬ってことだ」

例えば、あの少女たちのような。

冗談じゃないと、斎は苛立たしげに床を蹴りつけた。

「……飲んじゃった場合、どうなるんですか、これ」

「最初は、やたらとハイになって頭が冴えたような気分になるらしい。一度や二度なら、まだ何とか後戻りできるだろうが、慣れちまうと危ないな。下手すりゃ、こいつなしじゃ生活できなくなっちゃうぞ」

諸角の言葉に、ぞつとした。

「……ちよつと、すみません」

断りを入れて廊下に出ると、携帯で那々にかけた。

「あ、天瀬だけど。ごめんね、こんな時間に」

「そんなの構いませんけど……どうしたんですか？」

「あのさ、ちよつと確かめてもらいたいことがあるんだ。友達

の持ってた風邪薬、あれ、どこから手に入れたのか、分かるかな」

『学校の保健室だつて言つてましたけど……』

「保健室？」

そんなはずはない。どこの世界に、ドラッグを常備してある保健室があるというのか。

『けど、あたしもちよつと変だなつて思つて……あの、一旦切りますね』

「え？」

『直美のそこ行つて、本人に聞いた方が早いすよね。また電話入れますから』

「え、あの」

問答無用の勢いで切られて、斎はため息をついた。今から友人の家に行ったのでは、待ち時間は十分ではきくまい。

……と思ったら、ものの二、三分で携帯が鳴った。

『天瀬さん？ ごめんなさい、いきなり切っちゃって』

「いいけど……もの凄く早くない？ しばらく待つのが覚悟してたけど」

『直美ん家、あたしとおんなじマンションの七階上なんです』

納得した。確かにそれなら、自分を中継するより直接直美本人に話をさせた方が早いと、那々が考えたのも肯ける。

『天瀬さん、あたしに訊きたいことって何ですかあ？ 一応彼氏持ちですけど、天瀬さんならお付き合ひしても』

「いや、あの、そういうことじゃなくて」

電話口に出るなりモーションをかけてくる直美に苦笑した。何とか、女子高生というのは誰でもこんなにパワフルなのだろうか。「今日店に落ちてたあの風邪薬。学校の保健室でもらったっていうの、間違いない？」

『そうですよ？ 保健室の棚にあったって、言っていましたもん』

「……『言ってた』？ 自分で持ってきたわけじゃないの？」

『あたし、ちよつとだるくて寝てたんですよ。そしたら二年の先輩が、薬持ってきてくれて』

「じゃあ、自分で棚から持ってきたわけじゃなくて、その人にもらったの？」

『そうですけど。ティッシュに三錠包んで、その内の一錠その場で飲んで』

「飲んだ！？」

『え、あの薬、何かまずい薬だったんですか？』

斎の勢いにただごとではないと感じたのか、直美の声が不安げになる。真実を告げるべきか迷ったが、このままでは彼女たちがドラッグに引き込まれる危険があった。迷いを切り捨てる。

「……込み入った話になるから、電話じゃ話せないんだ。どこか、落ち着いて話できるとこないかな。僕らみんなで」

『話……ですか？　那々、どうする？』

すると、電話が直美から那々に代わった。

『あの……お店に行っちゃ、だめですか？』

「店？　ペニーハウス　に？」

『ウチも直美のともだめだから……他に思いつかなくて』

「うん、こっちは構わないけど……じゃあ、明日の夕方？」

『天瀬さん、明日土曜日ですよ？　あたしたち、学校休みです』

「あ……」

そういえば、もう週末だ。土日祝日関係ない商売をしていると、つい忘れがちになる。

「そうだっけ。じゃあ、時間いつでもいいから。朝八時半から午後七時までやってるから、その間なら」

『分かりました。じゃあ、十時頃、お店の方に行きます』

電話を切って、斎は壁に拳を叩きつけた。

「くそ！」

間に合わなかった。最悪の事態でなかったことは救いだ、それでも後手に回ってしまったのは事実だ。

部屋に戻ろうとした時、また携帯が鳴った。

「はい」

『あの……あたし、那々です。さっきの話ですけど、その……直美、何か変なことに巻き込まれてるんですか？　何か、嫌な感じがして』

直美、ホントに大丈夫かなって

「うん……気をつけた方がいいよ。あまり知らない人に、気を許さない方がいい」

勘のいい子だ。しかし、話をするまで不安な思いはさせたくない
ので、斎は言葉を濁す。せめてもの、忠告だった。
通話を終えると、急いで部屋に戻った。

「諸角さん、学校の中を捜査って、できますか？」

「よっぽど事情があればな。だが何でだ？」

「ドラッグが、校内で受け渡された可能性があります」

諸角も立河も、目を丸くした。

「生徒が、流してるってことか？」

「少なくとも、今回のケースでは、薬を落とした女の子は同じ学校の生徒から薬を渡されてます。さっき、話を聞きました。風邪薬だつて言われたそうですけど」

「それで、疑いなく受け取っちゃったのか……」

「一錠、もう飲んじゃってるそうです」

諸角がぎよつとした。

「何だと!？」

「まだ、ぱつと見で分かるような症状はないみたいです。僕もそんなにおかしな感じは受けなかったし……だけど、これ以上彼女たちが関わる前に、何とかしないと」

「そうだな。薬物対策課の方に話は通すが……」

「二年の生徒から、薬を渡されたそうです。その生徒がどこまで関わってるかは分かりませんが、調べてみる価値はあると思います」

「分かった。伝えておく」

「それと……明日、彼女たちと話をすることになりました。諸角さんも、立ち会ってもらえますか？ その方が、彼女たちも納得してくれると思います」

「ずいぶん急だな。どこへ行きゃいい」

「ペニーハウスへ。十時頃につて、あの子たちと約束してますから。あまり騒ぎを大きくはしたくないんです。できるだけ穏

便に、お願いします」

そう言い置いて、斎たちは捜査一課を後にした。

帰途に着きながら、立河は斎をちらりと見やった。厳しい表情で、フロントガラスの向こうの闇を見つめている。

「よく、分かったな」

そう言つと、斎は我に返つたように立河を見つめた。ふつと自嘲

めいた笑みを浮かべて、フロントに視線を戻す。

「……昔、教団にいた時にさ。動物実験に立ち会ったことがあるんだ。自分たちの使う薬を作るための実験だからって」

教団では、斎たちのような戦闘要員にドラッグを服用させていた。戦うことに興奮し、盲目的に臣従する兵士を作り上げるために。

「あの薬を食べた猫の様子が、その時実験に使われてた猫とよく似てたから……興奮剤に近い、ドラッグの一種じゃないかって思ったさ」

「おまえも……か？」

恐れるような立河の問いかけに、斎はかぶりを振った。

「僕は……体質的に、薬が効きにくかったらしいから。ほら、たまにいるでしょ、麻酔が効きにくい人とかさ。あんな感じ」

「じゃあ、ドラッグは使ってないんだな」

「うん。　っていうか、使っても無駄だったっていうか」

「無駄？」

「教団でよく使われてたドラッグって、興奮剤と、あとは鎮痛剤だったから。興奮剤は効きづらいし、鎮痛剤は必要ないでしょ」

自分の両手を見つめて、斎はこともなげに言う。

ペインレス・ドッグ。決して痛みを感じることはない、

忠実な教団の犬。

ずっと昔、少なくとも物心つく以前から、彼には痛覚がなかった。痛みというのがどういうものなのか、彼には分からなかった。任務のたびにドラッグを打つ仲間たちを、どこか遠い目で見ていたのだ。他の誰もが当たり前に行っているものが、自分には欠落している。教団の幹部には歓迎されても、彼自身はいつも、自分が人間ではないような気がして怖かった。

「……僕はずっと昔から、自分がどこか間違った存在なんじゃないかって思ってた」

「馬鹿言うな！」

間髪入れずに怒鳴られて、きよんとする斎に、立河は哀しくな

る。教団では、誰も手を差し伸べることがなかったのだろうか。この孤独に。

だが、斎はすぐに、綻ぶような笑みを浮かべた。

「うん。 そんなこと言うなって、前にも言われた。『痛みを感じないのは、おまえが悪いんじゃない』って」

それはきつと、斎が今なお面影を抱えている“父親”。

それでも、立河はその存在に感謝する。

斎を、人間として愛してくれたのであろう、その人物に。

「……良かったな、大事にしてくれる人がいて」

「うん。 好きだったよ、父さんのこと」

斎は窓の外へ顔を向けてしまい、直接表情を見ることはかなわなかったが。

ガラスに映った口元だけは、かろうじて読み取れた。

『……ごめん、父さん。 ごめんなさい』

治まっただけの症状が、また再発している。

直美はだるい身体を、引きずるようにして歩いていた。いつもよりペースの遅い彼女を、気がかりな那々が振り返る。

「ねえちよつと直美、あんたホントに大丈夫？ 何か、昨日より具合悪そうだよ」

「そうかも…… あゝやっぱ、あの風邪薬取っとしてもらった方がよかったかなあ」

「けど、天瀬さんの様子だとさ、あんまり使わない方がいいような薬みたいだよ？ やめときなつて」

斎は、いたずらに人を不安に陥れるような人間ではない。その彼が、わざわざ注意を促したような事態なのだ。那々はずっと、嫌な予感を感じていた。

ペニーハウスのドアを開けると、テーブルを拭いていた斎が顔を上げて出迎えた。

「いらつしゃい」

「……どうも」

斎はシンクで手を洗い、立河に声をかけた。

「叔父さんごめん、ちよつと抜ける」

「そこ使うんだろ。エプロン外しとけよ」

「うん」

斎は言われた通り黒のエプロンを外して、奥まった四人掛けの席に那々たちを案内した。なるほど、目立たない席だ。しかしそこにはすでに、先客がいた。

「あ……」

那々は思わず呟く。そこにいたのは、諸角だった。

「この間の刑事さん？」

「ああ、こいつに呼ばれてね」

諸角は苦笑しながら、モカブレンドを飲んでいる。斎は一旦カウンターに取って返すと、カップとグラスを人数分トレイに載せて持ってきた。斎が諸角の隣へ、そして向かい合う形で那々たちが座る形で落ち着いた。

「……ごめんね、わざわざ呼び出して。でも、大事な話だから」

斎はしばし言葉を探すように言いよどんだが、ほどなく口火を切った。

「昨日、あの薬を警察で分析してもらったんだ」

薬を食べた野良猫に起こった異常を話し、斎は直美を見つめた。

「君が落としたあの薬。あれは風邪薬なんかじゃない。ドラッグだ」

「え……？」

直美がぼかんとする。那々が割って入った。

「ちよつと待つてください、ドラッグって」

いくら何でも、突拍子がなさ過ぎる。だが、諸角があっさりとそ

れを肯定した。

「残念ながら、事実だ」

今まで黙っていた諸角が、小さなビニール袋をテーブルに置いた。同じ、白っぽい錠剤。

「ヴァンパイア・キス　つつてな、若い連中の間で流行ってるドラッグだ。こいつは押収品だが、似てるだろ？」

似ているところではない。そのものだ。直美が力のない声で呟いた。

「……じゃああたし、麻薬飲んじやったんですか……？」

「まあ、一回くらいなら、そう大した影響は出ない。これからこいつに手を出さなければ、そんなに時間はかからず治る。大切なのは、自分自身の意志だ」

「あの……あたし、何か犯罪に問われちゃったりするんですか？」

「まさか。君は被害者だよ。騙して飲ませた方が卑怯なんだ」

斎が吐き捨てるように言う。いつもは穏やかな双眸に、鋭い光が宿っていた。

「こんなこと言うとはだけど、自分から進んでドラッグを使うのなら、どうぞご自由について言うよ。ついてくる結果だって、本人の責任だからね。自滅したいのなら、そうすればいい。でも、それを他人に押し付けるのは許せない。卑劣もいいところだ」

「おいおい……仮にも刑事の前で、そういうことを言うなよ」

呆れたような諸角の言葉に、斎は肩をすくめた。

「偽らざる本音ですから」

「……おまえ、おとなしそうな顔して結構きついよなあ」

「そうじゃなきゃ、できない商売してますから」

自嘲するような笑みをこぼした斎は、那々たちに向き直った。

「その薬を持って来た二年生って、誰だか分かる？」

さすがにシヨックを受けていた直美だが、それでもしっかり肯いた。

「苗字だけなら。西脇って、言っていました。　ほら、こないだス

トーカー見たって言ってた、あの人だよ」

「え？ そうなの？」

後半に、那々が目を見張った。

「ストーカーって、あの手紙の？」

「あ、はい。最近は家だけじゃなくて、学校の下駄箱にも手紙が放り込まれるようになって……それで直美が、あんな変なこと頼んじゃったんですけど」

じろりと直美を睨むと、けろつと返された。

「いいじゃない。おかげで天瀬さんみたいなカッコイイ彼氏ができたんだから」

モカブレンドを飲みかけていた諸角が咳き込んだ。

「……彼氏！？」

じろりと見やつてくる眼光に、斎は心持ち身を引いた。

「おまえ、青少年保護条例違反でしょっ引くぞ。この子がいくつだと思ってるんだ」

「彼氏の“ふり”ですよ！ そうすれば、ストーカーも諦めるかもしれないって」

慌ててまくし立てる斎に、少女たちが笑った。恨みがましそうに彼女たちを見やりながら、斎が話を戻す。

「……とにかく、その西脇っていう二年生には、絶対に気を許さないで。それと、一つ訊きたいんだけど、君たちの住んでるマンション、防犯カメラってあるかな」

「は？」

戻ったと思うといきなりすっ飛んだ話に、那々たちは顔を見合わせた。

「ある、と思いますけど。エントランスとか……あ！」

那々がはっとする。

「カメラに、映ってるかも！ 郵便受けに手紙入れるストーカー！」
「だよな、やっぱり」

斎がにつこりと、諸角の肩を叩いた。

「というわけで、お願いします、諸角さん。やっぱり、警視庁が乗り出せば一発ですよな」

「おまえなあ……最近、大分いい性格になってきたんじゃないか？」

「これが地ですよ」

あっさりと言い切って、斎は立ち上がった。

「じゃあ、諸角さん、お願いします。ドラッグのことはもちろんですけど、ストーカーも思い余ると厄介ですから。早く解決しないと、両方とも」

「そうだな。何とか動いてみるさ」

二杯目のモカブレンドを飲み干して、諸角は席を立った。

「さあ、君らのマンションに行こうか。防犯カメラの記録が残ってるだろう」

「あ、はい！」

那々たちもコーヒーやカプチーノを片付けて立ち上がった。

「気をつけて。何かあったら電話してくれていいから」

那々にそう言う、斎の表情はやさしい。さっきの突き放した言葉が、嘘のようだった。

あんな鋭い表情も、できる人なのだ。

知らなかった一面に、少しぞくりとした。

発着履歴からコールバックした相手は、なかなか出なかった。コール音が十回を超え、諦めかけた時、やっと気だるそうな声が聞こえた。

『……何だよ』

「今、どこにいるんだ？」

『家で寝てんだよ。何だよ、朝っぱらから』

「薬、都合してもらえる？ いい獲物が手に入りそうなんだ」

『マジかよ？』

相手の声音が変わった。

「大体そっちの希望通りのがね。ウチの一年で、社長令嬢。顔もまあ、いい方なんじゃない？」

ひゅう、と相手が短く口笛を吹くのが聞こえた。

『上玉じゃん。おまえの女か？』

「違うよ」

『なら、俺らが頂いちまってもいいわけか？』

「別にいいよ。っていうか、どうなろうとこっちの知ったこっちゃない。で、そろそろそいつがああ薬欲しがりそうなんだけど、都合つく？」

『いつでもいいぜ。けど二、三日じゃ、ちょい短いんじゃないのか？ 一月くらい使っちゃえば、完璧中毒だけだよ』

「何なら、ちよつと強めのを打っちゃってもいいよ。それこそ、一回やっちゃえばもうやめられないようなのを」

『おつまえ、意外と怖えのな。マジ容赦ねえって』

「ああいうタイプの女、嫌いなんだ。どうせなら、とことんやってもらってもこっちは一向に構わない」

吐き捨てて、哲治は携帯を握り直す。

「で、さ。割り引いてくれるのか？」

『まだ無理だな。その女目の前に連れて来るってんなら考えてもいいけどな』

「そう」

足下を見やがって。歯噛みしたいのをこらえた。

「……連れてけば、いいんだな」

考えがまとまらない。ヴァンパイア・キスを一錠取り出し、噛み砕いた。しばらくすると、頭がクリアになってくる。いい感じだ。

今日は土曜で、学校は休み。昼間は遊びに出かけたとしても、夜にはさすがに家に戻っているだろう。

ふと、ある考えが閃いた。

「じゃあ今日の六時頃、今から言うマンションに来てくれよ」

『マンション?』

「ああ。そいつをうまくおびき出すから、後は好きにしなよ。薬を打つなり、拉致るなり」

『待てよ、誰かに見つかったりしねえだろうな?』

「安心してくれよ、絶対見咎められない方法を考えてある。最近は何かと物騒だからね。何が起こったって不思議じゃないだろ?」

『ふうん、まあいいさ。なら、その女は俺が頂きだ。せいぜい遊ばせてもらうぜ。ホントに拉致っちまってもいいんだな?』

「ああ。そっちも、薬用意しといてくれよ」

『OK、じゃあ、そのマンションの名前は?』

マンション名を伝えて通話を終わると、哲治はふっと息をついた。いいよだ。

直美と引き換えに、ヴァンパイア・キスを安く手に入れることができる。そして同時に、あの女を那々の傍から引き離すこともあの女は厄介だ。早く那々から遠ざけなければ。

いつものように、那々の後をつけていた帰り道。彼女に彼氏ができたと聞いた時、危うく取り乱すところだった。ストーカー対策のための“恋人のふり”と分かってほつとしたが、けしかけているような直美に不安が膨らむのを感じた。

那々と恋仲になる相手が自分でないと考えるだけで、腹の底から湧き上がるような怒りを抑えられない。

しかもその相手が、強盗から那々を救ったあの青年であろうことが、怒りを増幅した。

何もかも、沖田直美　あの女がそもそもの原因だ。あの女が那々を　ペニーハウス　に連れて行かなければ、那々があの男と出会うこともなかった。しかも、二人の間を取り持とうとしているのもあの女だ。

そう、あの女があんな女があんな女が！

……だから、めちゃくちゃにしてやる。薬漬けの、廃人にでもな

つてしまえばいい。

哲治はリビングに顔を出した。父は出かけ、母は家事に忙しいようだ。サイドボードに歩み寄り、通帳とカードのある引き出しを開けた。ほとんど残高のない自分のものは残して、親名義のカードを抜いた。暗証番号は確か、父の誕生日だったはずだ。

カードをポケットにねじ込み、哲治はリビングを出た。

「母さん、ちょっと出かけてくる」

「どこに行くの？」

「分からないよ。適当にぶらついてくる。夕方には帰るよ」

「息抜きもいいけど、勉強もちゃんとしなさいね。最近成績上がったみたいだから、母さんも楽しみよ」

「うん」

勉強なんて必要なものか。ヴァンパイア・キス さえあれば、そんなものどうとでもなる。

家を出て、近くのデパートのATMで、二十万ほど引き出した。そして、デパートやホームセンターを回り、必要なものを買集める。

袋を抱えて歩きながら、哲治は会心の笑みを浮かべた。

これで、何もかもうまく行くんだ。

もうすぐ。もうすぐ那々を、あの男から取り戻す。

「……そうか。じゃあ、あいつも邪魔だな……」

ふと気づいたように呟くと、哲治は何かを思案するように視線をさまよわせながら、雑踏へと消えていった。

身分証明書の威力か、住人のプライバシーは守るという約束で、防犯カメラの記録はあっさりと見せてもらえることになった。

詳しい話は後ですと少女たちを家に帰してから、諸角はカメラの映像と睨み合いを始める。ここ二週間ほどの映像を中心に調べると、ほどなく収穫があった。

郵便受けに手紙を放り込む人影。まだ若い男だ。郵便受けに向かうと、ちょうどカメラに背を向ける格好になるので顔はよく見えな。しかし、マンションを出る際には、ちょうどカメラに顔が映るはずだ。

男はカメラをまるで警戒していないように見える。手紙を届けることに夢中になるあまり、他のことを考える余裕もないのだろう。それにしても、朝の七時に郵便受けに手紙を放り込みに来る根性があるなら、もつと別の方向へ発揮すればいいものを。

男が郵便受けを離れたその瞬間、映像を静止させた。神経質そうな顔つきが、小さいながらもはっきりと映し出されていた。

諸角は手帳にその男の似顔絵を描き込んだ。映像の持ち出しを、管理人に渋られたためだ。他に、郵便受けに手紙が放り込まれた日付などを書き込み、諸角は管理人詰所を後にした。

エントランスの奥にはインターホンがあり、各部屋の住人が部屋でボタンを押すと、エントランスからエレベーターホールへ入るドアが開くようになっていた。マンションの住人に関しては、暗証番号を打ち込んで開けるシステムになっていた。諸角はインターホンで、那々と直美をエントランスへ呼ぶと、手帳の似顔絵を見せた。「こいつがどうやら、ストーカーの可能性が一番高い。見覚えがないかな？」

一目見た瞬間、那々たちは叫んだ。

「あーっ！ あの人！」

「あの西脇って二年生！」

「本当か！」

早速手帳に書き込む諸角を他所に、少女二人は大騒ぎだ。

「あゝいゝっ！ ストーカー見たつてのも、作り話だったんだ！ 本人がストーカーじゃないの！」

「ム力つく！ 許せないよね！」

「あゝ……盛り上がつてるとこ悪いんだが」

少女たちの剣幕に恐れをなしながら、諸角が口を挟んだ。

「間違いないね？」

「間違いようがないですよ！ あゝもう、こいつのせいで！」

直美が地団太を踏む。諸角は手帳をポケットにしまうと、表情を引き締めた。

「……とにかく、ここまで来れば、事情を聞くどころじゃ済みそうにないな。引つ張ることになりかねないぞ」

「逮捕、するんですか？」

「ドラッグを流してる以上、そうなるかもしれないな。君たちも、充分気をつけた方がいい。本人がドラッグをやったら、どういふ行動に出るか分からんからな」

「は、はい。分かりました」

二人はおとなしく肯いた。直美など、斎が気づかなければ危うく薬物中毒になりかねなかったのだ。さっきまでの勢いは消えて、神妙に話を聞いている。

マンションを出ると、諸角は考え込んだ。

どう攻めたものか。生徒の名簿の提出を求めようにも、令状なしでは難しい。

考えあぐねたまま、諸角はとりあえず、警視庁へ向かうことにした。

デパートのトイレで ヴアンパイア・キス をもう一錠噛み砕き、哲治は息をついた。

最近、薬を飲む間隔が短くなってきている。減りも早かったが、そんなことは気にもならなかった。 ヴアンパイア・キス を飲まなければ、考えがまとまらない。頭の中が混乱してきて、止まらなくなるのだ。

哲治はデパートの一階のコインロッカーに、今まで買い込んだ荷物を詰め込んで、デパートを出た。行き先はもう決まっている。ポケットの中の感触を確かめて、哲治は目的地に向かった。

ペニーハウス。

建物の裏手に回ると、階段の上に裏口があった。試しにノブを回すが、鍵がかかっている。舌打ちした哲治は背負ったデイパックから爆竹と発煙筒を取り出すと、ライターで爆竹に火を点け、その場に放り出して階段を駆け下りた。

パンパパンパン！

弾けるような音が、辺りに響き渡った。

「何だ？」

カウンターの中で、立河が耳を澄ました。客たちも、いぶかしげに周囲を見回している。

「裏口の方だ。ちょっと見てくる」

斎はトレイを置いて、裏口へ向かった。

裏口のドアの前に立った時、かすかに鼻腔をくすぐった臭いに、斎は眉を寄せた。

（……火薬の臭いだ）

銃声でないことは分かっているが、文字通りきな臭い。斎はそつと取って返して、掃除に使う箒を持って来た。静かに鍵を外し、ドアを開けた。

外には誰もいない。ただ爆竹の残りかすが落ちている。斎は箒を

持ったまま階段を下りていった。踊り場を通り過ぎ、駐車場へと下りる外階段。

その中ほどの踏み板の隙間から、ナイフが突き出された。そのままなら足首に刺さっていた一撃を、斎は跳び上がったかわっていた。手摺に手をかけ、飛び越える。空中で軽く身を捻って、軽やかにアスファルトに降り立った。

階段下の空間に身を潜めていた相手が、がむしゃらにナイフを突き出してくる。

斎はとつさに、箒で受け止めた。突き出された腕を蹴る。

「てえっ！」

声がして、箒からナイフが引き抜かれる。箒を放り出し、相手を引きずり出そうとした斎の顔面目がけてその時、投げつけられたものがあつた。

発煙筒。

煙が噴き出し、斎は飛びすさつた。息を止めて、煙の向こうを凝視する。眼に違和感を感じたが、痛みを感じないので開けていられないほどではない。ただ、涙が出てくるのには参った。

煙の向こうから突き出されたナイフを、斎は落ち着いてかわした。体を開いてナイフと平行にし、左手で手首を掴んで受け流しながら、右肘を相手の顔の辺りへ突き込んだ。

濁った悲鳴をあげて、相手が膝を折る。その腹に足を当て、思い切り蹴り飛ばした。

吹っ飛んで背中から倒れる相手に、斎は冷静に判断を下す。

素人だ。

発煙筒を遠くへ蹴り転がすと、相手を見下ろした。

まだ高校生くらいの少年だ。起き上がり、握り締めていたナイフで切りかかってきたのを、あっさりと拘束した。腕を捻り上げると、呆気なくナイフが落ちる。

「放せ！」

「いきなりナイフで切りかかってきたわけを、聞いてからね」

ナイフを遠くに蹴り飛ばすと、少年は諦めたように、腕の力を抜いた。

「……おまえが」

振り返ったその顔は、歪んで目が憎悪に光っていた。

「おまえなんかに、渡すもんか！」

哲治は混乱していた。ただのウェイターが、なぜここまで体術に長けているのか、分からなかった。銃の腕は知っていたが、今は素手なのだ。なのに不意打ちも、発煙筒の目眩ましも通じない。計算違いだった。ナイフで一突きして、そのまま逃げるつもりでいたのに。

だが、あれだけ ヴァンパイア・キス を飲んだのだ。無駄だったはずがない！

哲治はめちやくちやに暴れた。少しでも拘束が緩めば。

その時、

「ずいぶん遅いな。どうした？」

裏口のドアが開き、立河が顔を出したのだ。

「何やってるんだ、斎！」

「叔父さん、警察呼んで。この子、ナイフで切りかかってきた」

「何だつて？ しかし、それにしても」

階段を下りて近づいてきた立河に、哲治は足下の石を蹴りつけた。顔に当たりそうになったのを、慌てて腕で庇った。

「叔父さん！」

斎の腕が、わずかに緩んだ。哲治は渾身の力で斎を振り払うと、落ちていたナイフに飛びついた。掴み、投げる。偶然ながら、ナイフは奇跡のような正確さで、立河に向かって飛んだ。

そのままなら、確実に直撃していたナイフは、しかし斎に叩き落とされた。

哲治は後ろも見ずに、駆け出そうとした。瞬間、足を払われて前のめりに転ぶ。

わけも分らず見上げると、斎がいた。

何でだ？ 何でこいつがここにいる？ なぜこんな化物じみた反応ができる？

俺が　　ヴァンパイア・キス　をあれだけ飲んだ俺が、負けるわけないのに！

だが見上げた哲治は、斎の眼を見て硬直した。

何の感情もない、無機質な瞳だ。たとえば　人を殺す時でさえ、微塵も揺らぐ見開いているような。そのくせ、恐ろしいまでの冷たい光を放っている。

普通の人間が、持っている眼ではなかった。それが今、自分を見下ろしているのだ。本能的に恐怖を感じて、哲治は息を呑む。大人と子供などというレベルではなく、人の粹すら外れている。ただの生物として、哲治は身動きが取れなくなった。

……何てものを、敵に回したんだろう。

呆然と見上げる哲治の耳に、パトカーのサイレンが聞こえてくるまで、そう時間はかからなかった。

「……西脇哲治、十六歳、か」

財布に入った学生証を見て、五十がらみの警官がため息をつく。

哲治はじつと黙秘していたが、持ち物を調べられればひとたまりもなかった。

大体、捕まるなど予定外でもいいところだ。客や他の店員に顔を見られないよう、裏口で騒ぎを起こしたのに、これでは意味がない。

哲治は唇を噛み締めて、警官が荷物を調べるのを見つめていた。

パトカーの車内。周囲には野次馬がまばらに集まり、その視線を避けるように、哲治は顔を伏せた。両手にかけられた手錠の鎖が、じやらりと鳴った。

パトカーには、哲治と警官の二人しかいなかった。後部座席に並んで座っている。哲治がおとなしくしているので、もう一人の警官

は店員に話を聞きに、ペニーハウスに行ってしまった。現在、所轄署の方から警官が何人かこちらへ向かっているらしい。

「一体何だつて、こんなことやらかしたんだ」

息子か孫の失敗を咎めるように、警官が尋ねた。哲治はむっつりと黙り込んで、自分の爪先を見つめる。

犯罪者に、なってしまった。つい数時間前まで、思いもしなかった状況。

これから自分はどうなるのか、ぼんやりと考える。おそらくこのまま、所轄署へと送られ、留置されるのだろう。

そこまで考えて、はっとした。

そうなればもう、那々には会えない。

愕然として、哲治は自分の両手を見つめる。そうだ。このままではもう、彼女には会えなくなる。そんなことになってたまるものか！

「う……うあああああ！」

哲治は頭を抱え込んで叫んだ。いきなり叫んで背を丸めた哲治に、警官がぎよっとする。具合でも悪くなつたのかと、顔を覗き込んだ。「どうした！」

瞬間、哲治の両手にかけられた手錠が、警官の顔に叩き込まれた。「ぐっ！」

ぐぐもった声をあげ、警官が鼻を押さえて身を折った。まだヴァンパイア・キスの効力が残っていたらしい。思いがけないほどの力が出た。警官の身体をシートに押し付け、手首の手錠で顔を滅多打ちにした。

ぐったりした警官の服を探って、手錠の鍵を見つけた。繋がれたままの両手で財布と携帯、それにコインロッカーの鍵だけをかき集めて、ドアを開け外に転がり出た。

「どけよ！ おまえら！」

野次馬を突き飛ばし、哲治は走り続けた。適当な路地に飛び込み、持って来た鍵で手錠を外して捨てる。手錠で切った傷と警官の返り血で、両手は血まみれだった。近くにコンビニを見つけ、手を洗っ

てガーゼとテープ、それにリストバンドを買い、トイレで手当てを済ませた。

コンビニを出ると、前に停めてあった自転車の中で鍵がかかっていないものを選んでまたがる。全速力で漕ぎ、大通りをできるだけ避けて、コインロッカーのあるデパートへと舞い戻った。

コインロッカーから荷物を回収すると、哲治は新しく買ったデイパックに荷物を詰め込み、パーカーを買って羽織ると、盗んだ自転車に乗って次の目的地に向かった。

彼の脱走が伝わり、近隣に警官が出動したのは、その数分後のことだった。

西脇哲治脱走の知らせに、諸角は眉を寄せて唸り声をあげた。苦々しい思いと、取り逃がした悔しさが入り混じっている。殴り倒された警官は、顔面を数ヶ所骨折する重傷を負ったらしい。

諸角が ペニーハウス の事件の第一報を聞いたのは、本庁で令状を取るうとしている最中だった。泡を食って、ペニーハウスに駆けつけたのだ。結果的に、令状どころではなくなった。

「諸角さん？」

声に振り返ると、斎が立っていた。左手にはガーゼが当てられている。ナイフを叩き落とした時に切ったのだ。抜き身のナイフを素手で叩き落とせば当然だが。

「災難だったな。まあ、怪我也大したことがなくてよかった」

「しばらく水仕事できませんけどね。ところで、何で彼、僕にナイフで切りかかってきたんですか。通り魔にしちゃ、爆竹から発煙筒まで用意してえらく周到でしたけど」

「その前に、こっちも収穫があつてな。例のストーカーの面が割れた。嬢ちゃんたちに確認取ったら、はつきり証言してくれたよ。ドラッグを渡してきた西脇って生徒だってな。おまえに切りかかった、

あの坊主だ」

「そうか。それで……」

襲われた理由に納得が行って、斎は呟いた。自分が那々の“彼氏”だったからだ。彼が歪んだ顔で『渡すもんか』と言った意味が、やっと分かった。

あれは、那々のことだったのだ。

「手当てしてる時に外で騒いでたんですけど、彼、逃げたそうですね」

「ああ、警官を殴り倒して脱走した。今、所轄が必死こいて行方を追ってる。おとなしかったんで、油断したらしい」

「そうですか」

斎は目をすがめた。

「……彼女たちが、危ないかもしれません」

こんな力技を使ってまで彼が脱走した理由を、他に思いつかなかった。諸角は肯く。

「手配はした。マンションには警官をやってある。行っても入れんさ」

「僕も、気になるんでちょっと行ってみます。どうせ店も、こんな状態じゃ今日一杯は営業できないし」

真ん前にパトカーが停まり、未だに野次馬が残っている店を見て、斎はため息をついた。つい数日前にも事件があったばかりだというのに。何となく縁起がよろしくない。

斎は自宅に戻ると、服を着替えた。Ｔシャツに、ブラックジーンズ。少し考え、薄手のデニムシャツを掴むと、そのまま階段で一階へと下りた。

カウンターの下から、ヒップホルスターを取り出して腰に着ける。そして棚を開け、一丁のオートマチック銃を取り出した。

シグザウエルP226。9mmパラベラムを最大十六発装弾できるこの銃を、頑丈さと命中精度の高さの二点から、斎は気に入っていた。

マガジンを確かめ、P226をホルスターに挿し込むと、デニムシャツを羽織ってホルスターを隠す。あいにく長袖しかなかったが、薄手なので暑苦しくはなかった。ホルスターを隠せるほど長さのある服で、夏場に着てもおかしくないのはこれしかないのだから仕方ない。まさか堂々とホルスターを晒すわけにもいかないし。

準備を終えて一階に戻ると、諸角は右腰のホルスターに気づいたようだ。渋い顔になる。

「……今日は何持って行く気だ」

「P226を。頑丈ですから、少々鈍器代わりにしても大丈夫です」
「する気がおまえ……まあ、護身用ってことにしとくか」

それにしちやでかいが、とばやいて、諸角は齋を伴い覆面パトカーに乗り込んだ。

ペニーハウス から那々たちのマンションまでは、意外と近い車で十分ほどだろうか。

マンションの前には、制服の警官が二人立っていた。彼らに手を上げてみせて、諸角はマンションに入っていく。齋も会釈しながらそれに続いた。敬礼を返されてぎよっとする。もしかして私服刑事とも思われたのかもしれない。こんなラフな格好の刑事はいないと思うのだが。

那々の家は八階、直美の家は七階上の十五階。まずは、那々の家に向かうことにして、インターホンのボタンを押した。

『はい』

「ああ、諸角だ。例のストーカーのことで進展……つか動きがあった。上がったもいかな」

『あ、はい、どうぞ。今、直美もこっちにいますから』

エレベーターホールへのドアが開いた。エレベーターに乗り込み、七階に着くと、ドアのインターホンを鳴らした。

「刑事さん、ストーカーのことで何かあったって」

ドアを開けるが早いかまくし立てた那々が、齋の姿を見てぴたりと止まる。そういえば僕のことは言わなかったつけ、などと呑気な

ことを考えていたら、那々が裏返ったような声をあげた。

「ど、どうして天瀬さんが刑事さんと一緒に？」

「ああ……ちょっと、色々あってさ。とりあえず、上がらせてもらっていい？」

「あ……ごめんなさい、どうぞ！」

慌ただしくスリッパを出し、お茶でも出そうというのか台所へ消える。それを微笑ましく見守りながら、斎たちはリビングにお邪魔することになった。

「今日、家の人は？」

「あ、高校の時の友達って人と一緒に出かけてます。紅茶でいいですか？」

「ありがとう」

ソファに座ると、直美が斎の左手に目をつけた。

「その手、どうしたんですかあ？」

直美が無邪気に訊いてくる。紅茶を出しながら、那々も左手の怪我を気にしたようだった。

「ちょっとドジっちゃって。大したことないよ。それより、僕らが来るまで何か変わったことなかった？」

「別に……ないですけど。ねえ？」

直美と顔を見合わせ、肯き合う様子にほっとした。どうやら間に合ったようだ。だが、諸角はすぐに顔つきを引き締めた。

「例の、ストーカー小僧だな。ほんの少し前に、ナイフ持ってペニーハウスに乗り込んだ。もちろんすぐに取り押さえられて警察に引き渡されたんだが、そのパトカーから脱走しやがったんだ。まったく、面目ない話だよ」

「ナイフ……って、じゃあ、その手の怪我……」

はっとした那々に、軽く手を振った。

「大丈夫、ほんとに大したことないから。それより、こっちの方が心配なんだ。脱走までして来るような場所、もうここしか思いつかなくて。一応警察の人に入口ガードしてもらってるんだけど、念の

ために、って思ってた」

「ナイフは取り上げてるんだが、他に何をどれだけ持ってるか分かん。どこでも買えるしな」

少なくとも ペニーハウス に現れた時の装備が全部だとは、斎は思わなかった。自分に切りかかってきた時はともかく、ストーカー行為や直美に薬物を飲ませようとした彼の行動は、それなりに計画的だった。彼の主目的は、斎ではない。準備を整えていることは、想像ができた。

そこまで考えて、ふと思いついた。

「諸角さん、西脇哲治が脱走した時に殴られた警官の人、今話ができる状態だと思いますか？ 持ち物調べたはずですから、それにについて知りたいんですが」

「どうだかな……手錠かけた手で殴られて顔面骨折って聞いたぞ」

「じゃあ、手錠したままなんですか？」

「詳しい話は聞いてないんだ。ちよつと待て」

諸角は携帯を取り出し、どこだかへかけ始めた。しばらく話して通話を切ると、斎に向き直った。

「殴られた警官は、まだ話ができる状態じゃないらしい。それと手錠は、近くの路地に捨てられてたそうだ。鍵ごと取られたんだな。それで面白い話を聞いたんだが、すぐ近くのコンビニでガーゼとテープを買ってった高校生くらいの男がいたそうだ。両手首に怪我をしてたんだと」

「……手錠で殴ったんなら、その拍子に切ってもおかしくないですわね」

「それと直後にその店で、自転車が一台盗まれたそうだ。おそらく、逃走に使ったんだろう」

「自転車を使つたとしたら、ここまでの時間はかなり短縮できる……」

……警察がここに手配されるまでの間に、ここに来た可能性は？」

「……ないとは言えんな。だが、管理人が見逃しやしないだろう。あの管理人、置物みたいにならずと詰所に座ってるからな」

「それでも、席を外すことはありません。可能性はあるかもしれませんが。一通り、マンションの中を調べた方が良くないですか？」

「分かった、調べさせるか。俺も行くが、おまえはここにいろ」
「分かりました」

諸角が出て行くと、斎是那々の淹れてくれた紅茶をゆつくりと飲んだ。コーヒーに慣れた舌に、新鮮な味だ。

「たまには紅茶もいいね。美味しい」

呑気なことを言う斎を、那々たちが浮かない顔で見つめる。それに気づいて、微笑してみせた。

「大丈夫だよ。あくまでも念のためだし。そう長く逃げてられるもんじゃないから、彼が捕まるまでのことだ」

そう言った斎に、那々はかぶりを振った。

「そうじゃないんです。あたしのせいで、ずいぶん迷惑かけたなって」

「迷惑？」

「彼氏のふりなんか、頼んだせいで。ただ、ストーカーが諦めるまでのつもりだったのに……天瀬さんに、怪我までさせちゃうなんて」

「ごめんなさい、と呟く彼女は、ひどく頼りなげに見えた。そういうことかと、合点が行った。彼女たちに浮かない顔をさせているのは、狙われている不安ではなく、斎を巻き込んだ罪悪感。」

彼女たちが、気に病むことなどないのに。

「ほんとに、気にするようなことじゃないよ。気にするのも謝るのも、怪我させた本人の役目でしょ？ あんまり期待してないけど」

「というか、するだけ無駄だ。あの少年は完全に、自分だけにしか通用しない独りよがりの論理で動いている。」

「……嫌いなんだよ、こういう事件」

「え？」

「自分にしか通用しないような理屈を人に押し付けて、うまく行かないや全部他人とか社会とかのせいにするようなのが、一番嫌いなんだ」

五年前、ただ力を信奉する歪んだ教義の果てに、子供を誘拐しその家族を利用しようとした、青銀天聖教団。それに従っていた自分。

そして。

這い出しかけた古い記憶を、かぶりを振って打ち消した。

「だからもう、成り行きなんかじゃない。僕自身の意志で、彼を止めに来た」

分かっている。ただの好き嫌いだ。西脇哲治が、斎の嫌いな性質を多く持っているから、その思いを遂げさせる気に到底ならないだけで。那々が、五年前に関わった少女というだけで。そこには正義も、倫理観も居合わせはしない。

ただ、

(……守りたい、だけなのかもね)

あたたくくて小さな手を、思い出した。

「そう、ですか」

那々が目を伏せる。安心したのか、それとも落胆したのか判断のつかない、微妙な表情。

まあ、聖人君子なんて柄じゃないのは確かだ。斎は小さく肩をすくめて、紅茶のカップを傾けた。

どうしてこんな目に。

今日は彼、野村圭太^{のむら けいた}にとって、生涯でも五指に入る厄日のようだ。でなければこんな目になど遭うものか。

彼の状態を簡潔に説明するならば、ガムテープで手足を縛られ床に転がされている、という一文で済む。付け加えて、傍のソファにはナイフを持った神経質そうな少年が、何やらぶつぶつ言いながら腰かけていた。

(大体、あいつがあんなワガママ言い出したりしなきゃ、俺だって

こんな目に遭わずに済んだんだよ！)

八つ当たり気味に思い出す。そもそも今日のデートで、ささいなことから恋人と口喧嘩になったところから、彼の不幸は始まっていたのかもしれない。三日も前から予約していたイタリアンレストランの前まで来ておいて『フレンチがいい』はないだろうと、駐車場で大喧嘩になったのだ。

何とか食事は済ませたものの、そこからさつさと解散して(彼女はタクシーで先に帰った)、圭太は自慢のポルシェで帰宅したのだがマンション裏手の駐車場で車を降りた途端、ナイフ片手の少年に捕まってしまった。武道や護身術の心得があるわけでもない圭太は、あっさりと降参し、少年の言うまま彼を従弟と称して、マンションの中へ連れて行くハメになったのである。逃げ出そうにも、脇腹にナイフを突きつけられては実行する気にはなれない。

しかも、それでお役御免かと思いきや、部屋まで案内させられてガムテープで縛り上げられた。幸い口は塞がれてはいないが、何か喋れば口もガムテープで目張りされそうなので、恐ろしくて声すらあげられない。

部屋の主を床に転がしておいて、少年はソファに陣取り、デイパックから荷物を取り出しているようだった。

ずいぶん長いことその体勢でいた気がして、身体の節々が痛くなってきた頃、インターホンが鳴った。少年が、ぴくりと肩を跳ねさせる。

「……余計なことわめいたりするなよ。一言でも喋ったら本気で刺すぞ」

ナイフを握り締めて立ち上がった少年に、逆らえるはずもなく肯く。少年はインターホンのボタンを押した。

「……はい」

『警察の者です。少しお尋ねしたいんですが、このマンションの周辺で、不審人物なんかは見かけませんでしたか』

「いえ、特には。何かあったんですか？」

「いや、大したことじゃありませんので。最近は何かと物騒ですから、気をつけてください。それでは、失礼しました」

「どうも、ご苦勞様です」

インターホンを切って戻って来ると、少年はこらえ切れないように笑い出した。

「大したことじゃないだよ……犯人に逃げられて、今頃大騒ぎしてるんだろうに。おい、知ってるか？俺は今日、パトカーから脱走してやったんだ。警官の顔面滅多打ちにしてな。スツとしたぜ」

自慢げな少年に、顔から血の気が引くのを感じた。どうやら自分は、思った以上にヤバい相手に捕まっているらしい。言う通りにしていないと、殺されるかもしれない。

身を縮めて見上げる圭太を気にも留めずに、少年はナイフの刃をなぞりながら低く笑った。

重い空気を破って、携帯が鳴った。圭太は身じろぎしたが、鳴ったのは少年の携帯だった。少年はディスプレイを見て舌打ちする。

「うるさいな、クソババアが」

二十回近くコールして、携帯は静かになった。少年は息をつくとき度は自分からどこかへかけ始めた。

「ああ、俺だけど、今どこだ？分かった、もうすぐ着くんだな。じゃあこっちも準備しとくよ。ああ、分かってる、好きにしなよ。」

車は、マンションの裏の駐車場に停めといて。じゃあな」

携帯の電源を切ってポケットに放り込むと、少年はデイパックを背負い、短い筒のようなものを数本、そしてガムテープを掴んで立ち上がった。

「さてと。そろそろか」

呟いて、少年はにやりと唇を歪め、圭太を見下ろした。息を呑む彼をリビングに置き去りに、筒の内一本のキャップを外して、リビングに放り込む。筒から噴き出した煙に圭太が咳き込むと、少年は嘲るように言い残した。

「遠慮はいらないぜ。大声で叫べよ、助けて欲しけりやな」

玄関のドアが音をたてて閉まる。煙から逃れようと、圭太は文字通り転がるように、リビングから脱出した。

「……た、助けてくれ！ 誰か！」

彼が掠れた声で叫んだ瞬間。

火災報知機のベルが、けたたましく響き渡った。

「……火事！？」

立ち上がりかける那々を抑え、斎は立ち上がった。

「待つてて。僕が見てくる」

玄関のドアを細く開けて、廊下の様子を窺う。特に変わった様子はなかった。エレベーターの方から、諸角が走って来るのが見えた。

「諸角さん、この火事本物ですか？」

「分からね。だが、このまま部屋に閉じこもってるわけにもいカンだろう。一応避難だ」

「分かりました」

室内の少女たちに呼びかける。

「とりあえず、一旦外に避難しよう。もし本当だったらいけないから。一応、貴重品だけは持ち出してね」

「あ、はい！」

どうしたものかと顔を見合わせていた彼女たちは、指示を与えられたとたんに飛び上がるように立ち上がった。それぞれ財布だの携帯だのを掴み、廊下に出てくる。

「諸角さん、先に行ってください。僕は後ろを」

「分かった」

少女二人を挟む形で、階段を足早に下りて行った。他の住人たちは、本人たちやマンションを警護している警官が何とかしてくれる

だろう。

五階まで下りてきた時、薄く漂う煙に直美が声をあげた。

「やだ！ ホントに火事！？」

「落ち着いて。とにかく外へ」

彼女を押しやって、再び階段を下り始める。下へ行くにつれ、人の姿が多くなった。エントランスには人が溢れ、前の道には早くも野次馬が集まり始めている。警官たちが声を張り上げて、住人の誘導や野次馬の整理に当たっていた。

警官の誘導で、マンション裏手の駐車場に向かった。建物から薄く煙が立ち昇っているのを見て、住人たちがざわめいた。

「やだ、ウチの階からも煙が出てる！」

「ちよつと、ウチんとは大丈夫なの？」

鋭い声をあげる母親に、子供が不安そうにまとわりつく。斎は周囲を見回した。ここでは人が多すぎる。誰が紛れ込んでいても、少し離れてしまえば分からない。

同じことを諸角も考えたようで、少女たちを呼び寄せた。

「離れないように。どこに奴がいるか分からない」

「は、はい」

那々たちが肯いた瞬間、それは起こった。

人込みの中で突如、けたたましい破裂音と共に、爆竹が炸裂した。そして、噴き上がる煙。逃げ惑う人々に巻き込まれて、少女たちがわずかに引き離された。

「きゃあ！」

人に押されて、直美が転びかける。だが、那々が助けに入るより早く、直美は誰かにぶつかって転ぶのを免れていた。

「あ、どうも……」

見上げて、直美は凍りつく。

西脇哲治が、そこにいた。

彼はパーカーのポケットから、ナイフを握った手を引き出し、素早く直美の首筋に宛がった。

「ついて来い。声をあげるな。もちろん、君も一緒にだよ」

穏やかな声が、かえって怖かった。那々はぐくりと喉を鳴らす。彼は本気だ。少しでも逆らえば、直美を傷つける。

ぎくしゃくと歩き始めた那々を満足そうに見つめ、哲治は直美を引きずるように駐車場の出入口の方へ向かう。白の、大きなウィングをつけた車が、出入口近くに停まっているのが見えた。

「あれに乗るんだ」

哲治が直美を連れて車に向かい、那々もそれに続いた。祈るように、胸中で叫んだ。

助けて！ おねがい、！

哲治がドアに手をかける。もうだめだ！

その時、ジャカツ、と硬質な音がした。

「ストップ」

涼やかな声。呪縛が解けたように、那々は振り返った。斎が、そこに立っている。シグザウエルP226を、その手に構えて。

「気づくの遅れてごめん。さ、ナイフ捨てて、その子を離してそれ以上やると、ほんとに後戻りできなくなるよ」

後半は哲治に向けられている。今や彼の方が、呪縛にかかったように動きを止めていた。

「こっちへ。下がって」

斎が那々を呼ぶ声に、哲治は我に返ったようにわめき始めた。

「だめだ！ 彼女も一緒に来るんだ、こいつが死んでもいいのか！

？ おまえこそ、銃を捨てろよ！」

「僕が銃を捨てたって、君はその子を離す気なんかないでしょ？

それに、君がナイフを引こうとする瞬間に、僕は引鉄を引ける。ナイフより、銃弾の方が速いよ」

哲治がびくりと震えた。斎の声は冷えている。取り押さえられた時の、あの眼を思い出して、哲治は無意識に後ずさった。

その時 車のウィンドウが開いたのだ。同時に、背筋を冷たいものが走って、斎はとっさに那々に飛びつき、押し倒すように地面

に伏せた。

瞬間、車内から発砲された。弾丸は斎たちの頭上を切り裂き、遠いアスファルトにめり込む。

（トカレフ！）

斎は那々を引っ張って、手近な車の陰に転がり込んだ。弾速とちらりと見えた形からして、車内の人物が持っているのはトカレフだ。秒速500メートルの高速弾は車もあっさり撃ち抜くが、車のエンジンブロックは意外と遮蔽物として優秀なのである。

斎たちが車の陰に隠れた隙に、哲治は直美を車の後部座席に引きずり込んでいた。ドアが閉まるか閉まらないかの内に、車がタイヤを鳴かせて急発進した。

「直美！」

叫ぶ那々の隣で、斎がP226を撃った。駐車場の出入口でハンドルを切ったのに完璧に合わせて、左前輪を撃ち抜く。だが、運転手は見事に車を立て直して、街の中に消えていった。

斎はセーフティをかけて銃をしまつと、駆けつけて来た警官たちに叫んだ。

「目黒ナンバーの白のインテグラ、緊急手配お願いします！早く！」

一時間ほどすると、マンシヨンの周囲は落ち着きを取り戻した。

現在は、マンシヨンの出入口で警官が警備に当たっていた。西脇哲治が現場に舞い戻る可能性は低いが、万一を考えて警官が配置されている。

車の前輪を狙ったわずかな間に、斎は車のナンバーを頭に叩き込んでいた。それをもとに緊急手配がなされ、パトカーが駆け回っている。もちろん諸角もそれに加わっていた。自分にも責任があるからと那々は強く同行を希望し、斎もそれに同調したが、さすがに民間人を同行させるわけにはいかないと拒否された。

仕方なく、車を確保したら連絡を入れてもらうことを条件に、二人はマンシヨンに残った。

「……天瀬さん、お店、いいんですか？」

黙りこくっていた那々が、ぽつりと口を開いた。斎は微笑する。

「うん、今日は臨時休業」

「……やつぱり、事件のせいでは……？」

「そうだね。でもそれは、君のせいじゃないよ」

「けど、あんなこと頼まなきゃ」

「那々ちゃん」

柔らかい声に、顔を上げる。初めて、名前を呼ばれた。

「そんなこと言ったら、何もかも那々ちゃんのせいになる。西脇哲治が暴走したのも、直美ちゃんがさらわれたのも」

「……その、通りじゃないですか？」

「違うよ」

あっさりと言い切って、斎是那々を見つめる。那々は息を呑んだ。鋭くないのに、目をそらせない。

「彼の暴走は、彼が責任を負うべきものだ。直美ちゃんのことでは、君だって守られるべき立場だった。なのに危険な目に遭わせたんだ。むしろ、僕たちの方に責任があると思うよ」

「それは……！」

違う、と言いかけて、那々は口をつぐんだ。ついさっき、斎が彼女に言ったことと同じだ。

彼も悔いている。直美を守れなかったことを。

「でも、ここでこうして動けないでいる。情けないな」

自嘲気味に呟いて、斎は窓から外を見下ろす。辺りはすっかり夕闇に染まって、ライトのきらめく夜景に変わりつつあった。

その時、玄関のドアが開く音がした。

「那々？ いるの？ お客さん来てるみたいね」

母の由里が帰って来たのだ。玄関の見慣れない靴に眉をひそめながら入って来た彼女は、リビングの斎の姿を見て立ち止まった。

「すみません、お邪魔してます」

「どうも……」

会釈した斎に肯きを返しながら、由里は斎を見つめる。那々が慌てて間に入った。

「あ、あのね、この人天瀬さんっていつて、その、知り合いなの」

「天瀬斎です。お嬢さんがストーカーに狙われてるの、ご存知ですよ？」

「ええ……手紙がよく来て」

「その相手が、とうとう行動を起こしました。マンションで火事騒ぎを偽装して、彼女に近づこうとしたんです。その前にも喫茶店で刃物振り回してるような相手なんで、心配になって様子見に来ました」

「じゃあ、警察の方？」

「いえ、刑事じゃないんですけど。こないだ、一回お会いしましたよね？ ペニーハウスの前で起きた強盗犯の発砲事件の時に。覚えてらっしゃらないかもしれませんが」

「あら、あの時の？」

由里が目を見張る。あの時は期せずして五年前の担当刑事に会ったことが印象的で、そういえば助けに入ってくれたという相手には礼もそこそこになつてしまった。

「まあ、ごめんなさいね。あの時は動転してて」

「いえ、当たり前ですよ、あんなこと何度もあるわけじゃないし。で、あの時の刑事さん……ていうか今もう警部なんですけど、知り合いなんです、僕」

「まあそうなの。 あら、ごめんなさいね、いつまでも立ち話じや何だから、お掛けになつたら？」

「いえ、お構いなく」

そう返した時、斎の携帯が鳴った。ディスプレイを見ると、相手は諸角だ。

「ちよつと失礼します」

急いで廊下に出て、通話ボタンを押した。

「天瀬です」

『ああ、俺だ。手配車両を押さえた』

喜ばしい内容のはずだが、諸角の声には覇気がない。それで、大体の事情は察した。

「いなかっただんですか」

『車には、一人しか乗ってなかった。そいつが言うには、知り合いに頼まれて車を交換したそうだ。友人から携帯に電話があつて、車がパンクしたが、急ぐんで車をしばらく貸してくれつつつて頼まれたらしい。ちよつと近くにいたし、暇だからってんで頼みを聞いたそうだ』

「そうですか」

斎は軽く息をついた。予想していなかった結果ではない。

だがむしろ、こちらに限ってはそちらの方がまだ、動くチャンスが残されていることも確かだった。

「諸角さん、車の中に銃は？ 運転手が同一人物なら、トカレフを

持つてゐるはずですよ」

『なかった』

「なら、その車の運転手は多分無関係ですね。乗員ごと入れ替わったんだと思います」

『西脇哲治に渡した可能性は』

「ありません。少なくとも僕なら、扱いに不慣れな薬物中毒の学生に銃は渡しません」

『なるほど、確かにね』

電話の向こうで、諸角がため息をついた。

「諸角さん、もう一ついいですか。手配車両を押さえたのはどこですか？」

『代々木のタイヤショップだ。おまえが撃ち抜いた左前輪を、修理しに寄ったらしい』

「そうですね、分かりました」

少し考えて、付け加える。

「諸角さん、マンションの警備を強化してもらえよう、所轄署に頼めませんか？ 外からの侵入もですけど、内側から脱け出されることもないように」

『あのお嬢ちゃんか？』

「責任を感じて、思い詰めてます。必要だと思ったら、やりかねません」

小さい子供を庇って大男に立ち向かった、五年前のように。思い出して苦笑した。無茶なところは、変わっていないようだ。

『分かった、何とか頼めるだろう。おまえも無茶はするなよ』

「はい、ありがとうございます」

電話を切って携帯をしまうと、斎は星海家に戻った。

「少年が逃走に使った車を押さえたそうです。まだ捕まっていようですけど、遠からず捕まるでしょうし、警察の方からマンションの警備に人を増やしてくれるみたいですから。あまり長居するのもご迷惑なんで、そろそろ失礼します」

「わざわざごめんなさいね」

「いえ、それじゃ。何か進展あったら、諸角さんから連絡来ると思うから、こっちにも電話入れるね」

那々に向き直ると、気丈に肯かれた。

「……お願いします」

「じゃあ、気をつけて。おやすみなさい」

マンションを出ると、通りに出てタクシーを捕まえた。今は歩いて帰る時間も惜しい。こういう時は、交通手段を持っていないのが悔やまれた。バイクくらいは持った方がいいかもしれないと思いつつ、タクシーに乗り込んでペニーハウスの住所を告げる。

西脇哲治と直美の居場所の見当がついたような気がした。

車が見つかった代々木は渋谷区だ。だが多分、彼らは渋谷にいない。斎はそう断定した。

あの車は、衆目に晒されている。特徴を覚えられた可能性のある、目立つ車を他人に貸して、囷にしたのだ。いつ乗り換えたかは知らないが、おそらく渋谷には向かっていない。

ならどこへ行ったのかと問われれば、思いつく地名は一つしかなかった。

彼らは新宿に戻っている。

ある意味賭けだが、西脇哲治がどこから薬を手に入れていたか、考えてみた。学生の彼が、そうそう遠くまで薬のために出かけていたとは思えない。薬を流していたのは、近くにいた人物だ。だとしたら、彼らのホームグラウンドは新宿。手配の裏をかいて、戻った可能性は低くない。

もちろん、全然別の方向に行った可能性もあるが、具体的に地名が思い浮かぶのが新宿しかなかった。

探し出したい。一刻も早く。

那々が無茶なことをやらかす前に、決着をつけてしまいたかった。斎はじつと、前方の闇を見つめた。ペニーハウスまでの道が、ひどく遠く思えた。

連れて来られたのは、どこかのクラブのような店だった。

途中で車を乗り換えて新宿に逆戻りし、いわゆる歓楽街の中の小さな雑居ビルの前で、哲治たちは車を降りた。後部座席から、ぐったりした直美を抱えるように降ろす。騒がれないようにと、薬品で眠らせたのだ。

車を裏手の路地に置いて、運転していた少年が戻って来た。ベルトに挿したトカレフに向けられた、哲治の怯えるような視線に気づくと、歯を剥くようにしてにやりと笑った。

「いいだろ。意外と安いだぜ」

「で、でも、さっきは……彼女に当たったら、どうするつもりだったのさ」

「当たんなかったんだからいいだろ。それより、一緒にいた野郎、あいつ何者なんだ？ 刑事か？」

「喫茶店のウェイターだよ」

「はあ！？ 何でウェイターが拳銃持つてんだよ！？」

「そんなこと知るかよ。あいつ、普通じゃない。化物だ」

あの眼を思い出し、哲治は吐き捨てた。

「まあそんなことより、女運ぶの手伝えよ。奥に部屋があんだよ」

二人で直美を左右から支えるようにして、地下一階にある店内に連れ込んだ。けばけかしいネオンの下で、呼び込みをしていた少年下の少年が興味深そうに見上げてきた。

「何すか、その女？」

「新しいオモチャだ」

「へえ！」

少年が唇を歪める。

「新しいの入ったって言ってたっすよね。試すんすか？」

「当たり前だろ」

少年にドアを開けさせて、二人は中に入る。きらきら光るライトが、哲治の目を射た。中には何人かの少年少女がいて、耳をつんざくようなBGMをもともせずに騒いでいる。彼らの物珍しそうな視線を受けながら、二人は奥に入り、小部屋の一つに直美を運び込んだ。ソファに寝かせる。

「さて、と」

少年はサイドテーブルの引き出しから小さなボトルとケースを取り出した。ケースの中には、小さな注射器が数本セットされている。針のキャップを外し、ボトルの中の液体を注射器に吸い上げると直美の腕を掴んだ。腕の内側、血管に沿うように注射器の針を刺し、ピストンを押し込む。直美が軽く身じろぎした。

「へへ、後は起きてからのお楽しみだな」

それまで店で騒いでくる、と言い残して、少年は小部屋を出て行くこうとする。哲治は慌てて呼びとめた。

「ねえ、薬　ヴァンパイア・キス　はどうなってたんだよ？」

「あ？　あー、あれか」

少年は一旦店に消え、袋に入れた錠剤を持って来た。

「いくら持ってたんだ？」

哲治が札を渡すと、少年はにやりとして、袋の三分の一ほどを出して寄越した。

「安くなっただろ？　欲しけりやもつと強いのもあっからよ、いつでも言えよ」

「……ああ」

哲治は　ヴァンパイア・キス　をポケットに詰め込んだ。

少年が残りを持って店の方へ出て行く。残された哲治は直美を見ていたが、ふと思いついた考えに顔を綻ばせた。

この女にはまだ、使い道があるじゃないか。

哲治は直美の服を探り、彼女の携帯を取り出した。

不意に響いた着メロに、那々はびくりと身を竦ませた。

「電話？」

「メール」

急いで携帯を出し、新着のメールを開く。とたんに、目を見開いた。

【友達を無事に返して欲しければ、新宿のクラブ カトラス に来ること。もちろん一人で、誰にも秘密で。待ってるよ】

とつさに、携帯を閉じた。

「どうしたの？ 何か変なメール？」

「……ただの広告メール」

母には言えない。那々は携帯をしまい、外を見下ろした。暗くてよく見えないが、多分下には警官がいるのだろ。もちろん那々をガードしてくれているのだが、今はかえってこちらの動きを封じることになった。

那々は少し考えて、口を開いた。

「あたし、今日スパゲティ食べたい」

「ええ？ いきなり言わないでよ、もう買い物済ませちゃったわよ」

「いいじゃん、もっかい行こうよ。今日は何か色々あったしさ、気晴らししたい」

「まったくもう……大体、ストーカーがまだ逃げてるんでしょ？」

「もうすぐ捕まると思うって、天瀬さん言ってたじゃない。ねえ、行こうよ」

「しょうがないわね」

外出着のままだった由里が、ため息をついてバッグを取り上げた。支度をして家を出た時、またメールが入った。

【カトラス は新宿歌舞伎町X-X-X番地、Fビル地下一階】

歌舞伎町は、ここからそう遠くない。那々は携帯を握り締めた。

メールは直美の携帯から入っている。西脇哲治は、間違いなく直美と一緒にいるはずだ。

エントランスに下りると、警官に呼び止められた。

「お出かけですか」

「ええ、ちよつと買い物に」

「そうですか、お気をつけて」

拍子抜けするほどあっさり、通してくれた。やはり母親連れだからだろうか。おそらく、手配の車が見つかったことも聞いているのだろう。

那々たちは、近くのスーパーに向かった。

店内は、さほど混んでいない。那々はトイレに行くと行って由里と別れると、そのまま別の出入口に向かった。辺りをざっと見回して、バス停に走る。路線名を確認、とにかく歌舞伎町方面へ行くバスを探した。

やっと見つけたバスは、発車寸前だった。慌てて駆け出し、乗り込む。

バスが動き出し、スーパーが遠ざかるのを見た瞬間、かすかに足が震えた。

このまま一人で行けば、何をされるか分からない。もちろん怖かった。だが、行かなければ直美が危険に晒されるのは間違いない。これ以上、彼女に危害が加えられるのを放つてはおけなかった。

おねがいます。あたしに力を貸してください。

“彼”に、祈った。

歌舞伎町に着いたのは、七時半を回っていた。きらびやかなネオン、行き交う人々。自分がひどく浮いている気がして、那々は落ち着かなくなる。

不意に、横から声をかけられた。

「ねえ、あんた」

まさか自分が呼ばれたとは思わず、歩き出そうとしたら、肩を掴まれた。

「あんたよ、あんた」

「え？」

振り返ると、徹底的に脱色されたストレートヘアの、切れ長の目の少女が立っていた。

（……あ。こないだの……）

学校の廊下で直美とぶつかった少女だと、思い当たった。だが目の前の少女は確かに、学校よりこの雑踏の中にいる方が似合っているように思えた。冷めて大人びた雰囲気、この街に合っている。

「あんた、こんなところで何してんの」

彼女は那々を見下ろすように訊いてきた。実際、もとの身長とヒールのあるミュールのせいで、彼女は那々より十センチほど高い。何となく気圧されるように、答えた。

「……用があるから。カトラス っていうクラブに」

「カトラス？」

少女が眉をひそめた。

「あの薬物中毒御用達^{ジャンキー}つて悪名高いところ？ あんたそんなどこに何の用があんのよ？」

「そんなの、そっちに関係ないでしょ。あたし急ぐの！ 早く行かなきゃ直美が」

言いかけて、口をつぐむ。言ったら現実になりそうで、恐い。

だが、少女の表情がはつきりと変わった。

「……それ、あんたの友達よね」

「それが、何!？」

これ以上、ここで時間を取りなくなかった。しかし次の瞬間、足を止めざるを得なくなる。

「もしかして、西脇^{ニシワキ}つて二年、関わってる？」

那々は目を見張った。

「知ってるの!？」

「……やっぱりか。あの馬鹿……!」

少女は苦々しげに吐き捨てて、髪をかき上げた。息をついて、話し始めた。

「……こないだ、どっかに電話かけてんの聞いた。後で本人にカマ

かけたら、クスリやつてるって口滑らせたからさ。 ったく、あの野郎、きつちり釘刺しといたのに」

少女の目が鋭くなった。那々は息を呑む。同年代の少女で、ここまで鋭い眼をできる者を、彼女は知らなかった。

「……あんたさ、そのクラブに行く気よね」

「そうよ」

「なら、あたしも付き合おうか」

今度こそ、那々は目を見張った。

「……何で？」

いくら何でも唐突だ。だが少女は、あっさりと返した。

「あんたは知らないだろうけど、あたしはあんたに借りがあるから。いつ返せるかって、思ってた」

「借り……？」

那々はしげしげと目の前の少女を見つめたが、いくら考えても見覚えのない顔だった。少女は肩をすくめる。

「だから、あんたは知らないって。 それにあんた、何も持たずに来てるでしょ」

「何も、って……」

「こういうモンよ」

少女はポケットからひょいと、バタフライナイフを取り出して展開する。那々はぎよっとした。

「ちよっと、こんなところでそんなもの……！」

「誰も見てやしないって。 あたしいくつか持つてるけど、一つ貸そうか？」

那々は少し考え、肯いた。

「借りとく」

「いい度胸」

少女がにやりとした。

借りたナイフは、刃渡り十センチ足らずの、小さなシースナイフだった。それを目立たないように服に仕込んでもらいながら、那々

はふと尋ねた。

「そういえば、名前聞いてなかった。あたし、星海那々」

「……桜庭まひる」

そう言つて、彼女はナイフを仕込み終わると、慣れた様子でポケットからメンソールの煙草を取り出し、火を点けた。

「こつちもやってみる？」

「それはいい」

かぶりを振つて、少女と並んで歩き始める。彼女はよほどこの辺りに詳しいのだろう、足どりに迷いはなかった。ほどなく、目的のクラブ カトラス に辿り着いた。少年が、気だるそうに地下への階段のところに立っている。

「あたしは、ちよつと遅れて入つてく。その方が都合いいんでしょ？」

「うん」

歩き出しかけて、ふと思いついた。振り返る。

「……そういえば、さっき言つてた“借り”って何？ 気になるから、教えて」

まひるはちよつと笑つて、はぐらかした。

「無事に戻つて来れたらね」

「……縁起でもないこと言わないでよ」

ぼやいて、那々は階段を下りていった。いぶかしげな少年に、待ち合わせだと告げる。ドア越しにも、大音量のBGMが聞こえてきた。

那々は一つ深呼吸して、ドアを開けた。

ペニーハウス では、意外な来客が斎を待っていた。

「……一圓さん？」

「よう、おひさ」

当たり前のようにカウンターでコーヒーを飲んでいる千秋に、斎はため息をついた。今日は臨時休業、しかも今は営業時間外なのだが。

「いや、こないだからこのコーヒー飲みたくてさ。半時間前まで仕事で、やっと引けてここ来たら、臨時休業だぜ？　諦め切れなかったんで、マスターに頼んで入れてもらった」

「ウチ、七時までですよ？」

「いいだろ、固いこと言いつこなし」

いけしゃあしゃあと言い切った千秋に、諦めた。頭を切り換えて、立河に向き直る。

「叔父さん、悪いけど車出して。行きたいところあるんだ。急ぎで」「急ぎ？」

「もの凄く。もしかしたら、女の子一人の身の安全がかかってる」「何だそりゃ」

立河が目丸くした。

今までの経緯をざっと話すと、立河は難しい顔になった。

「そりゃおまえ、どうやって探す気だ。新宿っただけじゃ、探しようがないだろう」

「でも、放っておいたら事態はどんどん悪くなる。僕にも責任があるんだ、じっとしてられない」

「おい」

不意に、千秋が二人の間に割り込んだ。飲み終えたカップを立河に渡し、にやりと笑う。

「俺が付き合ってやろうか？」

「一圓さんが？」

きょとんと、斎は千秋を見つめた。

「俺、明日久々にオフなんだ。歌舞伎町にいい店あってさ、飲みに行こうと思ってたんだよな」

「……付き合えていうんじゃないですよ。一圓さんも知ってるでしょ、僕、救いようのない下戸ですよ」

「いやそこ威張られてもアレなんだが……前に聞いたことがあつてな。歌舞伎町にドラッグ撒いてるクラブがあるから、そこには行かない方がいいつてよ。話聞いてたらドラッグ絡みらしいし、可能性あんじゃねえ？」

「それ本当ですか？」

「おうよ。歌舞伎町ホステス歴二十年のママから聞いたんだから、間違いないぜ」

なぜか胸を張る千秋。斎は即決した。

「お願いします」

「よし来た」

キーホルダーを取り上げ、千秋は財布を取り出しかけた。

「マスター、いくらだっけ」

「僕が持ちます」

斎が半ば押しやるように急かした。ラッキー、と呟いて、千秋は駐車場へ向かった。

千秋の車はシルバーのフェアレディ、クーペタイプだ。乗り込もうとした斎は、助手席に鎮座しますライフルケースに気づいた。ああ、と思い出したように千秋がケースを引っ張り出してよこす。

「これは？」

「ああ、ついでに、こいつの修理、頼もうと思ってさ。だからマスターに頼んで粘ってたんだぜ。二階は持ち込み禁止だろ？ だからおまえが戻ってからと思ってたんだが」

「シグはこないだ調整したから……レミントン？」

彼の銃はすべて斎が面倒を見ている。ケースの中を覗いて呟いたが、次の瞬間薄明かりに照らし出されたレミントンM700の全貌に、悲鳴じみた声をあげた。

「何ですかこれ、何やったらこんなに見事に壊れるんですかつ！ ああもう、サプレッサーぐちゃぐちゃだし、スコープも壊れてるし！ まさかバレルまでいかれてないですよね！？」

「いやあ、ポイントで張ってたら向こうの奴に襲われてな。とっさ

にそいつで……」

「……殴ったんですね、撃つんじゃないくて」

思わず、こめかみを押さえた。レミントンは狙撃銃なのだ、繊細なのだ。動かないボルトを蹴飛ばすくらいならともかく、断じて装備品が吹っ飛ぶまで相手を叩きのめすためのものではない。自分がP226を鈍器代わりにしようとしていたのは棚上げして、斎は再びため息をついた。

「……スコープとサプレッサー交換、サイト修正、その他諸々調整つてところですね。中のメンテは？」

「してない」

「じゃあ、メンテ込みで。しばらく入院になりますよ、これ」

「おう、頼む」

けろりとした顔の千秋に、白々とした視線を向けて、ケースを閉じる。下手に落としてこれ以上壊すのは避けたい。

とにかく、緊急事態なので原則を無視し、ケースを店に放り込む。下の工房に持って行ってもらおうよう立河に頼んで、斎たちはばたばたと車に乗り込み、スタートした。千秋の運転は危なげなく、フェアレディは滑るように街を駆け抜けていく。

歌舞伎町に入った時、斎の携帯が鳴った。ディスプレイに映し出された名前は諸角だ。進展があつたのかと、電話に出た。

「はい、天瀬で」

とたんに、諸角の怒鳴り声が飛び出してきた。

『おい！ おまえ、今どこにいる！？』

「どこって」

とつさに返答できず口ごもると、電話口で諸角がまた怒鳴った。

『あの嬢ちゃんが消えたぞ！ おまえ、一緒にいたんじゃないかったのか！？』

「消えた？」

思わず携帯を握り直した。

『母親と買い物に出た時に、母親の目を盗んでどろん、だどよ。』

「おまえ、あれからどうした？」

「ペニーハウスに戻りました。気になることがあって」

「気になること？」

「面の割れてる車を囷にして、彼らがどこへ向かったかです。

「那々ちゃんが自分から姿を消したとなると、僕の追ってる線の可能性が上がりました」

「何？ おまえ、今何してる？」

「諸角の声が低くなった。怒鳴り声よりこっちの方がなぜか怖い。

「気持ち、携帯を耳から離れた。

「歌舞伎町にいます。那々ちゃんのマンションからも、そう遠くはありません。それに、西脇哲治にドラッグを流してた相手も、新宿にいるはずですから。ちょうど、ドラッグを流してるクラブの噂を聞いたんで、そこに向かっているとこです」

「待て、こら！ 無茶なことするな、ここは警察に」

「任せろって諸角さんが思ってるのと同じくらい、僕も自分で動きたいんです。僕だってあの場にいた、でもみすみす西脇哲治を逃がして、直美ちゃんをさらわれた。腹立ってるんですよ、彼にも自分にも。ここまで来て放り出せるもんじゃない。申し訳ないですけど、止められても無視します」

「電話の向こうで、諸角が息を呑んだ気配が伝わってきた。ややあつて、聞こえた声は半分諦め混じりだった。

「……馬鹿野郎。まったく、そこまで言うならもう何も言わん。だが、俺に手錠かけられるような真似はするなよ」

「分かりました」

「そんな場合ではないのに、笑いが浮かんだ。

「携帯をしまうと、千秋がもの問いたげに見やってきた。

「ずいぶん入れ込んでんな、この件に？」

「この件っていうか、あの子たちを、何とか助けたくて。大事

「ですから、十代の頃って。十代で経験したことって、下手したら一生残っちゃいますから。こんなことを、あの子たちに残したくない

んです」

自分は、もう手遅れだ。だから、せめて彼女たちだけは、
そう思っていると、頭を小突かれた。

「年寄りみてえなこと言うな。おまえだって、大差ないだろうが」

「二十歳の壁は、高いですよ」

そう言うと、千秋に笑われた。

「成人しようとして若い奴は若いし、高校生のガキでも枯れてる奴は
枯れてるんだよ。他人のために走り回れるなんざ、若いって証拠だ」
フェアレディがスピードを落とし、有料駐車場へと入っていく。
車をどうするのかと訊いたら、代行を頼むと返された。

「それで、そのクラブの名前って、分かります？」

「ああ、確か」

思い出すように視線をさまよわせ、千秋は答えた。

「カトラス だったっけな」

通された小部屋で、那々は西脇哲治と対峙していた。初めて顔を
合わせた時とは別人のような、荒んで鋭い雰囲気、わずかに息を
呑む。あるいはこれが、彼の本性だったのだろうか。

「やあ。来てくれたね」

「……直美は？」

思った以上に、固い声になった。哲治は肩をすくめて、顎をしゃ
くった。

「隣」

急いで部屋を出て、隣のドアを開けた。

ソファに身を縮めるようにして座り込んだ、細い後姿が見えた。

「直美！」

駆け寄った那々の顔が、振り向いた直美の様子に凍りついた。
目が、どこことなく虚ろだった。身体が小さく震えている。那々の

姿を認めた瞬間、縋るように抱きついてきた。

「直美……どしたの？ 寒いのか？」

「……ちが……よく、分かんない……止まらないの」

かちかちと歯を鳴らし始める。腕を回された背中に爪を立てられて、思わず声をあげた。

「ちょ、直美、痛いって……」

「あ、あたし、ねえ、どうなっちゃってるの？ ねえ、那々あ」

「直美、落ち着いて。ね、落ち着こう？」

直美の腕を引き剥がした拍子に、白い肌に浮かんだ赤い点が見えた。腕の内側、ちょうど血管の真上にぽつんと浮かんだそれ。

理解した瞬間、息が止まった。頬が熱くなる。頭に血が昇るといふのはこういうことを言うのだと、意識の片隅でぼんやりと考えた。手が自然に、腰の後ろに仕込んだシースナイフに伸びていた。ブラウスで隠していた柄を握り締め、鞘から引き抜く。綺麗に磨き上げられた刃に映る自分は、落ち着いた顔をしていた。だが中身は、煉獄のようにどろどろした怒りを抱いていた。

まひるに感謝する。ありがとう。あたしにこれを貸してくれて。

……あいつだけは。

「ひっ……！」

刃物に怯える直美に気づいて、急いで背中にして隠した。

「大丈夫。あいつ、あたしがやつつけてくるからね」

殴り飛ばすなどと、甘っちょろいことを言っていた頃が、ひどく遠く思える。あの時はまさか、事態がここまで悪化するなど思ってもいなかった。

直美をソファに座らせて、那々は部屋を出た。そして思い出す。今まで関わった人たち。“彼”。それから、

（天瀬さん）

自分のせいで、事件に巻き込んでしまった人。なのに一言も責めずに、自分を守ってくれたやさしい人。自分が姿を消したことを知れば、きつと心配するに違いない。

でも、これは那々の戦いだから。

これ以上、彼を巻き込んではいけない。

ドアの前に立って、目を閉じた。思い出す。“彼”の顔、斎の顔。彼らの強さを、少しでも分けてもらえる気がするから。

大丈夫。やれる。

目を開いて、ドアを開けた。

哲治は那々の顔を見て、にいと笑った。

「どうだった？ 友達の様子は」

「……何で、直美に薬なんか」

「仕方ないだろ？ ヴァンパイア・キスは仲間を増やさないと手に入らないんだ」

「仲間？」

「そう。吸血鬼が血を吸って同族を増やすって、聞いたことあるだろ？ あれと一緒にさ。だから ヴァンパイア・キス。うまいネーミングだろ。それでさ、俺も誰か一人、仲間に引き込まなきゃならなかったんだ。できるだけ裕福な家の、子供をね。あいつはいつも君を厄介なことに引っ張り込むから、引き込むならあいつにしようって決めてたんだ」

「何で！ 何でそうなるの！？」

「だってそうだろ！？ あいつが君をあのお店に連れてかなきゃ、強盗の巻き添えを食うことなんてなかった！ あの女があのお店と君を取り持とうとしてる！ あいつはいつだって、俺と君にマイナスなことしかしちやいないんだ！ 排除して何が悪い！？」

叫びに、息を呑んだ。目が眩む。ああそうか、こいつの世界には、もう彼自身と那々の、二人しか必要ないのだ。

「……天瀬さんの、言ったとおり」

『自分にしか通用しないような理屈を人に押し付けて、うまく行かなきゃ全部他人とか社会とかのせいにするようなのが、一番嫌いなんだ』

斎の言葉は、正しかった。

「そ、そいつが何だってんだ！」

「あんたの理屈は、あんたにしか通用しない。あたしは、あんたの理屈には従わない」

背中に回していた右手を前に出す。ナイフの刃が、室内の照明にきらめいた。哲治が、信じられないように目を見開いた。

「な……何で？ 何で俺を？」

「あんたが、あたしの周りの人を傷つけたから！ 直美も、天瀬さんも！ けどあたしのせいでもある、だから、あたしが決着つけるの！」

握ったナイフは震えなかった。頭が、ひどくクリアになる。自分のすべきこと。それは、目の前のこいつにこのナイフを突き立てること。

傷つく痛みを、教えてやる。

哲治が後ずさって逃げようとした。だが狭い部屋の中だ、すぐに逃げ場を失って立ち尽くした。

「お、俺は……俺は君のことを、ずっと」

「あんたなんかっ！」

那々がナイフを振り上げた。哲治が頭を抱えてうずくまる。

その時 銃声が轟いた。

カトラス へ続く階段の降り口で、斎は足を止めた。

どう上に見積もっても十四、五歳の少年が、斎の行く手を遮る形で立っていたのだ。上目遣いが癖になっているのか、三白眼気味の目で斎を見上げる。

「オニーサン、何すか？」

「噂、聞いてきたんだ。ここに来れば、薬、手に入るって。知

り合いも、来てるはずなんだけど。女の子」

「知らないっすねえ」

にやにや笑いながら、少年はどく気配がない。どうやら通す気はなさそうだと、内心でため息をつき、さっさと実力行使に切り替えた。

「ちょっと、中見せてね」

「おい、何勝手に」

脇をすり抜けようとした斎の腕を、少年が掴みかける。瞬間、その手を絡め取るように掴み返し、流れるような動きで少年の肘の関節を逆に極めた。

「え」

「動かないで。逆関節極めてるから、ちょっとした力で腕折れるよ。

ここ通るけど、いいよね？」

口調と表情は穏やかだが、行動は思い切り物騒だ。少年は抗いようもなく、こくこくと肯いた。

「ありがと」

少年を解放してドアを開けると、とたんに音と光の洪水が斎を襲った。うるさいというのを通り越してほとんど凶器のレベルのBGMががなり立て、ミラーボールのきらめきが目を射る。斎はざっと

店の中を見回したが、那々らしき姿は見つからなかった。外れか。

だが、店の奥の方に、ドアがあるのを見つけた。地下に裏口でもないだろうから、その奥にまだ部屋があるのだろう。

そのドアの方へ歩き出した時、何かが斎の左腕に絡みついた。見下ろすと、髪を染め、派手な化粧をした少女が、左腕に抱きつくようにしがみついている。

「お兄さあん、新顔の人？」

そう言っただけを見上げた彼女は、ライトに照らし出されたその容貌に一瞬目を見張り、次いで歓声をあげた。

「やだあ、すごいカッコいいじゃん！ お兄さんも薬やってるの？ あたし、いいの持ってるけど、やってみない？」

彼女はポケットから、粉末の入った小さな袋を取り出した。

「ヴァンパイア・キス って、今流行ってるでしょ？ これ、その強いやつ。すごい効くんだよ。身体がすごい軽くなって、頭も冴えて」

そう言っただけ、少女は含み笑いをした。顔を近づけて、甘い声を出す。

「……エッチの時に、使えるんだってさ？」

そういうことか。斎はため息をついた。

「悪いけど、今人捜してるんだ。高校生くらいの女の子と、神経質そうな顔の男の子。君、見てない？」

「いいじゃん、そんなの。それよかさ、もっと楽しいことしょ？」

みんなあたしのこと、イイって言っただけ？ お兄さんみたいな美形なら、あたし大サービスしちゃう」

すり寄ってくる少女を、やんわりと押しのけた。

「ごめん、今ほんと急いで。それに、大事なことなんだ。見てたら、教えてくれないかな」

「……男の方は知らないけど、見たことない女の子なら二人来たわよ。髪これくらい短い女の子と、あそこにいる金髪の子」

少女の指差す先には、確かにほとんど金髪の長い髪の少女が、テ

ーブルについて煙草をふかしているところだった。隣には同年代ほどの少年が座り、しきりに彼女を口説いているようだ。しかし斎は彼女よりも、短い髪の女の子というのが引っかけた。那々はショートボブだ。

「その、髪の短い方の女の子って、どこ行ったか分かる？」

「あそこ。奥に部屋があんの。あたしも、入ったことはないんだけど」

少女は、奥のドアを指差す。そして、斎を見上げて口を尖らせた。

「あんな野暮ったい子より、あたしの方がいいと思うけどお」

「だから」

その時、テーブルの方でざわめきが起こった。

「てめえこの女、何しやがる！」

見ると、あの金髪の少女がグラスを片手に立ち上がった。隣の少年が頭からずぶ濡れになっているところを見ると、グラスの飲み物をぶちまけられたらしい。

「何って、あんたが入れたもん返しただけよ」

少女はグラスを置いて、煙を吐き出した。

「悪いけど、あたし薬入りのソルティードッグなんて飲む気ないから。薬混ぜんなら、もっと溶けやすいもんに混ぜたら？　一発でバレたっての」

「てめ、この　　！」

椅子を蹴って殴りかかろうとした少年を、しかし少女は軽くないなした。

「……踏んだ場数が違ってたのよ、チンピラ崩れが」

空振りした拳の内側にすりりと入り込み、少年の股間を蹴り上げたのだ。遠慮も躊躇も一切ない、会心の一撃だった。

周囲のざわめきが、剣呑な空気を孕み始める。割って入るかどうか斎が一瞬迷った時、BGMすら圧して、一発の銃声が轟いた。

「……おまえら、うつぜーよ。せっかくのお楽しみの時間なんだぜ？　もっとクールに行こうぜ、クールによ」

一人の少年が、天井に向けて一発ぶっ放したのだ。彼は注目を集めて満足したように銃を下ろした。その銃を見て、斎は目を細める。トカレフ。

「あんたさあ、新顔だからこの店のルール知らねえみてーだけど。この店は、新入りがでかい顔できるとこじゃねーんだよ。新顔はおとなしく常連の言うこと聞くんだよ、OK？」

少年が銃口で、少女の胸をつついた。すると少女は、それを押しのけて吐き捨てたのだ。

「そっちこそ、マナーくらいわきまえな。このセクハラ男」

……少年の顔が引きつった。

「てめ……」

少年が銃を構えた。少女も素早くバタフライナイフを展開、少年に突きつける。一触即発の空気。

「はい、そこまで」

不意にそこに、穏やかな声が割って入った。斎は銃とナイフをそれぞれ片手で掴み、相手からそらす。

「そんな危ないもの、室内で振り回すもんじゃないよ。怪我人が出たらどうするの」

「てめえ、あん時の……！」

少年は斎の顔を見て呻いた。愛車のインテグラの左前輪を潰した奴だ。

「やっぱり、君が運転手か。車を乗り換えて、新宿に戻ってたんだね」

「くそ、こいつ……！」

少年は引鉄を引こうとして焦った。いつの間にか、撃鉄と銃の隙間に斎が指を突っ込んでいたのだ。撃鉄からの衝撃が伝わらなければ、弾も発射されない。

その隙に、斎の足が少年の腹を打っていた。

「ぐっ……！」

吹っ飛ぶ少年から銃をもぎ取って弾を抜くと、斎はトカレフを手

早く分解した。専用工具を使わず分解できるフィールドストリッピング。そこそこに分解すると、組み立て直して撃てないように、スプリングとハンマー部を没収しておく。あつという間に銃を解体してしまった斎を、少女が興味深そうに見やった。

「あんた、一体何者？」

「喫茶店のウェイター兼業の銃工」
ガンスミス

「ふうん」

あまり真つ当とはいえない職業紹介を、少女はあっさり受け流した。

「じゃ、僕まだ用があるから」

奥のドアへ向かう斎に、少年少女たちは怯えたように道を開ける。ドアを開けようとした時、少女が追いついてきた。

「あたしも行く。この先に用があるから」

「じゃあ、一緒に行こうか」

微笑して、ドアを開けた。

銃声に気を取られて、狙いがそれた。振り下ろした切っ先は哲治の髪を何本か宙に舞わせただけで、本人は転がるように刃の軌道から逃れていた。

哲治はよろけながら立ち上がって、ドアへと向かおうとする。那々はそれを追った。

（ 逃がさない ）

振り回した刃が、哲治の服の裾に引っかかり、そのままスパッと切り裂いた。哲治が青ざめるが、那々も目を見張る。大した切れ味だ。

那々はナイフを握り直し、哲治に追いすがった。

「あんたは あんただけは、絶対！」

「ひいつ……！」

もつれる足で、哲治は何とかドアに辿り着いた。ほとんどこじ開けるようにしてドアを開け、廊下に駆け出す。

まずい！

那々は慌てて後を追った。隣の部屋には、直美がいる！

だが、一步遅かった。哲治はソファに座っていた直美を立たせると、引きずるようにサイドテーブルのところに連れて行つた。手探りで引き出しの中をかき回し、注射器を取り出して針の先を直美の喉に突きつける。

「……さあ、ナイフを捨てるんだ。でなきゃこいつ刺すぞ！」

ぎらぎらと、常軌を逸した目つきでわめく。那々は本気で刺したくなつたが、直美を傷つけるわけにはいかない。睨みつけながら、ナイフを目の前の床に投げ出した。

「こつちへよこせ」

指示に従い、ナイフを蹴って哲治の方へ滑らせた。

それを満足げに見て、哲治はねっとりした視線で那々を見つめる。「じゃあ次は、こつちに来るんだ。そう、おとなしく。友達が怪我するのは嫌だろ？」

「……ホント、最っ低、あんたつて！」

毒づいて、那々はゆっくりと足を進める。ナイフの横を通り過ぎ、哲治の眼前まで。にやにやしていた哲治は、不意に注射器と直美を突き放すと、那々に掴みかかってきた。

「やだ！ 放してよ！」

伸ばされた腕に、那々は爪を立てる。もみ合いになつたが、やはり腕力では男の哲治の方が勝った。押されてバランスを崩し、那々が尻餅をついたところへそのままのしかかってきた。

「これで やつと、君は俺のところに……！」

「冗談じゃないわよ！」

暴れたが、上にのしかかれた体勢では不利だ。押さえつけられた。

これまでか、そう思った時、ドアの方から銃声が響いた。

（……え？）

哲治の動きがぴたりと止まる。次の瞬間、その重みが那々の上から消えた。引き剥がされて、殴り飛ばされた哲治は、吹っ飛んでサイドテーブルを巻き込んで倒れる。それを呆然と見ながら、身体を起こしかけた那々に、手が差し出された。

「立てる？」

やさしい声。恐る恐る顔を上げた。

「……天瀬、さん」

「大丈夫？ 怪れない？」

「はい、あの……」

立ち上がりかけて、よろけた。だがすかさず、肩に手を回されて支えられる。

「迎えに来たよ。 頑張ったね」

穏やかな微笑と言葉に、張り詰めていたものがぷつんと切れた。熱いものがこみ上げてきて、ぼろぼろと涙がこぼれ出す。

「直美が……薬、打たれて……！」

「……そう」

一瞬厳しい顔になった斎は、だがすぐに安心させるような微笑を浮かべて、肩に回した腕に力をこめた。

「大丈夫。諸角さんにも僕が歌舞伎町にいることは伝えてあるから。もうじき来てくれる。そしたら、すぐ病院に連れてってもらおう」

「……はい」

肯いて、涙を拭く。斎は那々から離れると、哲治の方を見やった。すぐ近くの床の上には注射器が粉々になっている。威嚇のつもりだったが、床に転がる注射器を見て、つい撃ってしまった。許せなかったのだ。こんなもので、人を操ろうとしたことが。

そんなことをしても、人の心など手に入りはしないのに。

「……とにかく、外に出よう」

那々を促して、斎はドアの方に向き直った。

斎と共に部屋に飛び込んだまひるが、直美を抱えるようにして連

れてきた。

「桜庭さんも、ありがと」

「まひるでいい。それよか、あたしが貸したナイフは？」

「あ、そこに」

振り返った那々は息を呑んだ。同時に、斎の胸を、冷たいものが撫でていく感覚が走る。ペインレス・ドッグ だった頃の名残。とつさに那々を庇うように腕を回し、左手を伸ばす。

起き上がった哲治が、ナイフに飛びついて拾い上げていた。がたがたと震えながら、斎たちに向かってくる。斎の伸ばした左手が、間一髪哲治の手首を掴んでナイフを止めた。

「……これ以上、何をするつもり？」

冷えた声に、哲治のみならず那々すらびくりと身をすくめた。ざり、と音すら聞こえそうなほど強く戒められた手首に、哲治が呻いてナイフを取り落とす。那々ははつとして、それを拾った。

「これ以上人を傷つけて、何が手に入ると思ってる！？」

それはかつて、斎自身もぶつかった命題。教団に牙を剥く相手をすべて倒すことで、養父の傍という安らぎが手に入ると思い込んでいた。そうやって戦う自分自身に、養父が心を痛めていたとも知らずに。

数え切れない人間を傷つけて得たと思ったものは、あの瞬間に儚く消えた。ただの幻。いつかは自分に返ってくる、たくさんの傷。

それを知ったから、斎は今、こうしてここにいる。

斎の一喝に、動きを止めた哲治を突き放した。よろけて後ずさる彼を一瞥して、重い息をつく。彼がこれからどうなるのか、斎には分からない。だが、人を傷つけ、薬に溺れたつけを払うことになるのは確かだった。

その時、ドアの方から押し殺した足音が聞こえた。そして、かすかに金属の触れ合う音。斎が何よりも聞き慣れた 銃のスライドを引く音。

「伏せろ！」

叫んで、手近な那々の身体を抱き込み、床にダイブした。次の瞬間、トカレフ弾が斎の左上腕部を挟るように掠めていき、立ち尽くしていた哲治の右脇腹をも傷つけた。

「天瀬さん！」

「大丈夫、掠っただけ」

トカレフ弾ほどの高速弾になると、掠っただけでもきついけど、それでも直撃を免れただけマシだ。秒速五百メートルの弾に直撃されれば、間違いなくただでは済まない。

大きな血管が傷ついたのか、出血はあるが、例によって痛みはない。こういう時は、痛みを感じない体質に感謝する。

室内に、銃を持った少年たちがなだれ込んでくる。手に手に持ったトカレフに、斎がため息をついて天井を仰いだ。

「……失敗したな」

彼らに流れていた銃は、一丁だけではなかったのだ。それを確認しなかったのは痛恨のミスだった。

リーダー格らしいあの少年が、トカレフを構えて唇を歪めた。

「ずいぶん好き勝手してくれたじゃねえか。立てよ」

合計六つの銃口が、こちらに狙いを定めている。斎はゆっくりと立ち上がった。

四人は、部屋の中に一列に並ばされた。一人で立っていられず、まひるに支えられるように立つ直美を見て、少年は何かを思いついたようににやりと笑った。斎に銃口を向ける。

「そっぴゃおまえ、俺の銃をお釈迦にしてくれたよなあ。礼をさせてもらうか」

彼は倒れて呻いている哲治を跨ぎ越して、サイドテーブルに近付いた。引き出しから注射器とボトルを取り出し、中の液体を注射器に吸い上げると、こぼれないようにキャップをして斎に投げてよこ

した。

「……これは？」

「デッドライン。ヴァンパイア・キス　なんか目じゃねえくらい強力なやつだ。それを、自分に打て」

「そんなの……！」

反発しかけた那々に、銃口が向けられる。

「ただ撃つだけじゃ、面白くねえからなあ。とことんまでぶっ壊れてもらうぜ、俺の銃みてえによぉ！」

少年は哄笑した。ぎらぎらした目の輝きは、完全に常軌を逸している。逆らえば、彼はためらいなく撃つだろう。おそらく、少女たちの誰かを。

これ以上、彼女たちを傷つけるわけにはいかない。

「……分かった」

「天瀬さん！」

那々が何度もかぶりを振る。その彼女を、宥めるように微笑んだ。

「大丈夫、だよ」

ゆっくりとキャップを外し、袖を捲り上げて針の先を肌に押し当てる。傷からはまだ血が流れて、腕に筋を描いていた。それを避け、肘の内側辺りに浮き出して見える静脈に合わせて針を刺し、注射器を寝かせるようにして差し込む。少年たちに見えるよう、腕を少し下げた。

「……彼を、放っておく気なの？」

言われて、少年は一瞬誰のことか分からなかったようだったが、哲治を一瞥して鼻を鳴らした。

「ふん、あんな使えねえ奴、どうでもいい」

「……そう」

呟きに、那々は斎を振り仰ぐ。感情を削ぎ落としたような無表情。低い声に、ぞつとした。自分に向けられたものではないと、分かっているのだが、それでも身がすくんだ。

それは、普段は優しく穏やかな彼が間違いなく持っている、刃の

ような冷徹な一面。

斎はピストンを押し込み、注射器を引き抜くと足下に叩きつけて踏みにじった。

「……これで満足？」

「ははっ、こいつ、マジで打ちやがったぜ！　おい、押さえとけ」

少年たちの内二人が、銃をベルトに挿し込み、斎の腕を背中からねじ上げる形で押さえ込んだ。

「二、三分くらいで効いてくるぜ。安心しな、打ってからしばらくは天国だぜ、後は地獄だけどなあ！」

那々は少年を睨みつけた。何もできないことが、この上なく悔しかった。

その時、斎が呟いた。

「地獄、か」

「あ？」

「そんなもの、もう見飽きた」

瞬間、斎の右腕を押さえていた少年が悲鳴をあげた。斎の踵が、少年の脛に叩き込まれていた。拘束が緩んだところで腕を振り払い、わずかに身を沈めて反動をつけた後鳩尾に肘を打ち込む。突くというより挟り込むといった方が正しいような強烈な一撃に、少年は声をあげるより早く意識を飛ばして吹っ飛んだ。

啞然としてそれを見ていた左側の少年に、右腰から抜き放ったP226の一撃を見舞う。グリップで額を殴られて、少年はよろけた。すかさず足払いをかけ、バランスを崩して倒れかける少年の腰から、トカレフを引き抜いた。元々安全装置は考えていない銃だ。装弾を瞬時に確かめ、左手に構える。右手には愛用のP226の二丁拳銃。右と左、9ミリと7.62ミリの牙が、同時に撃ち出された。

横飛びに床にダイブしながらの、しかも片手ホールドとは思えないような正確な射撃だった。加えて、見惚れるような早撃ち。^{ファストドロウ}ほんの数秒で四丁の銃が弾き飛ばされ宙に舞う。斎の方には、少年たちに必要以上の怪我を負わせないよう、射線をずらす余裕さえあった。

その様子を、那々は呆然と見つめる。強い、なんてものじゃない。完全に格が違う。当然のようにそれをやってのける齋に、背筋がぞくりとした。

思い出す。やはり恐ろしいほどの銃の腕を持つ“彼”。そして、似すぎているその面影。

彼は、まさか。

視線の先で、立ち上がった齋は呑気に首をかしげる。

「ん……トカレフ右手にした方がよかったかな」

口径はP226の方が大きいけど、トカレフの方が弾の火薬が多く、反動も強いのだ。右利きの齋にしてみれば、逆の方が確かに扱いやすかったかもしれない。まあ撃った後で言っても仕方がないが。

常人離れ　どころかもはや人間離れたといってもいい腕前を見せつけられて、少年たちは一気に腰が引けたようだった。

「動かないで。弾はまだ充分残ってる」

うつすらと笑みすら浮かべて言われた言葉に、少年たちは息を呑む。穏やかな笑みに見えるのに、斬りつけられるような鋭さを感じた。

ふと少年は、思い出した。西脇哲治がこの男のことを化物だと吐き捨てたことを。

確かにその通りだ。腕に加えて、デッドラインを打つても平然としている。何よりその身にまとう空気が違う。こんな意識を向けられるだけで身がすくむような鋭さを放つ人間を、少年は知らない。

「……化物……！」

掠れた声で放たれた言葉に、しかし齋は、あっさりと肯いたのだ。「うん。そうだね」

どこか、諦めたような声音だった。

店の方から、ざわめきが伝わってきた。

「警察だ！」

その声を耳にして、齋はほっとしたように銃を下ろした。P22

6をホルスターにしまい、トカレフも弾を抜く。

部屋になだれ込んできた刑事たちの中に、諸角の姿を見つけて声をかけた。

「早かったですね」

「俺が教えたからな」

諸角の後ろからひよいと顔を出した千秋に、斎は目を丸くした。

「一圓さん？ 何でここに」

「いやな、馴染みの子が今日出勤かどうか訊こうと思って携帯にかけたら、同伴頼まれちゃったんだな、これが。で、待ち合わせ場所に着いたらこの警部サンが血相変えて駆けずり回ってんのに出くわしたからさ。近くだったし、こうしてご案内したワケよ。　しかしおまえ、その分じゃ、俺のレミントンよか先におまえが入院した方がいいんじゃない？」

血塗れの斎の左腕に、千秋は眉をひそめた。

「掠り傷です」

「いや、その割にや左腕凄えことになってる気がすんだけど……」

「それより諸角さん、救急車の手配お願いします。直美ちゃんは薬打たれてるし、西脇哲治は脇腹撃たれてます。掠っただけみたいですが、ちゃんと病院連れてかないと」

「分かった。　おい、救急車だ！」

諸角が声を張り上げる。はっとして、那々が斎の腕を掴んだ。

「あの、天瀬さんも　」

「大丈夫だよ」

「でも！」

「だって僕、薬なんて打ってないし」

「……え？」

ぽかんとする那々に、斎は袖をまくってみせた。針を刺した痕がぽつんと一つ、それから少し肘寄りにもう一つ。

「キャップ外す時針曲げて、そのまま刺したんだ。注射器を寝かせて刺したら、針の先が皮膚の外に出るでしょ？　そのまま薬は全部

服に吸わせて、後は針を抜くだけ。袖の長い服着てて正解だったよ、針の先袖に隠れて見えなかったし。向こうみんな信じ込んで油断してた」

「……じゃあ、注射器壊したのは、針曲がってたのごまかすため？」
「そう」

ちよつとしたトリックだよ、と笑って、斎は那々を促して歩き出そうとした。

……とたん、視界が回った。

「……あれ？」

よろけた斎を、那々が慌てて支える。そして悲鳴じみた声をあげた。

「何これ、全然血が止まってないじゃないですか！」

「あ……銃撃つたしね。反動で傷開いたかな……」

「この馬鹿、何が掠り傷だ、せめて止血くらいしとけ！　おい、救急車もう一台！」

諸角の怒鳴り声を最後に、斎の意識はぶつりと切れた。

ぼんやりと開きかけた目に、飛び込んできたのは白い天井だった。嗅ぎ慣れた、消毒薬の臭い。まだ朦朧とした意識で、ある存在を捜した。自分がこうして怪我をして帰ってきた時、いつも心配そうに覗き込み、たまに無茶をするなど叱りつけたあの人。

「……父、さん……」

だが、ほとんど吐息のような斎の声に応えたのは、養父ではなかった。

「あ、気がつきました？」

「……那々ちゃん？」

「天瀬さんあの後、いきなり倒れちゃって。貧血みたいですよ」

「ああ……止血し忘れてたもんね」

痛みを感じないせいで、たまに怪我をしていること自体を忘れてしまうことがある。だんだんと意識がはつきりしてきて、ベッドの上に起き上がった。

「ここ、病院？」

「はい。傷、何針も縫ったって聞きました。痛く、ないですか？」

「それは大丈夫。僕、麻酔要らずの特異体質だから。それより、那々ちゃんの方が大丈夫？ 何か、暗い顔してる」

そう言われて、那々が俯いた。余計なことを言ったかと内心焦った時、ぽつりと言う。

「……ごめんなさい」

「……那々ちゃん？」

「あたしのせいで、天瀬さんひどい怪我して。それに直美も、まひるも、あたしの巻き添え食って危ない目に遭ったんだって、そう思ったら」

あ、泣きそう。

そう思ったが、どうするべきかが分からない。泣きそうな女の子を慰めた経験なんてないのだ。だから、自分がしてもらって一番安心した方法を取ることにした。

ふわり、と頭に手が置かれて、那々はきょとんと顔を上げた。猫でも撫でるような優しい手つきで、頭を撫でられる。

「あ、あの、天瀬さん？」

「……僕って、あんまり家族に縁がなくてさ。慰めたり慰められたりっていうのも、あんまりないんだけど。こうしてもらって、何か落ち着いて。子供扱いすぎるかな？」

ふるふると、かぶりを振る。確かに、落ち着いた。

「それに、一つ言わせてもらって、今回のことが那々ちゃんのせいだなんて、誰も思わないよ。僕の腕だって、撃ったの那々ちゃんじゃないでしょ？ 直美ちゃんたちのことだってそうだよ。那々ちゃん、何でもかんでも自分のせいにしすぎ」

「でも、彼氏のふりなんて頼まなきゃ、天瀬さんは」

「それこそ、見当違い」

ぽん、と軽く頭を叩いて、斎は那々から手を離す。

「僕だって、これがベストの方法だと思ってOKしたんだ。結果を、
那々ちゃんに押しつけるつもりなんてない。僕は今まで、色々
選び間違ってきたけど、今回だけは良かったと思う。間違っただ
て思わない」

教団時代、間違った道を選び続けてきた中で、彼女を助けたこと
だけは、唯一誇れる選択だった。

だから、守りたかった。

「……僕は、君を守れたかな」

「はい」

「良かった」

しっかりと肯かれ、微笑む。そして、那々の額を軽く小突いた。

「けど、一人であのクラブに乗り込んだのは行き過ぎ。せめて、連
絡は欲しかったかな」

「ごめんなさい……けど、誰にも言うなって指示されてたから」

「間に合ったから、良かったけど」

気が、緩んだのかもしれない。

「あの時から、変わってない。相変わらずだ」

「……え？」

目を見開く那々に、斎ははっとした。視線をそらす。

安堵に、つい口が滑ってしまった。自分を呪いたい気分になる。

その一言だけは、口にはいけなかったのに。

だが、那々の反応は予想外のものだった。彼女は一瞬眼を見開い
たものの、すぐに微笑して、提案したのだ。

「天瀬さん。屋上、行きませんか？」

屋上には、誰もいなかった。物干し竿が何かのオブジェのように立ち並び、眼下には窓から漏れる明かり。

並んでフェンスに寄りかかり、夜景を見ていたが、唐突に那々が口を開いた。

「……あたし、好きな人がいます」

彼女の真意が分からず、その横顔を見やる。彼女は続けた。

「その人は、五年前に一回会っただけの人で……その後すぐ、いなくなっちゃった人で。名前も何も知らない人。でもあたし、その人のこと好きです。もう一度、会いたい」

「……那々ちゃん」

「その人が教団で裏の仕事してた人だって、後で知りました。だから、何か犯罪に関わってたかもしれないし　もしかしたら、誰か殺してるかもしれない。でもあたし、どうしてもその人のこと嫌いになれない。だって、優しかったもの」

恐くないかと、那々を氣遣ってくれた“彼”。銃撃に晒され、恐怖に震えていてもおかしくなかった状況で、あれほど安心した気分ではいられたのは“彼”が傍にいたから。

那々は齋を見つめる。重なる面影。それを打ち消そうとは、もう思わなかった。

こうして正面切って尋ねることが正しいのかどうか、那々には分からない。だが、これ以外に取れる方法もない。

前に進むために。

那々は、口を開いた。

「……天瀬さんって、“誰”なんですか？」

まっすぐ見つめてくる彼女の視線を受け止めきれずに、齋はわずかに視線をそらした。

彼女はもう気づいている。齋が　ペインレス・ドッグ　であることに。

しかし、それを認めることは、大切な人に累が及ぶことでもあるのだ。

立河敏也。“叔父”であり、かつて ペインレス・ドッグ を救った人間。彼だけは、どうしても守りたい。

だが、那々が今懸命に、自分の心に決着をつけようとしていることも分かる。彼女をいつまでも、過去の幻に捕らえられたままにはしておきたくなかった。

それでは、自分と同じだから。

斎は、ゆつくりと視線を戻して口を開いた。

「……ちよつと、昔話をしたいんだ」

「昔話？」

「そう。昔どこかにいた、一匹の犬の話」

那々が息を呑んだ。ややあつて、肯く。

「……聞かせてください」

斎は過去を見るように、夜景を見やって話し始めた。

「……昔、あるところに、一匹の子犬がいた。けど、その母親は子犬が嫌い、いつもいじめて怪我をさせてた」

物心つく前から、それこそ記憶が遡れる限りの以前から、彼は日常的に、母親から虐待を受けていた。繰り返される暴行は、やがて子供の精神を食い破った。与えられる痛みから逃れるため、彼の本能は痛覚を手放すことを選択したのだ。

そして彼は五歳の時、わずかな金と引き換えに教団に売られた。

「ある日、その子犬を引き取りたいって人がやって来た。子犬はそれでも、母親から離れたくなくて、行くのを嫌がった。でも結局、母親は子犬を捨てた。いらないうて」

捨てないで欲しいと哀願した声は、届かなかった。母親は彼を愛してなどいなかったから。

彼女がその後どうなったのかは知らない。もともとお世辞にもまともな生活をしているとはいえなかった女だ。もしかしたら、もう死んでいるかもしれない。どうでもよかった。

教団に連れて行かれた彼はそこで、人を殺す方法を叩き込まれた。銃やナイフの扱い、爆発物の知識。最初から、そのために教団は彼を買ったのだ。痛みを感じない彼は、教団にとって都合の良い兵士だった。戦闘訓練で、教団に所属した十年余りの年月の内、半分以上が費やされた。

「新しい飼い主のところに連れて行かれた子犬は、最初誰にも懐かなかった。でも、たった一人世話をしてくれる人にはだんだん懐くようになった。その内その人をお父さんだっと思って思うようになって、その人と一緒にいるために訓練も頑張ったし、たくさん戦った」

初めて人を手につけたのは、十二歳の時だった。教団の裏側の構成員が、金で教団の機密を横流ししようとした、その制裁だった。

彼の牙は、十二歳の子供の手には余る、ブローニング・ハイパワ―。彼の放った何発目かの銃弾が、相手の眉間を貫いた。

死体は解体され、焼却と薬品とで完全に処分された。骨のひとつかからすら、残らなかった。ダークサイドの構成員は、多くが金で買い集められた国内外の子供で、教団から出ることなく戦闘技術を叩き込まれ、育てられる。戸籍もなく、例えば死んだところで、記録一つ残らないのだ。

いつか自分もあなるのかと、ぼんやりと思った。

それを皮切りに、彼　ペインレス・ドッグ　は戦闘要員として、本格的に教団の非合法活動の一端を担うことになった。密輸の警備を始め、薬物のシェアを巡る暴力団との抗争に参加したこともある。教祖の護衛として、凶器を持って襲いかかってきた人間を撃ち倒したことも、一度や二度ではない。

だがこれらの事件は、証拠も彼ら自身の存在もひっそるめて、すべてが闇に葬られた。

そんな教団時代の中で、唯一のやさしい記憶。

サイレント・ファンク
静かなる牙。

……おとうさん。

教団での、彼の養父。そして、戦闘技術を叩き込んだ師匠。

彼の傍にいたくて、銃を取った。自分を虫けらを見るような目で見下ろし、殴ったり蹴ったりすることでしか触れてくることのなかった母親とは違う、そつと頭を撫でてくれる無骨な手。それが嬉しくて、もう一度欲しくて、戦いの中に身を投げた。

痛みなどない身体を、いたわるようにさすってくれた。痛くないのにと答えれば、辛そうに顔をしかめた。あれが“痛い”顔なのかもしれないと、その時思った。

「……でも、子犬が大きくなった頃、そのお父さんが死んじゃったんだ」

彼は自分の養い子であり生徒でもあった　ペインレス・ドッグを、教団に盲従するただの戦闘人形に育てようとはしなかった。人として失ってはいけないもの　その確固とした一線を、養い子に教え込もうとした。例えそれが教義との間で歪みを生み出そうとも、この子供が“人間”であるために必要なことだと、分かっていたから。しかしその考えは教団幹部に危険視され、彼には目を追うことに過酷な任務が言い渡されるようになる。

養父が、任務の際負った傷が原因で死んだと聞いた時、世界が崩れるような絶望を感じた。発作的に後を追おうとした　ペインレス・ドッグ　を、しかし教団は力づくでこの世に繋ぎ止めた。舌すら噛めないように猿轡を噛ませ、厳重に拘束したのだ。

そして、ようやく回復を見せ始めた彼に、リハビリの意味合いも込めて割り当てられた任務が、誘拐されてきた子供たちの監視だった。

昔の自分とはあまりに違う、幸福な家庭に育った子供たち。だが今は、その家庭と引き離されて怯えている。

養父という家族を失った自分に近い感情を、子供たちに対して覚えた。

まだ、現実と過去との間を浮遊しているような状態だったのだ。
あの時までは。

小さな男の子を庇った少女が殴られて倒れた時、意識が現実

き戻され、そのまま縛り付けられた。そして、押し寄せる記憶。ばらばらの過去が、母の拳や足が、時を越えて自分を打ち据えるように感じて。

夢中で、引金を引いていた。

そこからは、衝動に流されるままだった。業者の車を奪い、銃を撃った。銃を撃つのはこれで最後だと、決めて。

「助けてくれるんでしょう？ あなたが」

そして、彼女に出会った。気丈に年下の子供たちを庇い、斎に無条件の信頼をくれた、彼女。出血に意識が薄れかけた自分の背中を、さすってくれた小さな手。養父の大きな手とはまったく違うのに、同じあたたかさを感じた。

自分に痛みが戻ることは、おそろくない。自分で分かっていた。

それでも、あのあたたかさを思うと、胸が少し苦しくなる。もう触れてはいけなと思うから、なおさら。

痛みとは違うけれど。

未だに胸を刺し、ため息をつかせる記憶。

那々を見つめた瞳を切なげに細める。きつと情けない顔をしているのだろうと、自嘲気味に考えた。

「お父さんを亡くした犬は、飼い主のところを逃げ出した。その人のところにいた理由は、お父さんだけだったから。これで、その犬の話はおしまい。さ、中に戻ろう」

そう長い話ではなかったのに、身体が冷え始めていた。

階段を下りようとした時、那々がぼつりと言った。

「天瀬さん。その犬は今、幸せだと思いますか？」

斎はきよとしたが、すぐに微笑んだ。

「うん。きつと優しい人に拾われて、幸せに暮らしてると思うよ」

「……そうですね」

それを最後に、二人は言葉を交わすことなく、階段を下りていった。

立河は一人、カウンターの内側でコーヒーを淹れている。

つい十分ほど前、病院から帰ってきたばかりだった。斎が撃たれて入院したなどと連絡を受けたものだから、泡を食って病院へ駆けつけたが、当の本人はけろりとしていて拍子抜けしたものだ。出血のせいで軽い貧血を起こしており、大事を取って一晩入院することになったというので、とりあえず戻って来たのである。

どうやら自分が着く少し前に、起き抜けにふらふら出歩いているところを看護士に捕まったらしく、斎はおとなしくベッドの住人と化していた。その姿に、出会った時のことをふと思い出す。

あの時の彼は、何かに取り憑かれてでもいたように、がむしやらに死に向かって歩いていった。

その頃の記憶 やつと思い出話にできる程度に和らいだ記憶を、頭の奥から掘り起こす。

『……どうして、僕を助けたんですか』

あの時、確かに彼はそう言ったのだ。

二〇XX年七月、横浜。

立河は横浜のいわゆる暗黒街で、非公認の銃工ガンスミスを営んでいた。扱った品はもちろん、非合法の密輸銃や犯罪歴のある銃だ。特に犯罪に使われた銃は、弾丸に残った旋条痕から足がつきやすいため、ライフリングを加工しないと決定的な証拠を残すことになる。

その日も、持ち込まれていた銃を客に引き渡し、立河はコーヒーを淹れて一息ついた。コーヒーを淹れるのは若い頃からの趣味だ。この仕事から足を洗ったら、次はコーヒーショップでも開こうかと思っているくらいである。

この界限は、立河のような非公認・非合法的な商売の人間、そしてそれを当てにしている犯罪者たちの街だった。海外からの不法入国者や、密輸の一大中継地でもある。警察でさえおいそれとは手を出せない、関東有数の都市・横浜の闇の部分。立河自身、その闇の住人を顧客として生活している身だ。

コーヒーを啜りながら、立河は窓の外を眺める。この街は、昼よりも夜の方が人の姿が目につくようだ。

その時、スチールのドアをノックする音がした。

「鍵は開いてる。入ってくれ」

ドアの方に声を投げ、カップを流し台に置く。この店に来る客は大抵が、ノックなどという気の利いたことはしない。誰だろうかと首をかしげながら、開いたドアを見やった立河は、次の瞬間絶句することになった。

「……姉さん、こんなところへ何しに」

ようやく押し出した声に、前触れなしに訪ねて来た姉は肩をすくめた。

「何って、あんたが最近連絡も寄越さないから、どうしてるかと思っ
て来てみたのよ。ちょうど横浜へ出て来る用があったから」

「それにしたって……素人が来るようなところじゃないぜ、ここは」とりあえず、申し訳程度に置いてある椅子に姉を座らせ、冷蔵庫を開ける。

「何か飲むかい。　　つっても、アイスコーヒーくらいしかないが」
「構わないわよ」

答えながら物珍しげに、姉の光子は店舗兼住居である室内を見回した。

光子は、実業家の男性と結婚したが、その夫に先立たれた後、遺

産を相続して熱海に移り住んだ。会社の株式や土地を持っているおかげで、毎月結構な収入があり、悠々自適の毎日を送っている。銃への興味が高じて銃工になった立河とは違い、至極穏やかな生活だろう。もつとも最近では立河も、危険と隣り合わせの生活を楽しむには少々年を取ったと感じるのも事実だが。

「案外きちんとしてるのねえ。非合法なんていうから、もつとごたごたしたところかと思ってたわ」

「呑気なこと言って……よく無事に来れたなあ。そんななりして」
いかにも良家の奥様といった身なりの姉に、呆れ半分感心半分で嘆息する。日があるからといって安心はできないのがこの界限なのだ。

「あら、普通に來れたわよ。すぐそこまで車で來ただけど、この辺りがあんまりごちゃごちゃしてるから、分からなくなっちゃってしょうがないから、その辺の人に訊いちゃったわ」

「……………」

ため息をつく。どこかの組の姐さんと勘違いされたんじゃないかと一瞬頭をよぎったが、言わない方がいいだろう。

「でも、もう銃は合法化されたんだし、あんたも非合法でやってないで、試験でも受けて公認受けたらいいじゃない」

「今さら無理だろう。辞めようと思えば銃自体から手を引くしかないさ。銃を扱える人間はいくらいても足らないからな。よっぽどの理由がなきゃ引退もできない」

立河は自嘲気味に笑った。彼の腕は、裏社会でも認められている足を洗うといつても、そう簡単にはいかないだろう。下手をすれば、色々まずいことを知っているからと狙われかねない。

「それより、そっちはどうなんだ。まだ五十前なんだし、再婚でもしたら」

「そんな元氣もないわよ。親戚付き合いも面倒だし、独りが気楽。子供もいないし、せいぜいのんびり暮らすわよ」

「そんなこと言っていると、あつという間に還暦過ぎちまうぜ」

「あんたこそ、結婚はしないの？」

「こんな商売でか？ 嫁さんだつて逃げ出しちまうよ」

肩をすくめた弟に、光子は苦笑いした。この弟の方こそ、早く身を固めなければ瞬く間に還暦過ぎだろう。

「あんまり長居はしない方がいいぞ、この界限は。ろくな連中がいやしないからな」

「あら……そうなの？」

「ああ。できれば、もう来ない方がいい」

「いやだ……物騒なこと言つて」

「そういうところなんだよ、ここは」

そして、そういう場所を選んだのも自分なのだ。

姉を早々に送り出して、立河は息をついた。まともな生活をしている姉には、こういう界限に足を踏み入れて欲しくはない。まあ、この街の住人は移り気だから、ほんの数十分訪れただけの闖入者ちやんこゆうしやのことなど話題にも上らないだろう。

それよりも、この間始末を頼まれたトカレフをどうにかしなければ。仕事の方に頭を切り替え、立河は空のグラスを持って台所に立った。

数日後に大きな転機が待っているなど、この時は思いもしていなかったのだ。

七月十日から十一日に日付が変わった頃。ライフリングの加工を終えた銃を机の上に置き、立河は大きく欠伸をした。このところずっと銃にかかりきりだ。しばらく仮眠でも取ろうと、入口のドアの鍵をかけ、寝室にしている奥の部屋に向かった。もちろん、この界限に住む人間の用心として、護身用の銃を枕元に置くことは忘れない。

ベッドに横になって目を閉じ、数十分ほど経った頃だろうか。

かすかな音を耳にした気がして、立河は目を開いた。ほとんど糸

件反射で、枕元の銃を掴む。愛用のベレッタM92FS。残弾を確認し、静かに起き上がって、隣室の様子を窺う。

かちり、とドアノブが回った。

ドアが豪快に開け放たれると同時に、立河は床に飛び込んで転がる。次の瞬間には、頭の上を横切った銃弾が、ベッドのマットレスにいくつもの風穴を開けていた。一瞬だけ視界をよぎったのはコルト・ガバメントだ。大口径の、ストッピングパワーに重点を置いた銃。

（本気で殺る気か）

床の上からベレッタを構え、撃った。相手が自分を殺しに来ているのだ、手加減などしていたらやられる。相手の身体のだ真ん中を狙った。

三発の内二発は、不安定な姿勢がたたって外れた。だが残りの一発が、相手の右胸を直撃して撃ち倒した。

相手が動かないのを確かめ、立河が立ち上がる。襲撃者の顔を見て、思わず呟いた。

「何てこった……子供じゃないか」

襲撃者は、髪を派手な色に染めてはいるが、せいぜい十七、八の少年だった。右胸の一発がかなりの深手を負わせたらしく、動ける状態ではないようだった。

立河はとりあえず隣室を窺い、他に仲間がいないのを確かめる。

入口の鍵はこじ開けられていた。ため息をついて、ひとまず机を引きずってきて鍵代わりにし、少年のもとに戻った。

「誰に頼まれた？」

こんな少年に恨まれる覚えはなかった。大方、今までの顧客の誰かが金でやらせたか、組の下っ端をよこしたかのどちらかだ。下手な詮索をするなど脅されたことは星の数ほどある。あいにく、心当たりが多すぎた。

尋ねるも、少年はもはや答える力すら残っていないようだ。立河はとにかく止血を施した後、彼の服を探り、携帯を探し当てた。発

着履歴にある番号を控え、さらに身許が分かりそうなものを洗いざらい引つ張り出して床に並べる。その中に、銀行のキャッシュカードを見つけた。

トダ イツキ

がたん、と音がした。

はつと目をやると、少年の右手がまだ銃を握り、こちらに銃口を向けている。とっさに銃口を掴んで、射線をそらした。

引鉄が引かれた。掴んだ右手に激痛が走る。撃ち出された銃弾と高温のガスが、掌を深く傷つけていた。

最後の力を使い切ったように、少年の右手がごとりと落ちる。脈を診てわずかに顔を歪めた。そこには何の反応もなかった。

殺してしまった。

立河は重い息をついて、見開いたままの少年の臉を下ろしてやる。自分の命を守るためとはいえ、まだ年端も行かない少年の命を奪ってしまった。何の恨みもないというのに。

ふらりと立ち上がり、右手の傷の手当てをした。指を動かすと、引きつるような感覚がある。しばらくは　もしかするとこの先一生、銃を扱うことはできないかもしれないが、それでもいいと思えた。これまでも銃を撃ったことがないわけではなかったが、二十歳にも満たない少年を殺してしまった経験は強烈すぎた。銃への興味も熱意もすっかり拭い去ってしまっただけだ。

もう一度少年の方へ目をやった時、激しくドアを叩く音が聞こえた。

「おい！　今銃声がしなかったか！？」

それがこの辺りに住んでいる、親しい情報屋だと思い当たって、立河は怪我をした右手に苦労しながら机をどける。ドアを開けると、情報屋の茂木（たけぎ）が転がり込んできた。

「何だ……ピンピンしてやがるじゃねえか」

殺されてるかと思っただぞ、と物騒なことを言う彼に、苦い笑みをこぼしてかぶりを振る。

「……そうでもないさ」

寢室を指し示した。

「撃っちまった。ひどい話だ。まだ年端も行かない子供だぞ」

床に倒れた少年に、茂木は息を呑んだが、落ち着いた声で問い返す。

「ガバメント持って乗り込んで来たんだ、撃たなきゃ撃たれようさ。正当防衛だろう？」

「慰めにはならんよ。せめて、どこから頼まれたのかだけでも知りたい。調べてもらえるか？」

「手がかりは？」

「これだ」

先ほど控えた電話番号を見せると、茂木は肯いた。

「分かった、何とか調べてみるさ。ところで、この坊主はどうするんだ。真正直に通報するわけにもいかんだろう」

「それは……」

立河は言い淀んだ。自分が逮捕されれば、姉の立場にも影響が及びかねない。その逡巡を見抜いた茂木が息をついた。

「……この界限じゃ人が一人消えたところで誰も気にしやしない。始末屋に連絡しよう」

「いや。自分でやる」

かぶりを振って、立河は少年の身体をベッドのシートでくるんだ。せめて、自分の手で始末をつけるべきだと思った。

茂木に手伝ってもらい、少年の遺体を車のトランクに乗せる。目立たないように上にタオルや毛布を被せた。夜半過ぎのため、人目はなかった。部屋に残った血痕や穴だらけのマットレスを始末し、番号調べを茂木に任せて立河は車に乗り込んだ。できるだけ人目につかない時間帯に目的地に着きたい。

当てはあった。以前通ったことのある、人通りのほとんどない海沿いの山の中。

まだ夜の闇が色濃いい中、立河は街を出た。

幸い見咎められることもなく、夜明け前に目的地に着いた。明るくなる前にことを済ませたい。立河はアクセルを踏んで、山道を登っていった。

かなり奥まで車で入ることができた。限界まで車を突っ込ませると、トランクから少年の遺体を担ぎ出し、木立の中に分け入った。しばらく行ったところに一旦遺体を横たえ、車に取って返してシャベルを持ってくる。シャベルを地面に突き立て、穴を掘り進めた。ざく、ざくと土を掘り返す音がやけに響くような気がした。気がつく、空がすでに白み始めている。シャベルを置き、穴の底にシートにくるんだ遺体を横たえ、土を被せた。

すべてが終わった頃には、すっかり夜は明けていた。どつと疲れが襲ってきて、立河はシャベルを抱えて車に戻った。そういえば、仮眠すら満足に取れていないのだ。シートを倒し、引き込まれるように眠りについた。

……目を覚ますと、もう昼を過ぎて日が傾き始めた頃だった。携帯で時間を確認しようとして、茂木からの着信に気づく。急いでコールバックした。

「俺だ。すまん、つい寝ちまってな。それで、何か分かったのか？」

「ああ、おまえ以前に、松嶋組の組員の依頼で、銃を扱ったことがあったろう」

その名には聞き覚えがあった。関東で強い勢力を持つ 白真会系列の組だ。暴力団関係からもずいぶん仕事を受けていたので、その中の一人だろう。

「そいつは、二ヶ月くらい前の銀行強盗で、行員を一人撃った銃だったらしい。その強盗、組員が組長に話を通さず、勝手にやらせたらしいんだ。その話に勘付かれちゃ困るってことだったらしいぜ」

「よく調べたな、そんなやばいネタ」

「もう始末がついたんだよ。ほら、おまえが控えた電話番号。あの中に、その組員の携帯の番号が混ざっててな。それを足掛かりに組の方に問い合わせてみた。そしたら上がえらい勢いで問い詰めたら

しくて、奴さんもたまらず白状してな、そつから先はどうなったのか知らんが、この件はこつちで始末つけたからつて、組の方から連絡がきた。まあ、何とか収めてくれつてこつたるう』

「そうか……いや、片付いたんならいい。こつちももう終わつた。今から戻る」

懸案が一つ片付いて、息をつきながらキーを差し込んだ。疲れも少しだが取れた。狭い山道を、慎重にバックで戻つて行く。

少し戻つたところで、分岐に差しかった。右へ行けば、もと来た道に戻ることになる。だが気分を変えたくなつて、左の道へ行くことにした。おそらく山を越える道だろう。

山道を進んでいく内に、日がどんどん傾いてくる。沈みきる前に山道を抜きたいと思いながら、ライトを点けた。

不意にライトの中に白っぽいものが浮かび上がつて、ブレーキを踏んだ。近づいてみると、バンが道を塞ぐように停まっている。もう少して山道を抜けられるのだが、これでは進めない。近くに運転者がいるのかと見回した立河は、バンの向こう側を覗いて息を呑んだ。

少年が一人、服を血に染めて倒れていた。

反射的に自分が射殺した少年のことを思い浮かべ、慌てて駆け寄つた。脈を診ると、弱くはあるが打っている。急いでトランクからタオルを取つてきて止血した。見たところ、この少年もここに来てそう時間は経つていない。すぐに処置をすれば、助かる可能性がある。いや、助けてやりたかつた。少年を射殺した罪悪感の裏返しと分かつていたが、それでも。

何か手掛かりはないかとバンを調べようとして、眉を寄せる。明らかに弾痕と分かる傷が、あちこちについていた。よく見ればフロントやリアウィンドウも割れ、シートにも血と思しき染みが広がっている。

（何者なんだ、この子供……）

とにかく放つておけば死ぬのは目に見えているので、その身体を

余った毛布にくるんで後部座席に乗せた。バンは処置に困ったが、とりあえず脇の茂みの中に突っ込ませて道を開け、車をスタートさせた。

山道を抜け、県道に入る。なぜかやたらと検問が敷かれていて冷や冷やしたが、片っ端から脇道に突っ込んで何とかすり抜けた。この時ほどGPSに感謝したことはない。検問のせいで少し時間を食って、横浜に戻ったのもう日が暮れた後だった。

出迎えた茂木は、後部座席の少年に目を丸くした。

「おい、死体じゃなかったのか」

「別人だ。まだ生きてる。医者に診せなきゃならんから、連絡しといてくれ」

「闇医者の子イさんか？」

「ああ」

本人の寿命の方が気になるご老体だが、こんな面倒そうな患者を診せるのに普通の病院へ転がり込むわけにもいかない。立河は再び車を走らせて、闇医者の子伊^{かんざき}が居を構える雑居ビルへと向かった。

神崎は、面倒臭そうな顔で立河たちを出迎えた。立河に事情を説明させ、一通り少年の容態を診て、傷の処置を済ませると顔をしかめる。

「また面倒そうな坊主を拾って来たもんだ。こりゃ間違はなく銃の傷だぞ」

「そんなことは分かってる。俺だって銃工だ」

「ほ、そうじゃったな。しかしこの坊主、おまえさんが見つけるまですぐに止血もしてなかったらしいぞ。ずいぶん出血してるようだが、まあ体力はありそうだから何とか保つ^もじやろ」

その言葉に、ほっと胸を撫で下ろした。しかし皮肉な巡り合わせだ。少年を射殺した自分が、同じように銃で撃たれた少年を救うとは。

「まあとりあえず、これ以上できることは何もない。坊主のことは置いておいて、おまえさんのその右手もどうにかせんとな」

「ああ……」

右手の傷は、穴を掘ったりしたせいでひどく痛み出していた。ざっと診て、神崎が唸る。

「こりゃあ、細かい作業は当分無理だぞ。銃工はしばらく休業だな」
「……いや、もう銃工は辞めようかと思ってる」

神崎が器用に片眉を上げた。

「懺悔かい」

「……いや、それもあるが、もう銃を扱う気がなくなっちゃったんだ。もう前と同じようには打ち込めんさ。それくらいならいっそ、すっぱり辞めちまうのも手かと思つてな」

「ふん……まあいいさ、診断書くらいは書いてやる」

神崎が鼻を鳴らした。つまり、立河が銃工としてはもう再起不能だという噂を流すのに、一役買ってくれるということだ。思わず笑みが浮かんだ。

「世話になったな、ジイさんにも」

「そう思うんなら治療費は弾めよ」

相変わらずの物言いだ。立河は苦笑するに止めて立ち上がる。

「色々準備もあるからな。また来る」

そう言つて歩き出そうとした時だった。

「……ん」

呻くような声をあげて、少年が身じろぎしたのだ。

「気がついたかい。大したもんだ。目が覚めるような状態じゃないはずなんだが」

半分くらい本気で感心しているような声音で、神崎が声をかけた。少年はゆっくりと視線を巡らせる。

「……僕は、生きて……？」

「危つく死にかけとったが、何とか生きとるよ。ほれ、そこにいる奴が命の恩人だ」

神崎の言葉に、少年が立河を見た。そこには奇妙に、疲れたような色があった。何かを、諦めたような。

それだけで、立河はこの少年が望んでいたものを悟ってしまった。
「……ど、して……」

掠れた声で、少年は絞り出すように言葉を紡いだ。

「……どうして、僕を助けたんですか……？」

立河は、わずかに肩をすくめた。

「……気紛れだ」

そう言うと、立河は振り返らずに部屋を出た。

少年の声は、追いかけてこなかった。

自宅兼店舗である雑居ビルに戻ると、立河はテレビを点けた。検問の多さが気になったのだ。あちこちチャンネルを回した拳句、映し出されたニュースでは、ちょうど速報が流れているところだった。

【行方不明の子供たち、無事保護】

【児童誘拐に、宗教法人関与か】

表示されたテロップに目が引かれた。キャスターがニュースを読み上げる。新興宗教法人の信者を名乗る少年が、行方不明だった子供たちを連れて警察署に出頭したという。聞いている内に、次々に疑問が解けていくのを、立河は感じた。少年が重傷を負ったまま姿を消したというところまで聞くに至って、確信する。

自分が拾った、あの少年だ。

（それで、あの怪我か）

そしてそれだけ思い切った真似をしたということは、あの少年は死をも覚悟していたのだろう。いや、むしろそれを望んでいたはずだ。だから、助かったことに落胆した。

そこまで考えて、立河はやり切れない気分になった。

（……冗談じゃない）

自分が撃った少年のことが、頭をよぎる。おそらくは死にたくないとなかったはずだ。それに引き替え、助かったのに生きたがらない

あの少年。

自分が言えた義理ではないが、不条理だ。

立河は、テレビを消して立ち上がった。

再び車に乗り込み、キーを捻る。今朝　　というにはあまりに前のように思えるが、辿った道をもう一度、あの山に向かった。途中、大きめのスーパードでビニールシートとロックアイスを買ひ込み、山道に車を乗り入れた。

あのバンは、変わらずそこにあった。人通りのなさが幸いしたのだろう、見つかった様子はない。立河はとりあえず自分の車を奥に停めておいて、バンの運転席のドアを開けた。キーはついたままだ。座席にビニールシートを敷き、ハンドルを握ってバンを県道に出す。数十メートルほど進むとUターンして一旦停め、他の車が通る気配がないのを確かめると、ハンドルをわずかに斜めに調整した。前方には緩いカーブ。ガードレールの向こうは崖だ。

立河はバンを降り、アクセルの上に穴を開けたロックアイスの袋を押し込んだ。ずれないことを確認し、シートを回収してギアを入れ、サイドブレーキを解除した。

バンはアクセルを全開にし、徐々にスピードを上げて県道をやや斜めにそれ、緩いカーブに突っ込んだ。衝突音。ガードレールを突き破る。金属がこすれ合い、ねじれる凄まじい音がしたかと思うと、次の瞬間バンは崖下に消えていた。大きな水音は、しかし波の音にほとんどが紛れた。

壊れたガードレールの切れ間から見下ろすと、沈んでいくバンの後部がちらりと見えた。

立河は息をついて、その場を離れた。おそらくこれで警察も、あの少年の生存の可能性は低いと見るだろう。ロックアイスは溶けて消えるし、座席に痕跡も残していないはずだ。指紋や袋は水に洗われて消える。トリックがばれる可能性は低い。何より、都合のいい解釈が目の前に転がっていれば、人はついそちらに目を奪われてしまふものだ　　つまり、少年は海に落ちて死んだ、と。

自分でも、何がしたいのかはつきりとは分からなかった。ただ、あの少年をこのまま死なせるわけにはいかないと、半ば意地のようなものを感じていた。

再び横浜に戻ったのは夜半だった。かなりハードな一日だったが、不思議と疲れは覚えていない。多分翌日辺りにどつと反動が来るだろうと自嘲気味に思いながら、立河は自宅に戻った。机の引き出しに突っ込んでいた品々を、一つ一つ並べ始める。

あの襲撃してきた少年の遺品だった。血痕やマットレスはともかく、これはすぐに処分する気になれずに、とりあえず置いておいたのだ。

それらを眺めながら、立河の頭にある考えが組み上がりつつあった。

五日ほどで、仕事の方はあらかた片がついた。茂木や神崎が噂をばら撒いてくれたらしく、銃の注文はぱったりなくなった。数丁ほど預かっていたものは同業の知り合いのところに戻してある。向こうも客が増えて困るということはないだろう。

立河は、この街を出て東京へ行くつもりだった。東京のどこか片隅で人波に紛れ、小さなコーヒーショップでも開いてひっそりと暮らせたらいい。危険と隣り合わせの生活を楽しめる年齢はとうに過ぎていたのだと、今さらながらに悟った。

ただ一つ、やり残したことを片付けるために、立河は神崎のもとへ向かった。

絶対安静を言いつけられて療養中の少年は、相変わらず感情をどこかに置き忘れたようなぼんやりした様子で、無言のまま立河を迎えた。

「近い内に、俺は東京に移る」

「……そうですか」

事務的に、少年が返す。立河を見ることもなく、ただ機械的に答えただけのような感じだ。ため息をついて、立河は用意していた一言を投げた。

「おまえも来るか」

少年が立河を見た。初めての、感情の混じった視線。ただそれは、困惑のそれだった。が。

「……どうしてですか」

「このまま置いていたら、その内野良犬みたいにふらふら出てって、誰もいないところで死にそうだ」

「その、つもりです」

天井を見上げて、少年はかけられた毛布を握り締める。

「……父さんが、いないのに……僕だけ生きてたって、何も無いのに。なんにもいらぬ。教団も、僕も、なんにもいらぬ……」

「父親の後でも追う気か」

「そうしたかったのに……あなたが、助けた」

「そりゃ悪かったな」

肩をすくめて、立河は少年を見下ろす。ひどく弱った、子供の顔をしていた。

「で、その父親があのお世から、こっちへ来いって手招きしてるのか？ だったら、無理に止めはしないがな」

その言葉に、少年は思いがけない鋭さで立河を見た。立河が見返すと、少年の顔がくしゃりと歪む。

「……そうなら、良かった」

そんな人じゃないから。そう呟いて、少年は枕に顔を埋めた。

立河は手近な椅子を一つ拝借し、ベッドの傍に陣取る。長丁場になりそうだった。

「……ほんとの父さんじゃなかったんです。あそこに来る子供は、捨てられたり、買われたりした子供ばかりだったから。僕も、そうだった」

不意に、少年が細い声で話し始める。立河に話しているというよ

り、自分を振り返った独白のようだった。

「変わった人なんです。僕に戦い方を仕込みながら、こんなことさせたくないんだけどな、って苦笑いしてました。でも僕は、どれだけ血に濡れても、父さんと一緒にいたかった。だからずっと、戦ってきたのに」

小さな子供のように、ぎゅっと身体を丸めて、彼は何かに耐えるように唇を引き結ぶ。やがて漏れた声は震えていた。

「……僕の親にならなかつたら、父さんだって死なずに済んだ……！」

「ごめんなさい、と繰り返し呟く声。僕が迷ったから、と切れ切れに吐き出して、彼は堰を切ったように嗚咽と涙をこぼした。立河はただそれを見やる。何かアクションを起こすには、あまりに少年を知らなすぎた。

しばらく泣いた後、少年はのろのろと顔を上げた。

「……どうして、僕を助けたんですか」

責めるような響きはなかった。ただ純粹に疑問をぶつけているような声音に、立河も正直に答えた。

「さあな。とりあえず、生きてたから助けた。で、今は少しばかり腹が立つてる」

きょとんとする少年に、疲れたため息が漏れた。

「銃を持って俺を殺しに来た相手を、返り討ちにした。おまえと同じくらいの子供だ。死にたくもなかつただろうに死んじまった。

その死体を埋めに行つて、血塗れで転がってるおまえを見つけて拾ってきた。が、当の本人はさっさと死ぬつもりと来たもんだ。おまえ、人生なめてんのか」

八つ当たりに近い言い分であることは自覚していたが、今さら撤回はできなかった。この気持ちから、今まで動いてきたのだ。

「死んだ父親が助けたなんて陳腐なことと言わん。けどな、生きられる奴が勝手に死ぬのは腹が立つ。だからとりあえず生きとけ」

「無茶苦茶だ……」

少年が呻いた。確かに無茶な言い分だろう。

だが、その後彼が発した言葉は、立河の予想を望ましい方向に裏切った。

「……大体、生きてくにしても僕、戸籍も何もないんですよ。本名だって、とうの昔に忘れたし」

「それなんだがな」

立河はポケットからあの少年の持ち物を引っ張り出した。トダ

イツキの名前が入ったカードや、携帯電話。

あの少年 戸田斎 について、茂木に色々調べてもらった。

親が事業に失敗し、借金を背負って悲観の拳句、一家心中しようとしたらしい。だが彼だけは死ぬのが怖くなって逃げ出し、この街にやってきた。そして松嶋組に入れてやる代わりにと、立河の襲撃を持ちかけられたそうだ。つまり、彼には家族がいない。

目の前に並べて置かれたそれらの意味するところを、少年はすぐに悟ったようだった。

「……この名前を乗っ取れてことですか？」

「身代わり、って言う気分が悪いかな？ だが話としちゃ悪くないはずだ。借金は親の死亡保険金で何とか相殺できてるそうだから、金銭的な負担はないな。それに、今までのおまえはもう死んだことになってるはずだ。車と一緒に海に落ちてな」

彼の生存の可能性は低いと、ニュースで報じているのを見たばかりだ。上手くごまかしきれたらしい。

「実を言うと、入れ替わってくれば俺も助かる。実在してる人間の死体を捜そうとする奴はいないだろうからな」

少年は立河を見、そして手を伸ばした。カードに書かれた名前を、しげしげと見つめる。

彼を 戸田斎 の代わりにするつもりはなかった。だがこの国では、戸籍があつた方が自由が利くのだ。幸い年齢は近いし、遠く離れた土地に移れば露見する可能性も低いだろう。あの少年には悪いと思わないでもないが、せめて目の前の彼にわずかでも未来への糸

を繋いでやりたかった。

「……いつ、ここを発つんですか」

少年の問いに、立河は少し考え、

「仕事の方はもう片がついた。家は、放つときやその内誰かが住み着くだろうし、発とうと思えばすぐにでも発てるな」

それを聞いて、少年が身体を起こそうとした。さすがに慌てて止める。

「おい、傷に障るぞ」

「平気です。どうせ、痛みなんかないし。小さい頃、母親に殴られてばかりいて、神経がどつか飛んじやったみたいで。痛覚がないんです」

あっさりと言われた言葉が、かえって重かった。立河が絶句している間に、少年は何とか身体を起こして、ベッドから降りようとしていた。支えてやると、力は弱いものの確かに腕を掴んできた。

「考えさせて、ください。さっきの話。まだ、空っぽみたいな感じだから。どうするかって、すぐには決められないけど、でも」

「ああ、分かった。別に元んここに捨てに行きやしないから」

「……捨て犬ですか、僕は」

「似たようなもんだろう」

そう言つと、少年は初めて、表情を緩めた。そうですね、と呟いて腕を下ろした。

彼を残したまま、立河は神崎のところへ顔を出した。少年の容態について訊くためだ。神崎はベッドの方をちらりと見て、声を低めた。

「……本当に、あいつを連れて行く気か？」

「拾っちゃったからな。しばらくは、面倒見るつもりだが」

「見杀れるか？　どうも、かなりのトラウマを抱えとるみたいだぞ。寝てる間も、よくうなされてる。鍛えてる割に怪我の治りが遅いのも、その辺に原因があるかもしれんな」

「動かせそうか？」

「五日でそこまで治るもんか。せめて倍は待て。骨に異常がないのが救いだが、下手に動かせば傷が開くぞ」

「ずいぶん入れ込むじゃないか。患者によっちゃ縫いつ放しで放り出すジイさんが」

すると、神崎は肩をすくめた。

「どうも、世話を焼きたくなる手合いなんだよ、あの坊主は」

確かに、放っておけない危なっかしさがある。それが弱っているせいなのか、生来のものなのかは分からないが。

……捨て犬、とは言いええて妙かもしれない。それも、保護欲をくすぐる子犬だ。

（なら、俺は飼い主か？）

行き着いた考えがあまりにしっくり来て、立河は思わず乾いた笑みを浮かべた。

その後、とりあえず抜糸だけは済ませて、立河は少年 戸田 斎 を連れて街を出た。といってもすぐに東京に行くというわけにはいかなかった。療養がてら熱海の光子の家に転がり込んだところ、彼女が二人をなかなか手放そうとせず、結果として三年ほど世話になってしまったのだ。いきなり見知らぬ少年を連れて転がり込んできた弟に驚くのもそこそこに、連れてきた斎の容姿の端整さに大喜びしていた姉は大物なのだろうと、今さらながらに思う。

もつとも、その勢いのまま斎を養子にすると言い出した時はさすがに驚いた。万一戸籍のからくりがばれた際には、光子にまで影響が及びかねないと思って諫めたのだが、立河よりはまだ自分の方が養子縁組には都合がいいからと押し切られてしまった。確かに、彼を養子にすることを考えていないわけではなかったし、立河より光子の方が社会的な信用もあるう。こうして光子がさっさと手続きを済ませてしまった結果、彼は 天瀬斎 となった。立河とは、戸籍

上叔父と甥になったわけだ。

そして裏社会から足を洗った後、立河は前々から考えていたプランを実行に移すことにした。

「コーヒーショップ？」

「ああ、前から考えてはいたんだ。銃工を引退したら店でもやるかってな」

趣味を生かした、コーヒー専門の喫茶店。薄々とは考えていたプランが一気に現実味を帯びてきて、立河は嬉々として斎に自分の構想を語る。幸い、そこその蓄えはあった。裏社会というのは、とかく法外な金額が行き来する場所なのだ。

「東京の方で、物件も探してるんだ。ここなんか、三階が住居スペースになってて、いいと思わないか？ まあ店舗部分が二階から地下一階までつてのは多すぎだが、それはテナントにでもして……」

斎は立河の話をじつと聞いていたが、やがて思い切ったように口を開いた。

「あのさ、叔父さん。その内の一階、予約しといていいかな。僕もやってみたいことがあるんだ」

「やってみたいこと？」

「うん。銃工」

斎の言葉に、立河は啞然とした。

「斎、おまえ……」

「あ、ちゃんと許可証取って、公認受けるよ？ でもさ、叔父さん、言ってたよね。裏社会から完全に抜けるのは難しいって。だから、保険」

「保険？」

「僕、今まで銃とかナイフとか、そういうものしか扱ってこなくてもうそれを持つての方が自然なくらいに、身体がそれに慣れちゃってるから。どうせ離れられないんなら、いつそのことそれを仕事にしちゃおうかって。それなら、いつでも戦えるから、叔父さんを守る」

思いがけない言葉だった。

「裏社会時代の関係とかで、もし危なくなったらさ。父さんのこと、守れなかったけど……せめて、叔父さんだけは」

途中で声は掠れて消えたが、唇は確かに動いた。

まもらせて。

……泣き出しそうな顔で言われて、却下できるはずもない。子犬のつぶらな瞳に負けた父親の気分で、立河はため息をついた。そういえば昔、そんな感じのCMを見たような気がすると思いながら。

「……分かった」

斎がぱつと顔を上げた。その表情が綻ぶ。

“父親”には敵わないまでも、家族にはなれたと感じるのはこんな時だ。面映い心持ちになった。それをごまかすように、付け加える。

「ただし、銃の資格取得は二十歳以上だ。そこまで言うんなら、それまでちゃんと勉強して試験受かれよ？」

もちろんこの時、立河は何の気なしに言ったのだ。

数年後、彼が実技試験で満点を叩き出すことなど知る由もなく。

十日後。ペニーハウスに、那々はいた。

店内に客はいない。今日は定休日なのだ。那々の前にはカフェオレのグラスが置かれ、カウンターでは立河がコーヒーを淹れている。斎は腕の傷の抜糸のため、病院に行っていた。

しんとした空間の中、不意に立河が口を開いた。

「……悪いね、あいつも、もうすぐ帰って来ると思ってたが」

「いいんです。あたしも、お休みの時に来たんだし。あの、マスターさん」

「何だい？」

「子犬の昔話、聞いたことがありますか」

沈黙が落ちた。サイフォンのビーカーにコーヒーが落ちる音が際立つ。

ややあつて、立河は息をついた。

「……あいつが？」

「はい」

肯いて、那々はカフェオレを一口。相変わらず、絶品だった。

自分のブルーマウンテンブレンドをカップに注ぎ、立河は彼女を見た。五年前に、斎 いや、ペインレス・ドッグ が救った少女。

彼女がある意味自分たちの命運を握った存在になったことに、しかし不思議と脅威は感じない。むしろ、奇妙な仲間意識のようなものを、彼女に対して感じていた。

同じ人間に惹かれた者同士の、連帯感ともいふべき感情。

「あいつのことが、好きなのかい？」

そう尋ねると、那々はわずかな沈黙の後、肯いた。

「はい」

「そうか」

目を細めた。彼女の目に、迷いはない。

だが 懸念が胸を掠めるのも確かだ。

斎は、誰かを愛することに慣れていない。幼い頃から、実の母親に愛されず、痛覚を切り捨てざるを得ないほどに虐待を受けた経験。そして教団で積み重ねられた、奪い、殺す日々。それらは切れない鎖となって、彼を縛り続ける。

そして、唯一彼を愛したであろう“父親”を失った傷が、今でも斎を苛んでいるのを、立河は最も近くで見てきたのだ。そんな斎が、少女の恋心を受け止められるのか、立河には分からなかった。

「あいつは……難しいぞ」

呟かれた言葉に、那々はきょとんと目を見張り、そして微笑した。
「覚悟、してます」

そう 彼女はすべて分かった上で、斎を好きだと言ったのだから。

「そうだったな」

笑いを漏らして、立河はカップに口をつけた。

いつか彼女が、斎の隣で笑う日が来ればいいと思った。

「あれ？」

ドアを開けた斎は、店内に那々の姿を見つけて声をあげた。

「那々ちゃん、来てたんだ」

「あ、天瀬さん。 怪我、もういいんですか？」

「うん、おかげさまでね。 もともと大した怪我じゃなかったし」

カウンターの内側に入ると、手慣れた様子で自分の分のカプチーノを淹れ、那々にも尋ねる。彼女がかぶりを振ったので、そのまま

カウンター席に座った。

「……大丈夫？ 事件のことで何か言われたり、してない？」

「大丈夫です。ニュースとかでも、麻薬とかの方がメインみたいな感じで報道されてて、あたしたちのことはあんまり。ただ、学校の方は色々、大変だったみたいだけど」

「だろうね」

生徒が薬物に手を出して事件を起こしたのだ。学校関係者の人々はさぞかし、胃の痛いことだろう。

カプチーノに口をつけながら、斎は那々を見やる。事件を乗り越え、彼女はずいぶん落ち着いて見えた。

彼女は大丈夫だろう。強い子だ。

だが、もう一人の方は、どうだろうか。

そう思った時、那々が口を開いた。

「……あたしは大丈夫だけど……直美は、今入院してます。退院したら、転校するって。もしかしたら、留学するかもしれないって、言っていました」

「……そっか。そうだね」

新しい環境に身を置くこと。乗り越えるには 忘れるには、それが一番いい。日々に追われて、きつと、記憶も薄れていくだろう。「僕がこんなこと言うのも何だけど……早く忘れられると、いいね」

「……はい」

肯いて、那々は斎を見た。

「……何？」

「えっと、その……ストーカーのことも片付いちゃったし、天瀬さんに彼氏のふりしてもらわなくてもよくなったでしょ？」

「あ、そうだね」

そういえば、もう理由がないからお役御免か、そう思った矢先。

「だから今度は、ホントの彼女に立候補します」

「………は？」

何かとんでもないことを聞いた気がして、斎は思わず間の抜けた

声をあげていた。

「えーと……僕、七歳も下の女の子に手を出す気はないよ?」

「出す気になるまで待ってます」

あっさり言われて、斎は頭を抱えた。ぐったりと呻く。

「……何年かかるか分かんないよ?」

「いいですよ」

きゃろんと言われた言葉に、何だかもう、何もかも投げたい気分になった。

……そりゃまあ、彼女のことは守りたいと思ったし。いい子だと思っけど。

でも、僕は。

「天瀬さん?」

那々の声に、斎は顔を上げた。見つめてくるその瞳が、五年前の記憶に重なる。

そういえば彼女は、あの頃からまっすぐ人を見る子だった。

「何でも、ないよ」

そう言っつて、斎は自棄のようにカプチーノを一気飲みする。たん、とカップを置いて叔父を見据えた。

「……叔父さん、さっきから何か楽しそうだね」

「いやあ、可愛い彼女ができて良かったなあ、斎」

「そのセリフは前にも聞いたよ!」

叔父も共犯だと悟り、斎は天井を仰いだ。この人は絶対確信犯だ。くすくす笑っていた那々が、ふと居住まいを正して斎を呼んだ。

「天瀬さん」

「なに?」

向き直った斎に、那々はぺこりと頭を下げた。

「ありがとうございます。色々」

今回のこと。そして、五年前に言えなかったこと。すべてを込めたつもりだった。

やっと、言えた。

顔を上げると、斎が微笑した。

「どういたしまして」

その表情に、“彼”の面影を見つけて、泣きたくなるような想いがこみ上げてくる。探していたものをようやく見つけた、そんな達成感にも似た気持ち。

このひとだった。

このひとでよかったのだ。

斎の笑顔の中で、あの日の“彼”が微笑っていた。

もう、迷わなくていい。

彼女の恋は、ここから始まる。

那々が帰った後、斎は立河をじろりと見やり、カップを突き出した。

「叔父さん、もう一杯」

「ブルマンなら余ってるぞ」

「それでいいよ」

ブルーマウンテンブレンドを啜りながら、息をついた。

「……どうしろっていうのさ」

「どう、とは？」

「那々ちゃんのことだよ。誰かを好きとか愛してるとか、そんなの分からない、僕は。足りないところが、いっぱいある」

「別にいきなりそこまで突っ走ることはないだろう。あの子が大事なんだろう？ 大事にしたいってのは、好きだったのと大差ないぞ」

「……そうかな」

「そんなもんだ。大体こんなもん、頭であだこうだ考えたってどうにもならん。なるようにしかならんもんだ」

「それって経験談？」

「まあ、そんなもんか」

叔父の言葉に苦笑して、斎は店内を見回した。少しくすんだ色合いの床、磨き上げられたカウンター、そして何より、全身を包むコーヒーの香り。この二年の間に、すっかり店内に染み付いた香りだ。ここに越して来て二年。そしてそれ以前に三年。

「……五年、か」

呟いた斎に、立河も思い出す。もう五年も経ったのだ。彼の“叔父”になってから。

「早いもんだな」

「うん。ほんとだね」

カップを弄びながら、斎が微笑した。その穏やかさに、感慨とでもいうべきものを感じる。五年という時間があつたからこそ、できるようになった表情。五年前の彼からは、想像もつかない。

今回のように無茶をすることはあっても、命を粗末にするようなことはしなくなった。“死”に魅入られていた、あの頃の彼はもういないのだ。

父親を失った傷が消えることはなくとも、それを覆って癒すことはできるだろう。

彼女　那々が、そういう存在になってくれればいいと思う。

「いい子じゃないか。守ってやれよ」

そう言くと、斎は少し目を見開き、そして肯いた。

「うん。　そうしたいと思ってる」

祈るように、呟いた。

三階の自室で、斎は机の上のパソコンを起ち上げた。一階の店から持ってきた“カルテ”の内容をデータ化するためだ。

個人別に作ってあるファイルに新規の分の入力を済ませると、メールをチェックする。たまに千秋のような常連客が予約のメールをよこすことがあるのだ。たまに銃と一緒にコーヒー豆の注文もあった。

たりして笑ってしまった。

メールのチェックを終えると、少し考え、インターネットに接続した。アドレスバーの履歴から、警視庁のサイトにアクセスする。サイトに入ると、もう何十回もクリックしたリンクをまたクリックした。

【青銀天聖教団の幹部たち】。

相変わらず、新しいトピックスはない。そのことに、安堵とも落胆ともつかない息をついた。

教団に対する斎の感情は、複雑だ。自分を育てた組織。そして、父を死に追いやった組織。

……いや、父の死は自分にも責任の一端はあるのだろうか。そう思っ、顔を覆った。

教団が父を危険視し始めたのは、斎が迷いを見せ始めたからだ。父が示した、人としてのボーダーラインを、教団の任務は容易く越える。教団に忠実な犬でなければいけなかったのに、そのギャップに戸惑い、板挟みになって迷いが生じた。教団随一の戦士であるペインレス・ドッグの迷いは、そのまま戦闘力の低下に繋がる。そう考えた教団側は、原因の排除を実行した。そして 任務の果ての父の死。

迷わなければよかった。父の意にそぐわなくても、教団に忠実な犬のままでいれば そうすれば、父が死ぬことはなかったかもしれない。少なくとも、もつと長く傍にいたことが叶っただろう。

そしてまた、戻れない過去を嘆いて、同じループを回り続ける。

かぶりを振って、斎はサイトへの接続を切った。そのままパソコンの電源も落とし、窓から外を眺める。

……教団時代の仲間たちの誰かも、いるのだろうか。自分と同じように、この街のどこかに。

教団が崩壊した際、教祖を始め幹部たちや主立った信者たちは軒並み逮捕・収監されたが、斎と同じくダークサイドに属していた者たちは、数人が未だ行方不明のままだ。教団では、任務のために偽

造パスポートを支給することもあったので、それを使って海外に逃れた者もいるかもしれない。

彼らの戦闘能力の高さは、斎が一番よく知っている。めったなことで捕まるとは思えなかった。

彼らは、恨んでいるだろうか。教団崩壊の引鉄を引いた自分を。そしてこの街は、華やかさの下にその憎悪を隠しているのだろうか。

今思えば、顔を変えなかったのは失敗だったかもしれない。熱海の養母のところに転がり込んだ際、一度整形をしようかと口にしたら、せつかくの綺麗な顔がもつたいたいなと猛反対されたのだ。かといって、今さら整形するのも妙なものだし……。

とりあえず今は、考えても仕方がないので、その問題は棚上げすることにした。見つからなければ、それに越したことはない。

だが、見つかって、自分の周囲に累が及ぶようなことになればその時のために牙を研ぎ、戦う覚悟だけはしておくつもりだった。

この街にはきつと、牙を隠した獣が山ほど棲んでいる。

もちろん自分も、その中に含まれるのだが。

斎は立ち上がり、カルテを持って部屋を出た。出掛けに振り返って、肩越しにもう一度、窓の向こうを見やった。

夜の闇は、まだ遠い。

わけもなくそのことにほっとして、斎は再び振り返ることなく部屋を出て行った。

ペニーハウスを出て、どこへ行くとも決められずに街を歩く家へ帰っても、暇を持て余すだけだ。直美は部屋を引き払ってしまいい、もうあのマンションに帰って来ることはない。

ふらりと本屋に立ち寄った。今はネット配信に押され気味だが、まだペイパーバックを好む風潮も根強い。棚の間を歩いていると、

出し抜けに肩を叩かれた。

「……あ」

少し目を見張る。すらりと背の高い、すっかり顔見知りになった少女。

まひるも、意外そうな顔で那々を見て、

「あんた、本屋なんかに来ることあるんだ」

「……それって、ちょっと失礼だと思う」

確かに、お世辞にも勉強熱心とはいえないが。

成り行きで並んでレジに行きながら、ふとまひるの手にした本のタイトルを見て絶句する。

【世界ナイフ百科】。

そういえば出かけるにも複数のナイフを持ち歩く少女だ。よほどのナイフマニアなのだろう。部屋を見るのが怖い気もするが。

会計を済ませて本屋を出ると、二人はしばらく歩いて歩道橋に差しかかる。那々がふと、口を開いた。

「……そういえばさ、あたし一つ訊きたかったんだけど」

「何？」

「前に言ってた、“借り”って何なの？」

結局、聞かないままに終わってしまい、気になっていたのだ。

まひるは那々を見て、ふっと笑った。

「……五年前の事件の時」

彼女の言葉に、はっとする。なぜまひるが事件との関わりを知っているのか分からず、息を詰めた。まひるはどこか那々の反応を楽しむように、言葉を継ぐ。

「あんた、男の子助けたことあるでしょ」

言われて、おぼろげに思い出した。大柄な見張り役から、小さな男の子を庇ったこと。その後自分も、斎に助けられたのだけれど。

「その子、あたしの弟なのよね」

「……そうなの!？」

まじまじとまひるを見つめる。意外なところに、意外な縁があっ

たものだ。

「おかげさまで、今十歳。毎日サッカー漬けよ」

「へえ……そうだね、もう五年も経つんだもんね」
相槌をうつて、軽い気持ちで尋ねた。

「そういえばさ、まひるの家って何の仕事してたの？　ウチはあの時、お母さんが成田空港にいたんだけどさ」

すると、まひるはなぜか顔をしかめた。

「……ウチじゃなくて、伯父貴がね」

「伯父さん？」

「警察庁長官」

……二度目の絶句。

「……何でまひる、ウチの高校通ってんの？　私立でも行けたんじゃない……」

「だって金かかるじゃん。伯父貴がお偉いさんでも、ウチはただの会社員なんだからさ」

確かにその通りだ。

「それに、伯父貴の方だってあたしみたいな問題児の面倒は見たくないだろうし。弟ならともかく」

「問題児、ね……」

ほとんど金のロングヘア、メンソールの煙草をふかし、ナイフを持ち歩く少女。しかしまひるには、不思議と粗暴さは感じられない。どこか大人びて、自分というものを持っている人間に思えた。

「……けど、まひるって実はいい人でしょ」

「お、分かってんじゃない」

からからと笑って、まひるは歩道橋の中ほどで立ち止まり、バッグの中をぐそぐそと探る。

「何？」

「ん、煙草」

「ちよつと、ここで吸うの！？　制服で！？」

「いいじゃん、ほとんど人なんか通りゃしないし」

まひるは意に介さない。マイペースも困りものだ。

煙草をくわえて、ライターで火を点ける動作が、相変わらず妙に堂に入っていた。白い煙が、暮れかける空に細長く立ち昇る。

「……あん時さあ、弟が教団に誘拐された時。ウチの親、おたおたして見てらんなかったんだよね」

空を見上げたまま、まひるは煙草の灰を落とした。手摺にもたれて、長い指に煙草を挟む姿が、やけにはまっていた。

「伯父貴んここに駆け込んでって、何とかしてくれてわめいたり。そりゃ伯父貴も扱いに困ったと思うけど。結局、誰も何にもできなかったただけだ。そんな時、あたし決めたんだ」

「決めた、って？」

「あたしは、誰かの弱みにはならない」

どこか晴れ晴れと、まひるは言い放った。

「弟みたいにおとなしく取っ捕まったりしない。戦ってやろうと思っ。だから、ナイフはあたしの牙なんだ」

「……そっか」

分かるような気がした。那々自身も、誰かの足枷になるのは嫌だ。目の前で他の誰かが傷ついて、それを見ているしかできないなど、冗談ではない。それくらいなら、自分で戦いたかった。

あの時のように、血を流す齋を見ているしかできないなど、もうごめんだ。

「そうだよ。自分でも、何とかしたいもんね」

そうでなければ、彼の隣には立てない気がした。

短くなった煙草を携帯灰皿にしまつて、まひるは手摺に頬杖をつく。靴先で足元のコンクリートを叩きながら、那々を見た。

「けど、あんたは昔から、度胸据わってたんじゃない。誘拐された先で大の大人に食って掛かったっていうし、こないだもちゃんと自分で落とし前つけに行っ。あたしみたいにナイフ持つてるわけでもないのに、どうしてそんなにできるのかって、思ったところよ」

「それは……アタマ来ちゃって、周りの状況なんて飛んじやってたから。それに、助けてもらってたし、結局」

二度とも、斎に助けてもらった。そして、二度とも彼は血を流した。本当は、那々が負うはずの怪我だったのに。

「あたしが強いわけじゃない。運が良かったただけだよ」

強くなりたい。守られるだけにはならないように。

すると、まひるは少し笑った。何というか　にやりという擬音が似合いそうな、笑い方。

「……あん時助けに入っただのって、あれ、あんたの男？」
「は!？」

一瞬、思考がぶっ飛んだ。

「ありや只者じゃないね。^{ガンスミス}銃工^{スミス}って言うてたけどさ、相当修羅場潜ってそう。おまけにいい男だし」

「あの、それ」

慌てる那々に、まひるが笑いかける。大人びた、きれいな笑顔だった。

「捕まえるんなら、きっちり捕まえといた方がいいよ」

「……その、つもり」

五年も想った相手だ。あと数年、どうということはない。

「ま、頑張れ。じゃね」

肩を叩いて、まひるは歩き出した。肩越しに振り返って、ひらひらと手を振った。那々も家に帰るため歩き出す。気分が軽い。

彼女とは、気が合いそうな気がした。

その後数日、千秋のレミントンと他の顧客持ち込みの銃の調整にかかり切りになっていた斎は、週が変わった頃によりやく喫茶店のウェイターに復帰を果たした。土日はともかく、平日は日がな一日、一階の工房に閉じこもっていたのだ。

いつになく新鮮な気分で喫茶店のユニフォームに袖を通し、テールを拭いていると、ドアの開く音がした。

「いらっしやいませ……諸角さん？」

「おう」

軽く手を上げて、諸角はいつものようにカウンターに直行する。

立河が、モカブレンドを淹れ始めた。

「やっと一段落ついてな。今度の事件が」

「あ……ご迷惑かけました」

あの時は斎も景気よく発砲してしまった。別に人を撃ったわけではないが、そういう意味では、むしろ斎の方が被害者だが。正当防衛ということで片付けるのに、諸角がずいぶん走り回ってくれたであろうことは想像に難くない。

「いや、あれで薬物の流通ルートの一部を掴めたからな。上手く辿れば、もっと大物が釣れるかもしれん。そういう大事件解決の立役者が民間人つてのは、どうもありがたくないらしい、上としては」つまり、手柄を譲る代わりに発砲の件は不問に付す、ということらしい。もっとも、斎にとってもその方が好都合だが。

「そうですね。僕もその方がありがたいです。あんまり騒がれたくないですから」

「やれやれ、謙虚だねえ、おまえも」

というよりは、あまり顔売りを売りたいくないというのが本音だが。

「まあ、薬物絡みの事件の担当を引つ張ってったから、そいつが喜んで引き受けてくれるだろうよ。ついでに、この後の捜査もな」

そう言っつて、諸角はできてきたモカブレンドを啜る。

「……そういえば、西脇哲治はあれからどうなったんですか？」

ふと尋ねると、諸角は難しい顔になった。

「まだ入院中だ。中毒症状が、予想以上に進んでな。あの分じゃ、医療少年院の方に入ることになるかもしれん」

「そうですね」

斎は息をついた。彼はまだ十代だ。これからいくらでも、やり直

しはきくだろう。個人的に親しくしたいと思う相手ではなかったが、何とか立ち直ってくればそれに越したことはない。

彼はまだ間に合う。

自分のような、獣にはならず済む可能性が残っているから。

と、諸角が思い出したように言い出した。

「そうそう、公安の“姫”がまた騒いでたぞ。おまえが撃たれたって話が、どっから行ったらしくてな。今は忙しくてなかなか抜けられないみたいだが、その内見舞いと称して押しかけてくるんじゃないか」

「……ありがとうございます。心の準備だけはしておきます」

いつ襲撃されるかは分からないが、ふわりと気分があたたかくなるのを感じる。自分のことを気にかけてくれる人が、何人もできた。五年前 教団を出奔してきた時は、想像もしていなかったことだ。

自分を案じてくれる人など、養父以外にはいないと思っていた。仲間たちとも仲が悪かったわけではないが、やはり“家族”として愛情をくれたのは、彼だけだったから。

しかし、立河に出会った。養父を失って心身ともにぼろぼろだった斎を、教団とは違う形でこの世に繋ぎ止め、家族として受け入れてくれた人。そして、養母となってくれた彼の姉。諸角も、斎を亡くした息子と重ねているのだろう、何かと親身になってくれる。千秋や凜子は、例えば兄や姉がいたらああいふ感じなのかもしれない。そして、彼らの中の誰とも違うベクトルで、斎を想ってくれる

那々。

(……だから、大丈夫)

だいじょうぶだよ、父さん。

僕には、大事な人がこんなにできた。

だからもう、自分から死のうとはしない。彼らを守るために命を張ることはあるかもしれないけれど、それは命を投げるんじゃない。彼らを守って、自分も生き残る未来を掴むためだから。

そう思わせてくれる人たちに、ただ感謝した。

モカブレンド一杯ですぐに帰った諸角と入れ替わるように、千秋が店に姿を見せた。レミントンが仕上がったと、連絡しておいたためだ。

「一圓さん、この間はありがとうございました」

「おう、怪我の方、大したことなくてよかったな。で、俺のレミントン、できたって？」

「はい。けどまず、コーヒーですよね？」

「ああ、エスプレッソ頼む」

「分かりました」

立河が淹れ始め、斎は銃の準備をしようと奥に入りかける。すると、千秋が彼を呼び止めた。

「ちょい待ち」

「何ですか？」

「俺とここでな、おまえに銃を見て欲しいって奴がいるんだけど。出張整備とかって、頼めるのか？」

「出張？ 一圓さんの仕事場って、確か……」

「ま、詳しい話は下でするとして。ここって出張やってたっけ？」

「僕に足がないですから、やってなかったんですけど……いい機会だから、バイクくらいは持ってもいいかなって。今回のことじゃ、足がないのが不便だったとことん痛感しましたから」

「ああ、いちいち人に送ってつてもらうんじゃ不便だもんな。じゃ、可能性はアリなわけだ」

「そうですね、やってもいいかなって思ってます。ただそうなって、喫茶店の方が休みがちになっちゃうと困るかなって」

「こっちは構わんぞ。別に手間暇かかる料理を作るわけでもないんだしな。エスプレッソ、どうぞ」

立河がカップを千秋の前に置く。

「ども。じゃあ、頼んでいいか？」

「はい。ただ、バイク買うのが先ですけど」

「そりゃそうだ」

笑って、千秋はエスプレッソに口をつける。斎は奥に入って着替えると、一階に下りて店の鍵を開けた。棚から千秋のレミントンを、スコープとサイレンサー付きのフルセットで取り出す。サイトの照準は調整してあるが、千秋の好みもあるだろうから後は本人に任せることにする。機関部やバレルに被害がなかったのが救いだ、傷が入っていたストックやらアクセサリやらは根こそぎ交換になってしまった。それでも思ったより時間がかからなかったのは、日本にもメーカーの代理店ができて、パーツの入手が比較的楽になっているためだ。よほどレアな銃でなければ、一日から二日で大抵のパーツが手に入る。とはいえ、銃工の資格証提示が必須条件なのはもちろんだが。

ややあつて下りて来た千秋は、すっかり直ったレミントンに目を輝かせた。

「おーっ、俺のレミントン！ やつと退院だな」

「サイトの方、こっちでも調整してますけど、やっぱり実際に使うのは一圓さんですから。どうですか？」

「ん、いいんじゃない？ レンジ借りるわ」

「はい」

千秋がレミントンを抱えてシューティングレンジへ下りる。斎は明細書と領収書を用意して、試射後のクリーンアップの準備を始めた。

試射を終えた千秋が受け取りの書類にサインしている間に、さつとクリーンアップを済ませる。

「やっぱ本職、早いな」

「どうも。で、さっきの出張の件ですけど、どこへ行けばいいんですか？」

「ああ、俺らの待機所が藤城の本社ビルにあるんだ。そこへ来てもらえるか。時間なんかは、そいつの都合次第になるから、また連絡

する」

「分かりました。じゃ、これ、明細と領収です。ありがとうございます」

「おう、また頼むわ」

代金と領収書のやり取りを済ませて、千秋はペニーハウスを後にした。斎がバインダーを片付けていると、カウンターの電話が鳴った。内線だ。

「叔父さん？」

「斎、上の方、客が入って来たからちよつと戻ってくれ」
「分かった」

斎は急いで鍵を閉め、階段を駆け上がっていった。
やはり出張整備や修理は、件数を抑えた方がいいかもしれない、
と思いながら。

彼は、静かに微笑^{わら}っていた。

那々はそれを見つめる。五年前の、出会った頃の姿をした彼は、
バンの窓越しに囁きかけた。

『……さよなら、だよ』
置いていかないで、と言いかけてやめた。代わりに、まっすぐ彼
を見つめる。

「……またね」

そう言つと、彼は驚いたように目を見開いて、そして微笑し、手
を伸ばした。

『うん、またね』

ふわり、と彼の手が髪を掠め、バンが走り去っていく。那々はそ
れを見送った。もう、泣くことはない。

これで終わりじゃない。また、会える。

今度は待っているだけのつもりはない。自分からでも、会いに行

けるから。

ベルの音に、那々は目を覚ました。

毎年のように見ていた夢。だが来年からは、もう見ることはないだろう。だからこれは、五年前の彼との別れだ。

そして、現在の彼との再会^{いま}の約束。

那々はベッドから下りて、部屋を出た。

リビングのあの窓を、思い切って開けた。毎年、彼に祈っていたあの窓。

もう、祈ることはない。

その代わり、会いに行こうと思った。

「　　那々？　起きたの？」

「うん」

母の声に振り返ると、母は窓からの光に眩しげに目を細める。

「　　今日もいい天気ねえ」

「　　そうだね」

「　　ほら、起きたんならさっさとご飯食べちゃいなさい」

「　　はい」

返事をして、窓に向き直った。流れ込んでくる、朝の澄んだ空気。

今日もまた、ペニーハウス　に行こう。

立ち止まっていた分を取り戻しに、斎に会いに行くのだ。

そう決めて、大きく息を吸い込んだ。

S h o o t : 1 E n d .

“End”とありますが、完結ではありません（笑）。

章ごとの区切りとしての表示ですので、紛らわしいですがよろしく
お願いします。

S i d e S t o r i e s : 1 “ P a i n l e s s D o g ” (前書き)

時系列は 青銀天聖教団 崩壊直後くらい。 諸角さん視点です。

なあ、親父さんには会えたかい？

ざん、と波の打ち寄せる音がした。

諸角久尚は、道の端に立って下を覗き込む。海沿いの人通りのない道。ガードレールの外はすぐ崖になっていて、数メートルの落差の下には、かなり強く波が打ち寄せている。深さがあるらしく、海底は見えない。

捜査の途中、運転していた部下に路肩に車を止めさせ、諸角は車を降りて周囲を見回す。

「……ずいぶん、高いんだな」

崖下を覗き込み、諸角は息をつく。視線を横に走らせると、すぐ脇には、申し訳程度にロープを張られた箇所がある。ずっと伸びたガードレールは、そこだけがねじ切れ、加えられた衝撃の凄まじさを物語っていた。

ここから、彼は海に飛び込んだのだ。

ロープの下には、花束が一つ、海風に揺れていた。

ペインレス・ドッグ。

ここしばらく世間を騒がせていた、青銀天聖教団による誘拐・監禁事件。彼はその事件を明るみに出すきっかけとなった人物だった。子供を人質に、その家族にテロへの協力を要求していた卑劣な犯罪は、その子供たちの見張り役だったペインレス・ドッグによって暴かれ、やがて教団の裏の顔すべてが白日の下に晒されることとなったのだ。

だが、その後の世界に彼はいない。

子供たちを助けたその足で、彼は姿を消し、ここから車ごと海へと転落した。車はすぐに見つかったが、遺体は潮に流されたのかつに見つからなかった。事故・自殺 様々な憶測が乱れ飛んだが、真相は彼自身と共に、この海の底に永遠に沈んだままだ。

彼は、養父に会えたのだろうか。

捜査の過程で、彼が教団の闇に染まっていた理由が、徐々に明かされつつあった。

ペインレス・ドッグ は、とある地方都市で生まれた。

彼の母が彼を身ごもったのを知った時、父親である男はすでに彼女の元を去っていた。不規則な生活がたり、彼女は自分の体調の変化に気づくのが遅れた。彼女が妊娠に気づいたのは、もう妊娠期間の半分以上を過ぎた時だ。すでに中絶できる時期ではなかった。

不承不承彼を産み落とした母親は、彼を愛そうとはしなかった。

育児放棄、そして度重なる暴行。 ネグレクト ペインレス・ドッグ が命を繋

いでいられたのは、彼女の母親 彼にとっては祖母に当たる

が、警察沙汰になるのを恐れて時折面倒を見ていたからだ。

しかし彼女はついに、自分の息子を 青銀天聖教団 にわずかな金で売り渡した。

支部の人間が子供を探しているという噂を、インターネットで知ったらしい。そうして実の母親に売られた少年は、当人の意思とは無関係に教団へと連れて行かれた。

逮捕した教団の人間からその話を聞いた時、諸角は胸が悪くなるような気分がした。

せっかく授かった子供を、金と引き替えに売り渡す 息子を事故で亡くした経験のある諸角にとって、その行為は子供に対する冒涇にすら思えた。目の前に彼女がいたら、殴っていたかもしれない。それでも救いに思えたのは、教団内で彼が、自分を人として扱っ

てくれた相手に出会えたことか。

教団内で サイレント・ファンク 静かなる牙 と呼ばれていた男。彼が ペインレス・ドッグ の師であり、養父でもあった。彼の存在があったからこそ、養い子は人としての愛情を知り、心を失った快樂殺人者への道を歩まずに済んだ。

ペインレス・ドッグ にとっては、彼がすべてだったのだ。彼の傍らにいたために銃を取り、そして彼がいなくなった世界から、ためらいなく去ってしまうほどに。

諸角は重い眼差しで、どこまでも広がる海を眺めた。

なあ、もう少しだけ待ってれば、違う生き方もできたんじゃないのか？

ペインレス・ドッグ の行為は確かに違法であり、訴追は免れなかっただろう。だが、子供たちを救い、ひいては東京をテロの脅威から救った彼には、少なからぬ共感と同情が寄せられていた。現に、今足下で揺れている花束も、子供を救われた家族が捧げたものだ。彼らは確かに、少年に対する感謝を抱いている。

ペインレス・ドッグ がもし、生きて逮捕されていたならもちろん罪は償わねばならなかっただろうが、それでもその先に、違う人生が待っていたかもしれない。

この世界のことをもつと知って、そして家族とは違う意味で愛する相手を得て……最初から愛されていたなら得られたはずの人生を、遅ればせながらも掴めていたかもしれない。

教団内で時を止められ、そして少年のまま逝ってしまった彼。

もし、子供を守り、慈しんでくれる親の元に生まれていたなら。

きつと彼は今頃、平凡でも幸せな人生を生きていた。

不意に息子のことが頭をよぎり、目を閉じた。

愛していたのに、どうしようもない運命でこの世を去ってしまった息子。

実の親から愛されず、唯一愛してくれた養父ちちを追ってこの世を去ってしまった彼。

この世界は、何もかもが噛み合わない。

なあ、そつちで、会えてたらしいな。

どこか息子に重なる彼に、胸中でそう呟いた。

ずいぶんそこに立ち尽くしていたことに気づいて、諸角は海から目をそらした。車に向かって歩き出す。部下に缶コーヒートの一本も奢ってやるかと思った時、反対方向から来た一台の軽自動車とすれ違った。

車は、ついさっき諸角が立っていたガードレールの間隙の、すぐ近くで停車する。

何気なく振り返った諸角の視界の中で、運転席から一人の女性が降りてきて、まさに諸角が立っていた同じ場所に足を止めた。

ちらりと振り返られ、諸角は止めかけた足をまた動かし始める。

彼女はこちらを一瞥しただけで、すぐに海に向き直った。右手には、小さな花束を携えている。

救われた子供の誰かの、母親だろうか。それにしても少し年が上のようだ。

そう思いながら、諸角は車に乗り込んだ。

なおも気になって、ミラー越しに見た彼女は、奇妙に寂しげに見えた。花束を投げ、目を伏せる。

突然天啓のように思い当たった考えに、諸角は思わず振り向いた。

「諸角さん？」

「……いや、何でもない」

部下の声に我に返り、ミラーに視線を戻す。

最後に彼女が目伏せたのは、ただ海風に耐えかねただけか、それとも。

(……俺の考えることじゃない、な)
そう思って、ミラーからも視線を外した。

愛されていなかった少年。
届かなかった想い。

彼はもう、養父と共に逝っただろうか。

「諸角さん、もう本庁に戻りますか？」

「ああ、そうしてくれ」

部下の声に答えながら、シートに身を沈めて蒼い海を見る。

もうここに来ることはないだろうかと、ぼんやりと思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9605/>

C i t y F a n g

2010年10月8日16時11分発行